

奈良国立文化財研究所年報

1 9 7 5



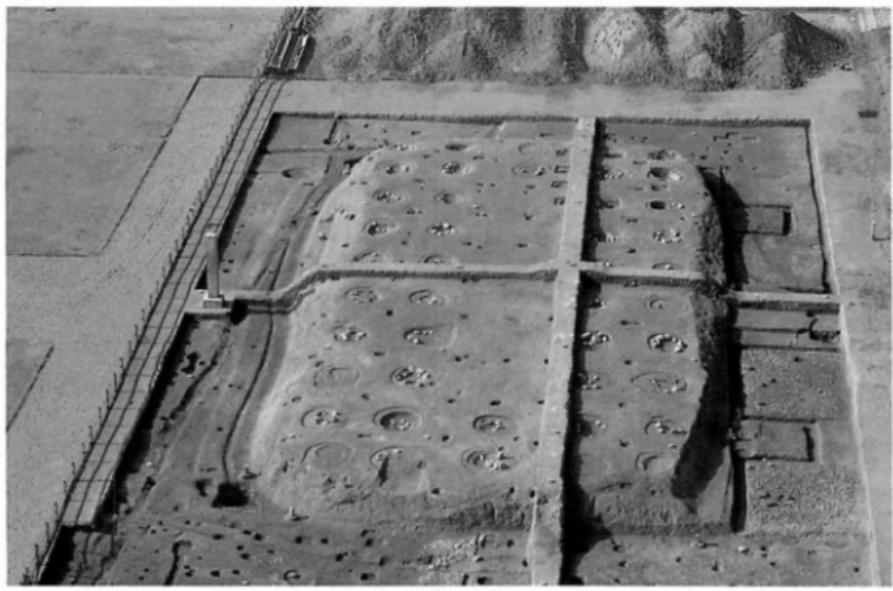
奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所年報

1979

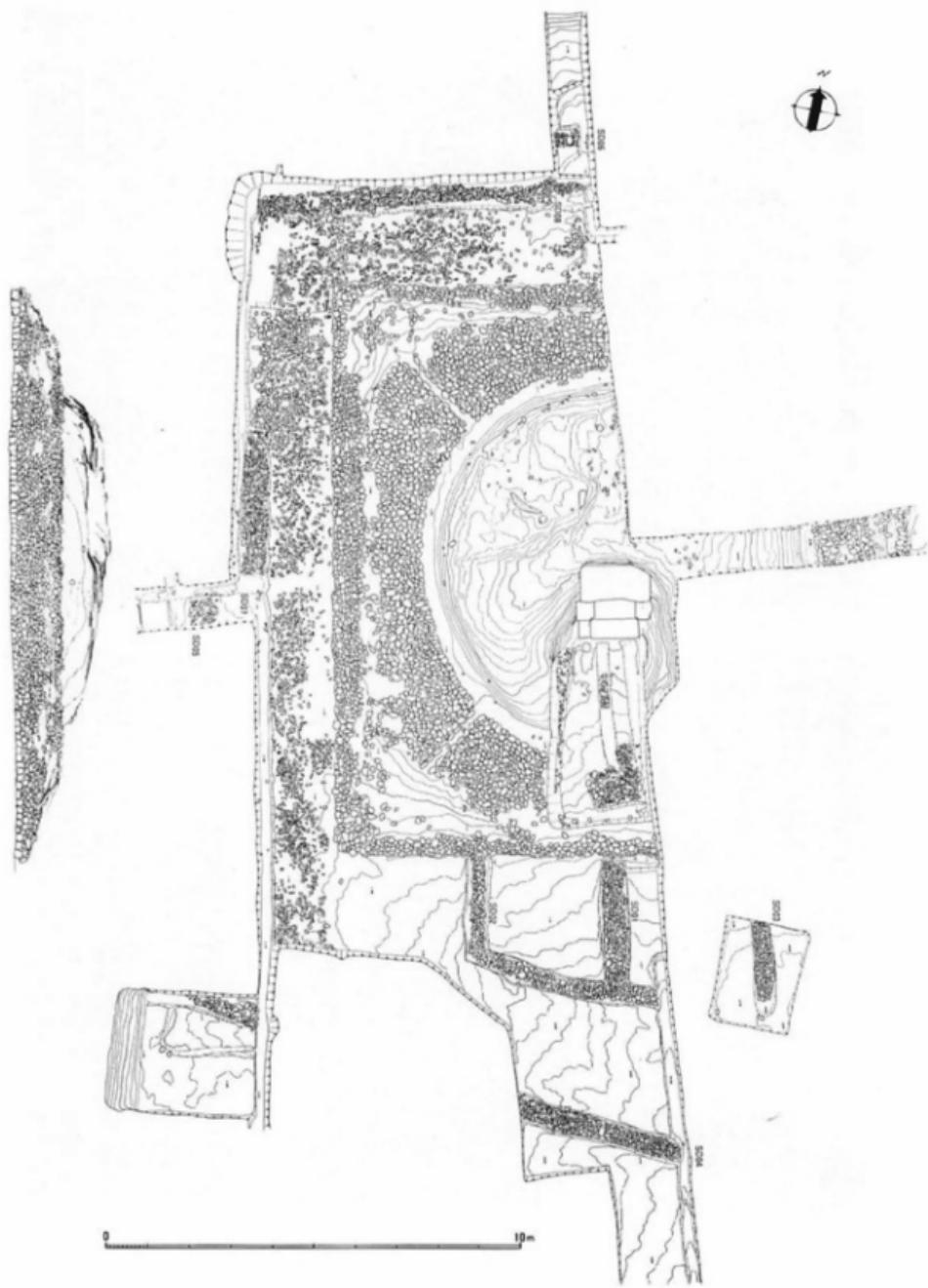


奈良国立文化財研究所



1 山田寺金堂跡発掘遺構（上） 平城宮大佛殿跡発掘遺構（下）

撮影 井上直夫 撮影 幸雄





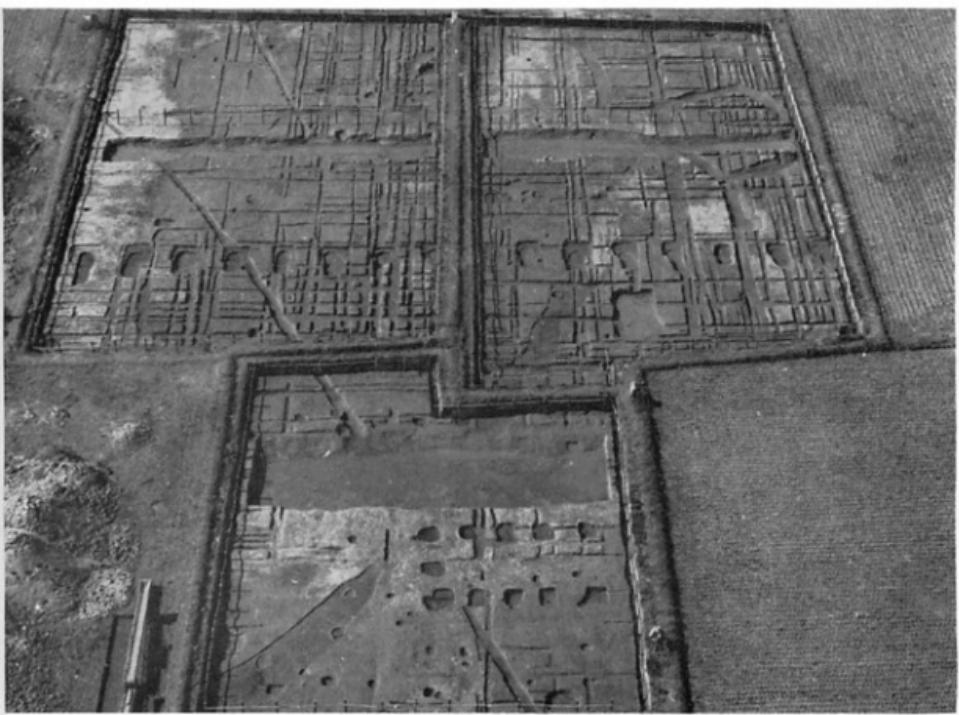
3 塔頭東面第1段石仏(上) 東院東面大垣西面落溝・暗渠(下)

摄影 仙 幹组



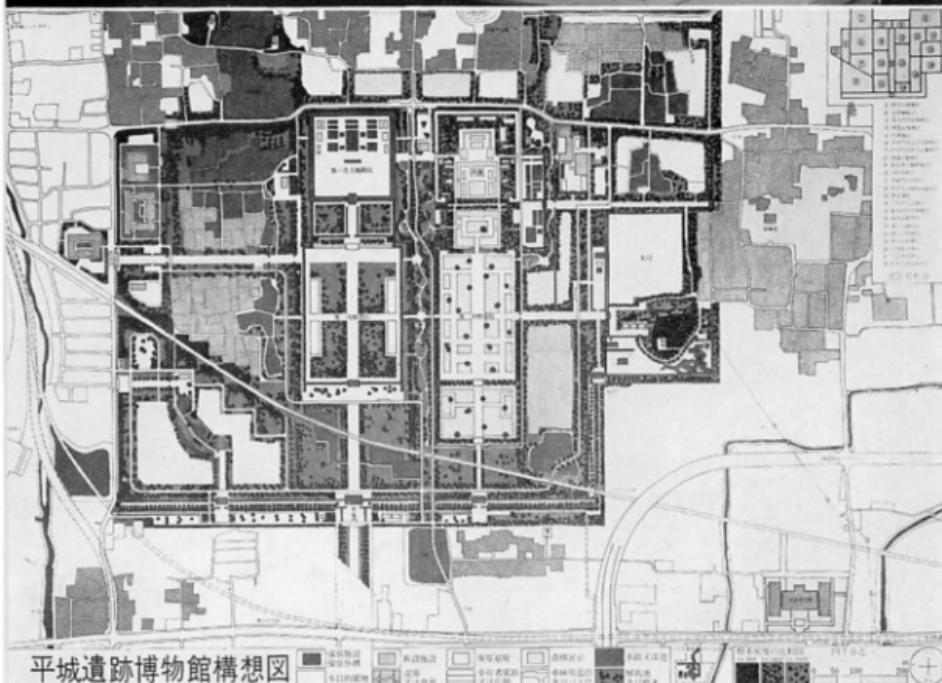
4 平城宮第1次朝堂院瓦窯遺構(上) 音如ヶ谷瓦窯発掘遺構(下)

撮影 佃 幸雄



5 山田寺金堂跡発掘遺構(上) 藤原宮東面大垣発掘遺構(下)

撮影 井上直夫



平城遺跡博物館構想図

7 平城宮跡池沼・草礎の整備(上) 平城京左京三条二坊十五坪復原模型(中) 平城遺跡博物館構想図(下)

目 次

口絵	1 山田寺金堂跡発掘遺構 平城宮大極殿跡発掘遺構 2 石のカラト古墳発掘遺構 3 頭塔東面第一段石仏 東院東面大垣西雨落溝と暗渠 4 平城宮第1次朝堂院発掘遺構 音如ヶ谷瓦窯発掘遺構	5 朱雀大路調査状況 坂田寺跡出土軒瓦 6 坂田寺跡井戸 川原寺跡回廊暗渠 7 平城宮跡池沼・草園の整備 平城京左京三条二坊十五坪復原模型 平城遺跡博物館構想図
平城宮大極殿の調査	1	
山田寺金堂・北回廊の調査	5	
石のカラト古墳の調査	8	
ロープウェイ方式撮影システムの開発	9	
頭塔の調査	10	
興福寺小字房関係文書について	13	
今井町の町並調査	16	
山口県近世社寺建築の調査	18	
平城宮跡と平城京跡の調査	20	
飛鳥・藤原宮跡の調査	28	
古代の誕生仏の調査	37	
武吉氏寄贈の古瓦	38	
新たな石器の図化と応用について	39	
埋蔵文化財センターの情報処理活動	40	
千歳市キウス環状土籬群の測量	42	
平城宮跡・藤原宮跡の整備	43	
遺跡・遺物の保存科学(6)	46	
埋蔵文化財センターの新研修棟	49	
平城遺跡博物館構想について	50	
三手先構造の変遷	52	
平城京貴族住宅の復原模型	53	
在外研修報告	54	
公開講演会要旨	55	
調査研究彙報	56	
奈良国立文化財研究所年報総目録(1958~1978)	61	
奈良国立文化財研究所要項	65	

奈良国立文化財研究所 年報 1979

発行日 1979年9月5日 編集・発行 奈良国立文化財研究所 担当 安原勝示 甲斐忠彦 印刷 奈良明神社

目 次

口 結	1 山田寺金堂跡発掘遺構	5 山田寺金堂跡発掘遺構
	平城宮大極殿跡発掘遺構	藤原宮東面大垣発掘遺構
1	2 石のカラト古墳発掘遺構	6 大曾大寺塔跡発掘遺構
	3 頭骨東面第1段石仏	飛鳥寺東面南地区発掘遺構
	東院真言と大日西雨落瀧と暗渠	7 平城宮跡沼沼・草園の整備
	4 平城宮第1次朝堂院発掘遺構	平城京左京三条二坊十五坪復原模型
	音如ヶ谷瓦窯発掘遺構	平城遺跡博物館構想図
平城宮大極殿の調査.....1		
山田寺金堂・北回廊の調査.....5		
石のカラト古墳の調査.....8		
ロープウェイ方式撮影システムの開発.....9		
頭塔の調査.....10		
興福寺小字房関係文書について.....13		
今井町の町並調査.....16		
山口県近世社寺建築の調査.....18		
平城宮跡と平城京跡の調査.....20		
飛鳥・藤原宮跡の調査.....28		
古代の誕生仏の調査.....37		
武吉氏寄贈の古瓦.....38		
新たな石器の図化と応用について.....39		
埋蔵文化財センターの情報処理活動.....40		
千歳市キウス環状土籠群の測量.....42		
平城宮跡・藤原宮跡の整備.....43		
遺跡・遺物の保存科学(6).....46		
埋蔵文化財センターの新研修棟.....49		
平城遺跡博物館構想について.....50		
三手先構造の変遷.....52		
平城京貴族住宅の復原模型.....53		
在外研修報告.....54		
公開講演会要旨.....55		
調査研究集報.....56		
奈良国立文化財研究所年報総目録(1958~1978).....61		
奈良国立文化財研究所要項.....65		

奈良国立文化財研究所年報1979

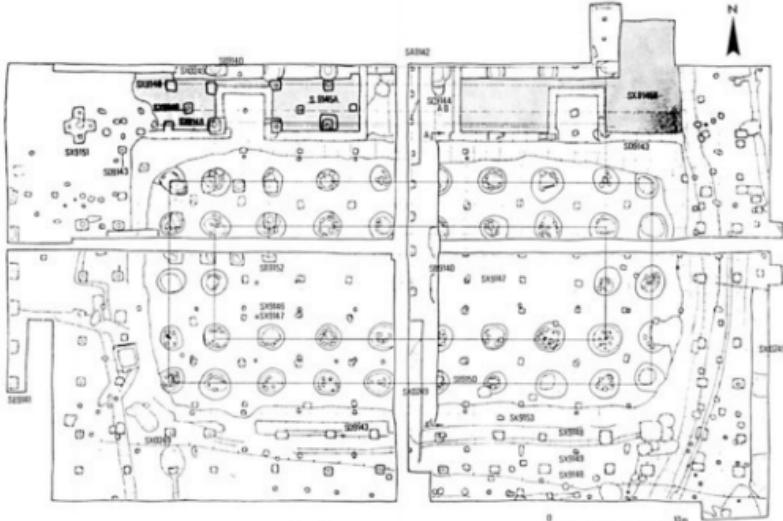
発行日 1979年9月5日 編集・発行 奈良国立文化財研究所 負責 安原啓示 甲斐忠彦 印刷 奈良明新社

平城宮大極殿の調査

平城宮跡発掘調査部

近年、難波宮、長岡宮、恭仁宮などいわゆる大極殿遺構が次々に解明されてきた。平城宮の大極殿については、昭和30年、大極殿回廊の東南隅を平城宮の第1次調査として発掘したほかは未調査のままであった。その理由の一つに、大極殿土壇上の松の木の存在があった。この木は大正時代に平城宮跡の保存を始めた人々によって植えられたものであり、長い間「大極殿の松」として親しまれ、平城宮研究の端緒となつたこの土壇と共に平城宮跡の象徴ともいえるものであった。しかるにこの老木も数年前から松喰虫の被害を受け、以後薬剤等の治療の甲斐なくついに昨年度枯死してしまい除去せざるをえなくなった。この後どの様な整備を行うかが問題になったが、何れにせよ遺構の解明が不可欠であるとの考えにたち、平城宮跡第113次の調査として大極殿の調査を行なったわけである。検出した遺構には前方後円墳1、礎石建物1、掘立柱建物3、柱穴列1、土壇1などがあり、このうち、建築遺構は奈良時代前半期(下層)後半期(上層)それに9世紀後葉の3時期に分けられる。

下層遺構 宮造営以前にこの地区に存在していた前方後円墳(神明野古墳S X0249)を削平し、同時に緩斜面を平坦に造成している。下層遺構はこの整地面に造営されたものでSB9140、SB9141、SA9142がある。掘立柱建物SB9140は桁行7間、梁行4間、15尺等間の東西棟である。平面型式は四面廂と推定され、北廂は大極殿SB9150の建つ基壇の北側で検出し、南廂は



推定第2次大極殿基壇遺構図

基壇断ち割り箇所において確認した。この建物の南北方向の中軸線は後述の S B9150と同一で、梁行の柱筋も一致するが、建物位置はやや北に寄る。S B9141は調査区の西端にある5間以上、10尺等間の柱列で、更に南に延びる南北棟建物である可能性が強い。S A9142は基壇断ち割り箇所で7間分を検出した。S B9140の南北方向の中軸線上にある柱穴列で更に北に延びることも考えられる。柱間寸法は7~10尺と不揃いである。

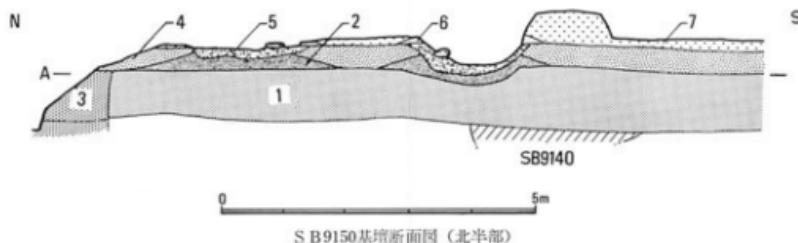
上層遺構 下層建物廃絶後に造営された基壇建物とそれに付随する諸遺構である。S B9150は東西46.0m(155天平尺)、南北23.8m(80尺)の凝灰岩壇正積基壇の上に建つ礎石建物で、桁行9間(129尺)、梁行4間(54尺)、四面廂付の東西棟である。柱間寸法は身舎15尺等間、廂の出が12尺で側柱心からの基壇の出は13尺である。基壇の残存状態は良好で、礎石は残っていないがその据付位置を全て確認することができた。階段は南面では中央間とその東西の3間目の3ヶ所に設けられる。北面も同様に南面と対応する位置にあるが、中央階段には大極殿後殿に連なる軒廊 S C9144Bの基壇(幅8.15m)が取り付く。軒廊基壇には大極殿基壇北端から北約3.3m(11尺)に梁行柱間寸法4.5m(15尺)の一対の礎石抜取痕跡がある。軒廊は当初幅3.8mであったものを後に拡幅している。階段幅は4.45m(15尺)、出は3.55m(12尺)である。東・西面では後述する足場 S X9148の柱位置の状況から、南から2間目の位置に各1ヶ所の階段を設けていたと推定される。S D9143は地覆石の抜取痕跡で、幅60cm前後、深さ30cmの溝状を呈する。同遺構は基壇北側では残存状態が良好で、西・南側でも部分的に確認した。北面東階段の西入隅部分には凝灰岩地覆石が2点、東西方向に相接して原位置に残存していた。上面には羽目石および束石を受ける継ぎ合せ仕口が明瞭に残る。基壇周囲には前後2時期にわたって石敷が敷設される。当初直径1cm前後の小石敷 S X9145Aであったものを後に嵩上げして直径5~15cmの砾を敷き詰めた小石敷 S X9145Bに改修している。石敷遺構は基壇北側で検出したもので、東・西・南側では後世の削平のため残っていない。基壇中央部分を南北方向に断ち割り次のような基壇築成工程を明らかにした。(1)南に緩やかに傾斜する下層整地面上に、まず一まわり小規模な土壇①(南北20.5m、東西約41.9m)を築成する。この上面は水平面であるので高さは北で75cm、南で120cmを測る。積土には下半部に小砾を多く含む暗褐色粘質土を多用し、上半部には精良な明黄褐色粘質土を用いており、厚さ2~10cmの版築層が15~16層えられる。(2)土壇①の上面の礎石据付位置に基底部での直径2.7~3.2m、高さ0.50~0.55m(復原値)の円丘形の盛土②を行なう。円丘の基底部に厚さ2~5cmの固く締った層を凸レンズ状に2~3層積上げた後、厚く粘質土を盛るもの(北側柱位置)と土壇①の上面を30cm程椀底状に掘り下げてから粘



凝灰岩地覆石(北面東階段西入隅部)

平城宮大極殿の調査

質土を埋めて円丘を形成するもの（入側柱位置）とがある。この相違は礎石抜取痕跡から推測される礎石の厚さに対応しており、礎石据付のための仕事の差をあらわしている。(3)土壤①の四周を全面的に30cm程地下げを行ない基壇を拡幅する。その幅は南側1.25～1.40m、北側1.05m、西側1.42mで東側は未確認である。この部分の版築層は厚さ3～20cmの粘土あるいは砂質土で小礫や凝灰岩細片を多く含み極めて固く締っている（土壤③）。南側では①と③の間には縦方向に幅9cmの非常に脆い土層が認められるが、性格については不明である。なお軒廊の前身基壇S C9144Aはこの拡幅と一緒にして築成され、厚さ5～10cmの固く締まる層を積上げている。一方軒廊基壇拡幅部分の積土には凝灰岩片や瓦片が混入しており土質も柔かい、(4)土壤①の上面に足場S X9146を組む。そのうちに土壤①・③および円丘形盛土⑨の上全面にわたって版築を重ねる（積土④）。版築層は5～6層あり全体で35～38cmの厚さである。小礫を多く含み全般的に固く締っている。(5)④の最上層に厚さ5cm前後の暗黄白色砂質土を全面に均一に敷き詰め、この段階で礎石据付の掘形を掘削する。掘形は④の積土と⑨の円丘形盛土部分を底状に掘りくぼめており、その深さは礎石の厚さに対応していると考えられる。掘形内には固く締った黄灰色の粘質土と礎石の根固め石があり、根固め石には直径20～80cmの河原石が使用される。また礎石据付痕の底面に直径5cm前後的小礫を敷いている箇所もある。(6)礎石を設置した後、礎石の周囲に淡黄褐色粘土の根巻土を盛り上げ礎石の安定をはかる。(7)更に全面にわたって版築による積み上げを行ない土壤部分の築成を完了する。なお残存していた基壇の高さは地覆石上面から1.3～1.5mである。(8)階段裏込の積土を行なう。厚さ7～20cmの版築層であるが、基壇本体よりも粗雑である。以上のような築成工程が確認されるのであるが、この中で②にみる円丘形盛土は、礎石の厚さに対応して予め土壤①の上面を掘りくぼめており、また積土④の段階では円丘形盛土の頂部つまり中心部が④の上面にみられたと推察されるので、礎石据付のための基礎地業であると同時に据付の位置表示の機能を果たしていたことも考えられる。一方⑨の拡幅部分については、基壇の改作＝拡張という可能性も否定しきれないが、前身軒廊S C9144Aの基壇と一緒にして築成されており、一連の基壇築成過程における一工程と解釈している。S B9150に付随する造構として、造営、解体に伴う4種類の足場がある。S X9146はS B9150の造営に伴う基壇上の足場である。柱位置はS B9150の柱間中央通りにある。S X



S X9147はS B9150の解体に伴う基壇上の足場で柱位置はS X9146と同様にS B9150の柱間中央通りにあるが身舎の内側部分の棟通りにも配される。S X9148はS B9150の造営に伴う足場で基壇の四周を二重に囲むように柱を配しているが、西北隅と東北隅の4間分の柱穴がない。梁行の柱筋はS B9150の柱筋とほぼ一致するが、北面、南面の階段部分では17尺と広く、その両側の柱間が1尺ずつ狭くなっている。東面、西面についてもS B9150の南から2間目の位置のS X9148の柱間寸法が17尺であり、前述のようにこの位置に階段が設けられていたと推察される。S X9151は基壇北西隅から西3.0mの位置にあり、十字型の掘形をもつ。中央に径50cm程の柱を、四方に径25cmの柱を設置している。S X9149はS B1950の造営に伴う足場で基壇の四周を一列に廻る。柱位置はS B9150の柱間中央通りの延長上にあり基壇端から1.5m離れている。この足場は基壇上の足場S X9146と一体となって機能していたことが考えられる。

平安時代の遺構 基壇上西北隅にある掘立柱建物S B9152は桁行3間、8尺等間、梁行2間、9尺等間の東西棟でS B9150の廃絶後に建てられている。柱は全て抜き取られ、柱抜取穴埋土から9世紀後葉に属する土師器が出土している。S K9153は基壇南側面の傾斜面に検出した径50cmの円形土壙である。埋土中には黒色炭化物が含まれ、底面からは鉄製鋤鎌車と10世紀後葉に属する土師器皿4個体が出土した。

遺物 遺物は大半が瓦類である。完形に近い丸・平瓦が多く鬼瓦・駕斗瓦などの道具瓦もある。軒瓦は包含層から出土したものと含めると軒丸瓦85点、軒平瓦96点が出土した。そのうち軒丸瓦は平城宮第Ⅱ期の6225型式が44点(51.8%)、軒平瓦も同時期の6663型式が63点(65.6%)あり、他型式を圧倒している。

まとめ 従来の成果(大極殿回廊東南隅地区(第1次調査)、東朝集殿地区(第48次調査))と考え合わせると、特に軒瓦の共通性から大極殿S B9150、回廊とその南に拡がる朝堂院地区の造営が同時期であることが明らかになった。時期については造営時の所用瓦と考えられる軒丸瓦6225型式、軒平瓦6663型式が平城宮第Ⅱ期(養老5~天平17年)に位置付けられていることから、その期間内に造営時期を想定することができる。『続日本紀』に抱ると天平12年(740)の恭仁遷都に伴い平城の大極殿並びに歩廊を遷造したとされる。恭仁宮大極殿は先年実施された京都府教育委員会の発掘調査によると桁行9間、梁行4間の四面廻付東西棟で、柱間寸法は身舎桁行17尺、梁行18尺、廻の出15尺であり、S B9150より大規模であるから、天平12年に運ばれた「平城大極殿」はS B9150ではあり得ないことになり、前記の造営想定年代に若干の無理が生じてくる。この問題についてはS B9150基壇築成における前述の工程を一連のものとするか、2時期とみるかにも大きくかかわり、また下層遺構の時期、性格とも関連してくるが、今後の検討に委ねたい。S B9150の廃絶に関しては、その時期を示す遺物は皆無であるが建築部材をはじめ礎石、基壇化粧石に至るまで短期間に意図的に抜き取り遊び去っている状況から、長岡遷都(延暦3・784年)あるいは平安遷都(延暦13・794年)に関連すると思われる。(井上 和人)

山田寺金堂・北回廊の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

山田寺第2次調査は、金堂・北回廊を対象に実施し、従来例をみない特異な平面形式の金堂造構を検出するなど飛鳥時代寺院に関して多大な成果を納めたのでここに概要を報告する。

金堂基壇の遺存状態は良好で、東西21.6m(約65尺)、南北18.2m(約55尺)、高さ2mの壇正積基壇を検出した。基壇上面では礎石抜取穴12、地覆石抜取穴3を検出するとともに、創建時の位置を保った礎石2個を確認した。金堂建物の平面は、桁行3間(約9m)、梁行2間(約6m)の身舎の四面に、桁行3間(約15m)、梁行2間(約12m)の廟がつき、建物全体としても正面3間、側面2間となる特異な平面形式が明らかになった。このような建物平面は従来知られている身舎と廟の関係では解釈し難く、おそらく構造的には法隆寺金堂のような雲型肘木が使用され、肘木の配置は玉虫厨子にみられるように扇形に割付けられたものと推察される。柱間寸法は、基準尺を1尺33.3cmに復原すると造構によく合致し、正面3間が15尺等間、側面2間が18尺等間となり、身舎についても中央間15尺、両脇間6尺、側面2間9尺等間となる。現存する2個の礎石は花崗岩を用い、一辺1mの方座の上に径0.9mの單弁の蓮華座をつくり、その上に径0.6mの円柱座を造り出している。地覆石も花崗岩で、幅0.3m前後、長さ1.3m、高さ0.25mの長方形の地覆座をもつ。地覆座の中央には壁内の間柱をうけるくりこみが認められる。地覆石の抜取穴は入側柱列には認められず、現存する2個の礎石にも地覆座がないことから、入側柱間は開放であったものと考えられる。礎石・地覆石は、基壇築成途上で据付け掘形を穿ち、根石を用いずに据えられている。

基壇の化粧石はほとんどが抜取られていたが、基壇西北部に地覆石と羽目石が残り、全体の旧状を窺うことができた。地覆石には長さ0.6~1m、幅0.3mの花崗岩を横長に用い、前面から0.25mのところに欠込みを施して羽目石との安定をはかっている。羽目石は凝灰岩で、地覆石前面から約0.1m内方に面を揃えている。羽目石の両端には堅樋状の造出しが施され、東石を立てたかのような効果をみせている。

基壇各辺の中央には階段を設置しているが、西階段を除く3箇所では石が抜取られており、その痕跡を検出したに留まる。抜取り痕跡などから階段の規模を復原すると、南北両階段が建物の中央間に合せて幅5m(15尺)、東西両階段が幅4.45m(13尺)で、階段の

燎籠と礼拝石

山田寺第2次調査遺構配置図

出はいずれも1.6m(約5尺)となる。西階段には花崗岩の段石最下段と凝灰岩の北側耳石が残る。耳石の表面には動物の前肢とみられる浮彫りが残っている。これは白虎の一部とも推測されるものである。階段の構築にあたっては、基壇の一部を削除してから再度版築しなおしている。なお、金堂基壇の築成に際し、地盤の軟弱な部分にのみ掘込み地業を行なっている。

基壇周辺には、階段の出に合せた幅1.6mの犬走りがめぐる。犬走りには「櫛原石」と呼ばれる扁平な板石を4列に敷きつめ、外周に縁石を立てる。この敷石面は焼けた痕跡が著しく、金堂も塔と同様に焼失したことを示していた。金堂南面の中央には礼拝石S X011が犬走り縁石に接して設置されていた。東西2.4m、南北1.2m、厚さ0.2mの板石で、直角に面を取り、表面を丁寧に磨いている。石材は「竜山石」と通称される流紋岩質溶結凝灰岩である。礼拝石の南3mには燈籠S X012が伽藍中軸線上に据えられている。単弁八弁の反花を造出した凝灰岩製の八角形台座と花崗岩の台石、それらを据えた玉石組の壇が残り、周囲から凝灰岩製の火

山田寺金堂・北回廊の調査

袋片も出土した。

金堂周辺は創建以降、2時期にわたって大規模な整備が行われている。その第1期は、旧地表面に若干の整地土を置いた後、瓦を敷設するもので、8世紀後半頃の整備と推定される。第2期は瓦敷の上にパラスを敷くもので、10世紀代に行われたものと考えられる。

北回廊S C080は、発掘前の推定どおり金堂・講堂間から検出され、山田寺の伽藍配置が「四天王寺式」とは異なることを確認した。8間分を検出し、東寄り5間分12箇所で礎石抜取穴と据付け痕跡を、西寄り2間分5箇所で礎石落し込み穴を検出した。回廊造営の基準尺は、金堂と異なり、1尺を30cmとみなした方が適切で、梁行12尺(3.6m)、桁行13尺(3.9m)に復原できる。落し込まれた礎石は、一辺0.7mの方座上に径0.6mの円柱座を造り出した花崗岩礎石である。北側の落し込み穴から発見した3個の礎石には地覆座がつくことから、回廊の北側柱列が仕切られて内庭側は開放になっていたことがわかる。基壇は上面と北側を削平されているが、南縁には花崗岩玉石の抜取穴が並び、乱石積の基壇であったことを示している。基壇幅は6.3m(21尺)に復原できる。基壇の南には幅0.45mの雨落溝S D081がある。

その他の遺構としては、金堂造営工事に伴う廃物の投棄壙S K045、瓦敷内に埋込まれた円筒土管S X015、11世紀代の土師器を出土したS K206、金堂焼失以降の土壤S K203・207、溝S D208~211・213・215・221~223、井戸S E218などがある。

出土遺物には大量の瓦塊類のほか、金属製品(飾金具・鉢・釘等)、建築部材(斗拱等)、土器類、塔礎などがある。瓦についてみると、單丸八弁蓮華文の所謂山田寺式軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が主体である。山田寺式軒丸瓦は6種に細分されるが、瓦当面径が最大のA種が中心を占める。5種に分かれる極先瓦でも面径が大きく彫の深いA種が過半を占める。

以上、今回の調査で山田寺金堂の規模とその特異な構造が明らかになるとともに、北回廊の検出によって四天王寺式とは異なる伽藍配置を確認することができた。また、金堂の創建年代を示す資料として金堂造営に伴う土

壙S K405の出土土器(7世紀中頃)がある。これは『上宮聖徳法王帝説』の裏書にみる金堂創建年代(皇極2年、643)とよく合致しており、金堂の創建が皇極朝にあった可能性は強いといえよう。また、金堂の焼失時期は、焼失後間もない頃に開削された溝S D208~211等から出土した土器の年代からみて、遅くとも12世紀後半までに求められるだろう。

(松村恵司)

北回廊

石のカラト古墳の調査

平城宮跡発掘調査部

この調査は京都府教育委員会、奈良県教育委員会が日本住宅公団より委託を受けたものを、当研究所に依頼してきたものである。調査地は奈良県奈良市山陵町と京都府相楽郡木津町大字相楽にまたがる。調査期間は1979年1月9日から3月31日であった。当研究所の調査次数としては第115次—4である。古墳は平城ニュータウン内の緑地にとりこまれて保存される計画であるが、遊歩道が墳丘の西側を通る計画があり、そのため古墳の規模・範囲を確認することが目的であった。調査の結果、上円下方墳であることが判明し、石室構築法・墳丘築成等に関しても詳しい知見をえ、終末期古墳の研究に恰好の資料を提供した。

墳丘 版築法で2段に築成する上円下方墳である。墳丘幅で南北13.75m、東西13.80m、上円部径9.20m、高さは西辺で墳頂まで2.50m、第1段1.15m、第2段1.35mを測る。墳丘全体を河原石で葺き上げているが、上円部は残りが悪い。下方部裾に浅い溝を掘り、その中に石を立て、その上の斜面を小口積みで積み上げている。下方部四隅と上円部裾を結ぶ対角線に水みちを設けている。

石室 墳丘中央に位置し、凝灰岩の板石を組み合せた横口式石室である。主軸は国東方眼方位に対し13度48分西偏する。内法は長さ2.6m、幅1.03m、高さ1.06m。天井は0.1m程屋根型に削り込む。床・天井各4、側壁各3、奥壁・扉各1の計16板の板石で構成される。石室の前面には墓道があり、幅約3mに復原される。墓道側壁はほぼ垂直で、底はU字状を呈す。床面にはコロの道板の抜き取り溝、墓道南端には墓前祭祀に関連するものと考えられる礎敷が検出された。

遺物 石室の埋土中から金・銀製の玉各1、コハク玉の破片、銀装太刀の鞘の資金具、鞘尻金具、金箔片、漆片などが出土した。漆片はすべて黒漆で剥離面に布目痕、木地の痕を残すものがあり、棺は木心乾漆棺と考えられる。土器は少量で、墓道の埋土から須恵器皿、墳丘南側の転石の間から須恵器杯A・蓋、土師器の小片が出土したにすぎない。

外部施設 墳丘下には、礎を詰めた3条の盲暗渠がある。墳丘周囲にも同様な排水施設があり、西と北には墳丘に平行する2条が、南には東南方向に1条が配されている。

(実測には9頁のロープウェイ方式による写真測量を用いた。なお詳細は「奈良山一Ⅱ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報 京都府教育委員会・奈良県教育委員会 1979」

を参照のこと。)

(児 淳一郎)

石室内部(南から)

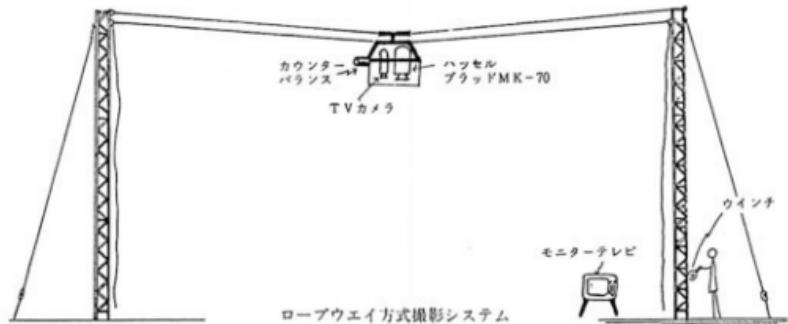
ロープウェイ方式撮影システムの開発

埋蔵文化財センター

発掘された遺構の実測図のような大縮尺図を写真測量の技法で図化するには、ヘリコプターを使って写真撮影するのが望ましい。しかし、ヘリコプターの使用は、発掘面積や図化の難易度を考慮して所要経費に見合う効果が挙げられる場合に限られる。ヘリコプターの基地から遠いところとか、写真測量で図化したいがヘリコプターを使うほどの広さはない調査地用に、ステレオカメラ（NAB-15）をバルーンやクレーンで吊り下げる撮影するシステムが開発され、活用されてきた。クレーン車は、自重が28tもあり、安定させるためにジャッキを抜げると7m巾の平面を必要とする等、作業空間・進入道路に問題があって適用場所が制限される。バルーンは風に左右され風速5m/秒以下でなければ作業が出来ないという短所がある。このカメラはガラス乾板を使用するので、露光の都度カメラを下ろして乾板を入れ換えて、再び吊上げるという作業を繰返さなければならないわずらわしきがある。さらに、ガラス乾板の製造が少くなり、その確保が面倒になってきている。

以上の短所を改良し、何時でも何処でも使えるシステムを開発した。まず、感材は入手が容易で取扱いが楽で、しかもモータードライブで連続撮影が可能であるロールフィルムを使うことにした。カメラは、出来るだけ画角が大きく、測定に耐えられる精度を持って、しかもモータードライブ装置のつくるとしてハッセルブラッドMK-70が選ばれた。カメラを空中に吊下げてオーバーラップしながら露光させるために、柱を遺構の外部に立て、柱と柱の間にワイヤーロープを渡し、そのロープに、カメラを装着したゴンドラを懸下させることを考えた。ゴンドラには、ハッセルブラッドと露光地点が地上で判るようにテレビカメラを積み、バランスをとって、常にカメラの光軸が垂直になるように工夫した。柱は、アマチュア無線用のアンテナ（1ユニット2m）と、アルミ製円柱（φ=7cm、長さ1.5m）の二種類があり、遺構の環境によって使い分ける。とくに後者は軽量でライトバンに積むことも出来る。

（木全 敬藏）



頭塔の調査

平城宮跡発掘調査部・美術工芸研究室

発掘調査（第114次） 本調査は奈良市高畠町の史跡頭塔に東接する奈良法務局跡地への県立老人福祉センター建設に伴なう事前調査であり、史跡内的一部をも併せて調査した。

頭塔は高さ10m、一辺30~35mほどの方形の土壇が残っており、13基の石仏が露出している。東面第一段中央石仏の周辺を主として調査し、石仏前面を南北にはしる壁体石組みと基壇東端を検出すると共に、中央石仏の北5.3mの位置で新たに石仏一基を確認した。

壁体石組みは石仏の手前50cmの位置に東面を揃えて自然石を垂直に積み上げている。遺存度のよい所で高さ80cmを測る。この壁体の東4mの位置では基壇東端の石組みを検出した。やはり自然石を垂直に積み上げており、高さ約70cmが残っている。基壇の外周には人頭大から拳大までの自然石を敷き詰めており、基壇端から1m幅まで確認したが、当初の広がりは不明である。基壇の築成は地山の高低に応じて盛上・削平を行なっている。盛上は粗い互層状をなし、頭塔全体が盛上によって築かれたとみられる。

なお基壇東方では幅約6mの南北溝を検出した。基壇東端から溝の西肩までは約4m離れてている。堆積土に含まれる瓦類・土器類からみて平安後期の廃絶とみられる。基壇東北方に設定したトレンチではこの溝は検出されず、基壇から等距離で巡るものではないことは判明したが、これが頭塔と関連した施設である可能性は残る。

新たに確認した石仏は、縦70cm以上、最大幅76cm、厚さ約10cmの花崗岩立石の表面に仏像を浮彫にし、線刻風の輪郭を施す（次頁参照）。

発掘結果を、当研究所がかつて行なった地形測量の成果（『年報』1961）と照らし頭塔の規模を復原すると、基壇は一辺32mの正方形で高さは約1.2mとなる。第一段壁体は一辺24mとなり、各辺の4等分点に仏龕が配さ

れたことになる。南北の主軸線はほぼ真南北であり、主軸線が東大寺大仏殿の中心に向かうとの従来の見解を改めることとなった。頭塔の性格はなお明らかではないが、出土した奈良時代の軒瓦35点はすべて東大寺式であることから、東大寺に密接な関連を有する施設とみられる。（清水 真一）

第114次調査位置図

頭塔の調査

石仏の調査 頭塔は東大寺大仏殿の南方約1.3kmに位置する四角錐台の土塔である。現在は封土のくずれや生い茂る樹木によって、当初の姿がやや変っているが、四段に構築されていて、四方の各面に計13基の石仏が残っている（他に1基が郡山城の石垣に転用されている）。各石仏は第二段北面中央（10号像）の1基が粘板岩である他、すべて花崗岩製で、それぞれの一面に如来淨土や仏伝などが浮彫されている。第一段東面北寄で新たに1基（第14号像）が今回の発掘調査で確認されたのでこの石仏の概要を報告する。

第一段の各面の中央には如来坐像を中心に、左右に菩薩像が随侍する図様の大形の石仏が配置され、南面の西寄りには仏伝中の苦行像（2号像）、西面の南寄りには同じく成道像（3号像）、同北寄りには涅槃像（5号像）などやや小形の石仏が置かれている。今回確認された14号像は風化のため彫刻面が磨耗して細部は明らかでないが、『維摩詰所説經』卷五文殊師利問疾品の光景をあらわしたことがわかる。釈尊が毘耶離城の毘羅樹園にあって城中の長者維摩詰が病床にあることを知り、仏弟子を見舞に行かせようとしたが、十大弟子、諸菩薩とも維摩詰に難詰されることをおそれて病を問う者がなく、やむなく文殊師利菩薩が問疾することとなり、「文殊、維摩詰が談ぜば必ず妙法を説かん」と多くの菩薩、声聞、天人が文殊に随って入城した。

本図は特に文殊と維摩詰が相対した場面である。不整形のやや縦長の花崗岩の平坦な一面に、輪郭を線刻風にして内薄に図様を浮彫する。上半部は当初図様が存在したか否か不明で、現状では下半部に5人の人物の存在が確認される。向ってやや右寄りに文殊と維摩詰が左右に相対し、文殊の背後には三軀の菩薩が随っている。維摩詰は輪郭をとどめる程度で、斜め内側を向き、首を傾け、左手で团扇を執って方座上に袖や裾を垂らして坐り、文殊はこれと対称に位置するが、体軸はほとんど形をとどめず、二重円相光を背にし、仰蓮と反花からなる蓮花座上に坐る形が確認され、背後には二軀とその左下に一軀の合掌する菩薩を文殊とほぼ同形、同大に配している。

第114次発掘遺構図

なお文殊の蓮華座の下には宝相華
風の植物が刻まれている。

石仏 一覧表

石仏の配置については、第一段に12、第二段に8、第三、四段に各4の計28基（あるいはそれ以上）があったと推定される。第一段の四方の如来淨土の左右に配置されている小形の石仏は、残存する3基がいずれも仏伝をあらわしているところから、確認されていない他の5基と合せ釈迦八相が配置されていたと考えられていたが、今回の発見で仏伝以外の經典からも取材していることが明らかになり注目された。頭塔という名称は僧玄昉の首塚とする伝説によっているが、『東大寺別当次第』に「神護景雲元年實忠和尚依僧正命御寺朱雀之末作土塔」、『東大寺要錄』（寛弘29ヶ條事）に「一、奉造立塔一基，在新薬師寺西野，以去景雲元年所造進也」と記載される塔に当ると考えられ、東大寺大仏と関連して制作された誕生仏や八角燈籠の音声菩薩と頭塔の石仏とが様式上きわめて近く、大仏建立後の768年に実忠によって制作されたという記事が首肯される。

頭塔が如何なる目的で造立されたかは記録等には一切記載されていないが、ここで注目されるのは各石仏の配置、土塔の形である。上代の塔婆の四面には元興寺、興福寺（各現存せず）、西大寺などのように四方四仏を安置する例と薬師寺（釈迦八相）、法隆寺（雄摩詰・涅槃・分舍利・弥勒淨土）など仏伝や經典の場面をあらわすものの二種があり、頭塔の場合は第1段にこの両者が備わっている。しかし、塔の形は一般的の三重塔や五重塔など木造建造物とは異り、むしろ原初的な仏塔と見るべきであろう。しかも、各段に仏伝などを混えた石仏を莊嚴するところなどはインドにおけるストゥーパのメダイヨンが想起される。

(田中 義恭)

興福寺小子房関係文書について

歴史研究室

興福寺所蔵典籍古文書調査に際して、興福寺上階僧房小子房に関する平安時代中期の2通の申状の写しが発見された。この2通はともに第44函に収納されている(第105・106号)。1通は治安2年(1022)2月13日(第105号)、今1通は康平2年(1059)7月2日(第106号)の日付を持つが、その筆跡ならびに料紙の紙質は同一であり、1人の手で同時に書写されたものと考えられる。なおその書風・紙質によりその書写的時期は江戸時代中期頃と推定される。2通とともに、文面に多くの朱書の正方形が描かれているが、これはその正文に捺されていた朱方印の位置を示すものであろう。七大寺中で「上階僧房」と呼ばれる僧房をもつのは興福寺のみである。したがってその印文は写されていないが、おそらくは「興福寺印」であったろう。なお袖に「興福／寺印」の朱方印が各1顆捺されているが、この印は新しいもので、明治年間頃に捺されたものと考えられ、その正文に捺されていた朱印とは無関係のものである。この2通の文書は時代の降った江戸時代中期の写しであるが、原本の忠実な臨模本であり、その雰囲気をかなりよく今に伝えているようである。その本文は学界未紹介のものであり、また僧房小子房に関する文書として内容的にもきわめて稀な史料であるため、後世の写しではあるがここに全文を紹介するとともに、その内容について説明を加えたい。

治安2年の僧侶照申状写には「請小子房事／在上階馬道以東第二房」、康平2年の法師澄賢申状写には「請上階馬道以東第二小子房」とあり、ともに同じ小子房第二房に対する政所証判を請うたものである。僧侶照申状写の右端には斜に捺された朱方印の左半部が写されているが、これは紙継目に捺された印であり、この文書の原本は連券であったことを示すものである。法師澄賢申状写には紙継目印と考えられる印影は見られない。また僧侶照申状写は「大師大僧都御充文」に対する安堵、法師澄賢申状写は「舍弟僧教元」の譲与に対する安堵を請うたもので、人物については両通ともに直接関連するところはない。治安2年より康平2年までは37年の隔りがあり、この間に少くとも他に1通以上の文書があったと考えるのが自然であろう。したがってこの2通の申状写はもと数通以上が連券となっていたものであったが、何時しか散失し、江戸時代に入ってもなお伝存していたこの2通(或は他にも今少しく伝っていたかも知れない)が書写され、今に残されたものである。

この2通はともに奥に興福寺別当・権別当・三綱連署の政所証判が加えられているが、その自署部分は後世の臨模であることと相まって判読困難なところが多い。しかし別当・権別当について『興福寺別当次第』によって推定が可能となる。僧侶照申状写に見える別当は第21代林懷大僧都であろう。『興福寺別当次第』によれば、林懷は長和5年(1016)5月任興福寺別当、寛仁元年(1017)3月大僧都、万寿2年(1026)4月卒という。しかし『僧侶補任』によれば林懷が権大僧都から大僧都に転じたのは治安3年12月であり、両書の間には矛盾がある。し

かし僧印照申状写には「別当大僧都(自署影)」とあり、もし「権」の書き落しがないならば、『興福寺別当次第』の方が正しいものと考えられる。

次に治安2年時の興福寺権別当は扶公であるが、この文書に見える権別当の自署影は扶公とは程遠い字形をしている。しかしこの文書は後代の臨模であり、臨模の際にその形を十分に摸すことが出来なかったことによるのではないか。『興福寺別当次第』によれば、扶公は万寿2年に林惟没後をうけて興福寺別当に任せられている。この間長和3年任権少僧都、治安元年10月任権大僧都、別当となった後の万寿4年に大僧都を辞退したという。一方『僧綱補任』においては、扶公は治安元年権大僧都に任せられたが、万寿3年の条になると大僧都と見えており、しかも翌々年の長元元年(1028)条には12月に権大僧都を辞退したとあって矛盾している。しかしこの両書を併せ見ると、いずれにせよ扶公が大僧都になったのは別当補任の万寿2年以後のことのようである。ところが僧印照申状写にはすでに治安2年に「権別当大僧都」とあり、両書と異なっている。或はこの申状写が正しかとも考えられるが、臨模の際「権大僧都」の「権」を誤って書き落したこととも考えられ、いずれをとるべきかの結論は保留したい。

(1) 僧印照申状写(治安2年1月13日)
譲言

請小字房事
在上階馬道以東第二房

右件房依大師大僧都御充文為常住
修學請政所証判水為後代公驗仍所請

如件 治安二年二月十三日僧印照

政府 依請行之

別當大僧都(自署影) 権別當大僧都法師 「清元院」

上座威儀師 権別當大僧都法師 「清元院」

中座威儀師 「〔印〕」 権別當大僧都法師 「清元院」

下座威儀師 「〔印〕」 権別當大僧都法師 「清元院」

○第44函第165号 縦31・5厘、横43・5厘、朱

(2) 僧證實申状写(康平1年7月2日)
方印第13號(印文写サメ)、朱

右件房者舍弟僧教元所詮與也仍政所
御判所諸如件

請上階馬道以東第二小子房
〔印子カ〕 康平1年七月二日 法師證實

御判所諸如件

〔印子カ〕 康平1年七月二日 法師證實

政所

件房依有謹狀字

判如件之

別當大僧都(自署影) 権別當大僧都法師 「清元院」

上座威儀師(草名影) 権別當大僧都法師 「清元院」

寺主威儀師 「〔印〕」 権別當大僧都法師 「清元院」

方印第11號(印文写サメ)、朱

○第44函第166号、縦31・5厘、横43・0厘、朱

興福寺小子房関係文書について

この2通の申状写を見ると、平安時代中頃においては、僧房・小子房の各房の住僧は固定化し、一つの権利と見做されるようになっていた。そしてそれは師弟・肉親等の間で譲与の対象と考えられていたことを示している。ただしその譲与に際しては、別当以下の政所証判による承認が必要とされていた。古くは田島売券においても「解」式の文書が出され、奥に郡司等の証判を得ているが、この申状も同様の手続をとっている。僧房の譲与に際してはこのように鐵格な手続がかなり後までとられていたものであろう。

興福寺の僧房はまず元慶2年(878)4月に焼け、ついで延長3年(925)11月に下階僧房馬道以東が焼けたが(貞信公記)、この時は他の僧房は無事であった。しかし永承元年(1046)12月の大火灾に際しては中・東・西金堂その他の諸伽藍と共に三面僧房も焼失してしまった(扶桑略記他)。その後の僧房の造営時期は明かでないが、寺僧の止住する場所でもあり、その再建は比較的早い時期になされたものであろう。ところが康平3年(1060)5月には再び火災により、東金堂・南円堂等僅かを除き、金堂・講堂・西金堂以下とともに僧房も焼失してしまった(康平記)。

このように興福寺僧房は度々火災にあっており、治安2年の時の小子房は永承元年の火災以前のものであり、康平2年の時の小子房は永承元年以後再建のものである。しかしこの小子房も、翌康平3年には焼失してしまった。その後も三面僧房はしばしば火難にあっており、その再建後の規模は常におおむね以前のものを踏襲しているようであり、治安2年・康平2年に見える小子房東第二房の位置・広さ等はともに大きく異なるところはなかったであろう。

(田中 稔)

興福寺講堂以北建物配置図 (*印は小子房馬道東第二房)

今井町の町並調査

建遺物研究室

今井町の調査が年報で報告されるのはこれで6回目である ('69~'72, '77年)。今井町については、1955年関野克氏を代表とする調査が建築関係では最初と言ってよく、当時すでに個々の民家だけでなく都市としての今井が対象とされている点は注目される。'69~'72年に当研究所が行ったものは、環濠内建築(主屋)の悉皆調査であり、町並の性格を把握するための連続立面写真撮影、屋根伏作成等から住民の意識調査も行われ、歴史都市保存開発構想の必要性が認識されるにいたった。

'77, '78年調査は歴史的環境保全市街地整備計画の為のもので、これは国土総合開発事業調整費による文化庁、建設省の共同事業で行っているが、文化庁側の実際の調査は日本設計事務所が受け、当研究所と大阪市立大学建築学教室がこれに協力して行っている。このうち当研究所の担当は主として保存整備計画に向けての評価基準の設定の基礎となる建築を建築群、街区、街区群の現状及び歴史的発展、文化財的価値についての調査である。

調査地域は御堂筋、本町筋、中町筋についての'69~'72年調査を一層徹底すると共に、全戸の断面、復原図を作成した。また敷地ないし街区の性格と変遷を掴むため、道路に面したすべての建築の立面と今井町の南北断面実測、さらに古図、地籍図、古文書等を調査した。

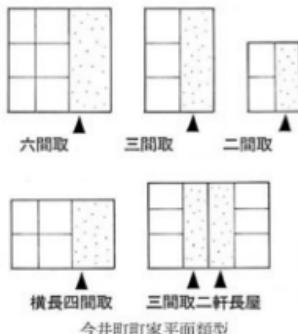
調査対象(主屋)の年代の分布 調査対象のうち主屋についてみると伝統的な町家は178棟で、年代と旧状が概略解るもののが166棟あり、そのうち106棟が独立主屋、60棟が長屋である。その年代的な分布は17世紀4棟(推定が多い、以下同様)、18世紀前半5棟、同後半18棟、19世紀の文政末迄20棟、それ以降幕末迄38棟、明治45棟、昭和戦前迄34棟、戦後2棟である(戦後でも広い意味で伝統的なものは含むことにした)。

平面型式と年代との関係 平面型の主なものは図に示した通りであるが、各型の造構と年代の関係は以下のようになる。

2列6室型 大型町家の典型的平面型で、大型の2列5室や7室以上の家もこの系統とみられるから、17世紀中頃には既に成立し、以後明治まで続いた安定した型である。ほとんどの家が2階建で背が高く、今井町の町並景観上重要な役割を持っている。

2列4室横長型 農家の四間取に似た平面で、この系統は10棟以上あり、18世紀前半から各時期に分布しているから、特殊な型でないことは明らかである。

1列3室型、1列2室型 前者が20棟、後者10棟で文化、文政頃の1列3室型を上限とする。



今井町の町並調査

長屋 1列3室型、長屋 1列2室型
(図省略) 調査主屋中前者が21棟、後者が35棟ある。年代の上限は共に18世紀末頃であるが前者は幕末、後者は明治の造構が多い。これらは独立住宅の1列3室、1列2室を2ないし5単位連ねた型であるが、同一間取をくり返すものと大小の住居單位を結合させたものがある。

平面形式間の問題点

1. 2列6室型は大型町家の基本型で全国に分布しているが、これは1列3室型から発展して成立したといわれ、系統的なつながりを実証できる地方も多い。今井町でこれが否定されたわけではないが、もう一つの前身型として横長の2列4室型も想定することができる。これは横長2列4室型から2列6室への改造例、又は建替例により示唆される。奈良の平野部の街村に多い横長4間取の家が今井町にあっても不自然ではないし、それから本格的な町家への発展が今井町で確かにあったかどうか今年度以降の調査で確認したいところである。

2. 1列3室型について独立主屋と長屋とを比べると、後者の方が規模がやや小さく、構造、部材は細くて耐用年限の点で不利な筈なのに古い造構がみられる。調査した造構は今井町の一部に過ぎないので断定できないが、1列3室型は独立主屋よりも長屋に先行した可能性があり、少くとも古くは長屋に多くみられた型と言えそうである。

(吉田 緯)



(断面ベースは建築を土間側からみたもの、大阪市大作図による)

山口県近世社寺建築の調査

建造物研究室

昨年度の岡山県に引き続き今年度は九州芸術工科大学・九州産業大学と共同で山口県の調査を行なった。県下56市町村のすべてから予備調査表の提出がありその数は1377件3205棟に達した。その内調査員が実査（第1次調査）したものは298件652棟で、さらに平面実測をともなう精査対象（第2次調査）にあげたものは、神社117棟、寺院104棟である。調査の分担は九州班が日本海側を当研究所班が瀬戸内側を受持った。今回報告する研究所班の調査地は下関市から岩国市までの36市町村で県下のはば3分の2を占め字部市以西は長門、以東は周防に属する。

神社建築 県下の神社建築では住吉神社本殿（下関市・1370）や今八幡宮本殿（山口市・1504）など6件10棟の中世建築が既に国指定になっている。今回の調査ではこれらに続く中世末ないしは近世初頭の社殿の存在が期待されたが、結果は鶴鳴神社本殿（山口市・1686）が最古で、以下岩戸神社本殿（玖珂町・1691）志多里神社本殿・拝殿（山口市・1693）などかろうじて17世紀に入るものが7棟あるのみで、その他はすべて18世紀以降の建立になり、その間百年余の空白があることがわかった。二次調査をおこなった神社本殿39棟の形式・年代別を表にあげる。このうち入母屋造はもと大内氏ゆかりの興隆寺東照宮であったという築山神社（山口市・1742）ただ1棟のみで、あとは流れ造またはその系列に属するものであるからあきらかに流れ造の独占する地域であるといえる。中世には流れ造のほかに春日造（石城神社・1469）や入母屋造（古熊神社・1547）が混在するのとやや趣を異にしている。拝殿は今八幡宮にみられる一間横門の両側に翼廊をともなった形式のものが各年代を通じて遺存し、しかもそれが長門にはなく周防に限られることは特徴的である。嘉川神社（山口市・1694）が最も古いが、総じて全体に木太く、かつ斗拱は六支掛の制をふむなど正規の造りよりなつていて実年代よりも古式にみえる。この形式の拝殿に限り中世の木割りがあまりくずれることなく後世にまで伝承されたともいえよう。これ以外の拝殿は、桁行3間・梁間2間で前後に梁を架け、内部の外周を化粧屋根裏として中央部に天井を張るのが一般的標準型である。

寺院建築 県下の寺院を宗派別にみると、その7割近くが浄土真宗で、残りを浄土宗、禪宗系、密教系などで分っている。数少ない密教系寺院では清水寺本堂（山口市・1493）や正法寺本堂（山陽町・16世紀）はとともに五間堂で後の改造は大きいがあきらかに中世の建築である。県下唯一の七間堂として国分寺金堂（防府市・1780）がある。年代は古いとはいえないが奈良時代からの寺地に位置し、往時の五間四面堂の面影を残す堂々たる建物で、仁王門（1767）とともに威容を誇っている。三間堂は本堂に付属するお堂に多く、宝形造や入母屋造の形になる。福樂寺觀音堂（柳井市）は寛永12年と伝え改造は多いが県下に数少ない近世初頭の建物として貴重

山口県近世社寺建築の調査

な存在である。禅宗系寺院の多くは中世以来の伽藍を伝え、国指定仏堂はほぼこれらの寺院に含まれるが、未指定の中では巧山寺総門（下関市）が古い。棟木まで延びる親柱をもつ四脚門でおそらく仏殿と同時期までさかのぼり得よう。禅宗様式になる仏堂では覚苑寺本堂（下関市・18世紀中）淡陽寺法堂（鹿野町・18世紀中）高山寺仏殿（柳井市・18世紀末）などがある。いずれも年代が降るだけに純粹性を保ち得ず部分的に和様の介入を許しているのはやむを得ないとであろう。方丈系本堂では徳嚴寺本堂（徳山市・1684）と乗福寺本堂（山口市・1691）が17世紀に入る。ともに柱の数が多く古式を残す点では共通性がある。押昌寺（山口市）は文政の大火灾で伽藍を失ない現在のものはその後の再建になるが、境内の雰囲気は禅宗寺院独特のものを持つ。浄土宗と真宗本堂は18世紀以降のものより残っていずすでに定形化された形を示している。ただ、18世紀後半の明和・安永になっての建立例が急増し、その限られた年代と形式内にあってより大型により精巧にという意圖がうかがえる作品も多い。仏堂の他には門・鎮守堂・厨子などがある。門では泰雲寺（山口市・室町末・四脚門）笑山寺（下関市・17世紀初・四脚門）が、鎮守堂では清水寺（山口市・1566・一間社流造）正法寺（山陽町・17世紀末・一間社流造）、厨子では純粹な禅宗様式の法泉寺（宇部市・1530）が中世あるいは近世初頭のものとして遺存する。

中世、山口を中心にして中国地方を支配していた大内氏は、その文化政策の一環として各地に社寺を造立した。そのうち現在遺存するものはほとんどは既に国指定の重要文化財となっている。今回の調査はこれら大内時代の遺構の発見を含めて、そのあとを襲った毛利時代の社寺建築の動向を追求することにあった。今回前者の目的はある程度満たされたものの、標題の近世社寺建築については特に藩制初期の遺構が極端に少ないとあって充分にその流れをつきとめるには至らなかった。しかし、18世紀に入ると社寺の造営活動は活潑になるとともにその遺存例が増し、18世紀の末に最盛期を形成するという過程をとらえることができた。その理由としては、やはり毛利藩が関ヶ原の敗戦後、防長二州にとどめられたことに起因するとみるのが妥当であろう。そしてその後の瀬戸内沿岸の新田開発・産業の振興などの施策が実をあげ経済的な余裕がきざすとともに社寺に対する関心も再認識されてきたものと思われる。

なお近々に調査結果の報告書が刊行される予定である。

（細見 啓三）

正八幡宮社殿（秋穂町・1739）

国分寺金堂（防府市・1780）

平城宮跡と平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では1978年度に第110次から第115次までの28件におよぶ発掘調査を実施した。平城宮内では東院地区東南隅の庭園造構に北接する地区的調査(第110次),推定第一次朝堂院地区的東第二堂を中心とする調査(第111次),それに推定第二次大極殿の調査(第113次)を行なった。また平城京内では北辺坊,唐招提寺戒壇院など各所において調査を行なった。更に京外においても法隆寺西南院,頭塔のほか平城ニュータウン予定地内の遺跡について範囲確認調査を行なった。以下別項で報告する平城宮推定第二次大極殿,頭塔,平城ニュータウン予定地内の石のカラト古墳の調査を除き,おもな調査の概要を報告する。

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6 A L F	平城宮 第110次	78. 6.28~11.13	21.00 a	東院地区
6 A B G · B H · B T · B U	平城宮 第111次	78. 4. 3~ 7.15	33.00 a	第一次朝堂院
6 A A R - A · B	平城宮 第113次	78.10. 1~79.2.7	21.00 a	第二次大極殿
6 A C V · B Z	平城宮 第112~11次	79. 3.15~ 3.19	0.4 a a	朱雀門・宮南面大垣
6 A B G	平城京 第112~1次	78. 5. 2~ 5.30	4.90 a	右京一条三坊三・四坪
6 A G R	平城京 第112~2次	78. 5. 4~ 5. 9	0.045a	北四坊一坊大路
6 A F I	平城京 第112~3次	78. 7.01~ 7.25	3.01 a	左京三条二坊七坪
6 A G S - A	平城京 第112~4次	78. 8. 7~ 8.22	2.84 a	北辺三坊一・二・三・四坪
6 B F K - I	平城京 第112~5次	78. 8.17	0.06 a	法華寺旧境内
6 A G A - L	平城京 第112~6次	78. 9.20~ 9.22	0.42 a	右京一条二坊六坪
6 A G R - B	平城京 第112~7次	78.10. 1~11.16	3.60 a	北辺二坊二坪
6 A G A - D · K	平城京 第112~8次	78.11. 6~11.16	3.50 a	右京一条二坊二坪
6 A G O	平城京 第112~9次	78.11.21~12. 4	0.60 a	右京五条二坊十二坪
6 B F K - I	平城京 第112~10次	78.12.23~12.27	0.12 a	法華寺旧境内
6 A F C	平城京 第112~12次	79. 3.26~ 3.27	0.03 a	左京一条二坊十坪
6 A G A - J	平城京 第112~13次	79. 3.27~ 3.28	0.20 a	右京一条二坊七坪
6 B Z T	第114次	78. 7.17~ 8.16	1.97 a	頭塔
平城ニュータウン				
〃	第115~1次	79. 1.13~ 1.26	2.00 a	古墳(13号地点)
〃	第115~2次	79. 1.20~ 1.25	1.32 a	散布地(14号地点)
〃	第115~3次	79. 1. 8~ 3.31	21.00 a	普如ヶ谷瓦窯(9号地点)
〃	第115~4次	79. 1. 9~ 3.31	3.13 a	石のカラト古墳(7号地点)
〃	第115~5次	79. 3. 6~ 3.12	0.50 a	大仙堂(5号地点)
〃	第115~6次	79. 3. 7~ 3.12	0.38 a	散布地(6号地点)
6 B T S	唐招提寺	78. 5.29~ 6.22	0.57 a	戒壇院
6 B S D	西大寺	78.10.25~10.27	0.18 a	金堂院
6 B Y S	薬師寺	78.12.11~12.25	0.90 a	宝積院
6 B T D	東大寺	78. 8.17~ 8.29	0.325a	南面大垣
6 B H R	法隆寺	78.12. 7~79.1.25	2.80 a	西南院

第1表 平城宮跡と平城京跡発掘状況

1. 平城宮跡の調査

東院地区の調査(第110次) 調査区は平城宮東院東南部に位置し、これに南接する地域は第44次調査(1967年)と第99次調査(1971年)で大規模な庭園造構を検出しており、奈良時代の新旧2時期にわたる園池の造替を確認している。本調査はこの園池の北域を明らかにすることを目的として、約2100m²を発掘した。西北から東南に下がる自然地形に応じて複雑な整地の様相をなしてはいるが、おむね3層に大別できる。

下層整地面でA～D期、中層整地面でE期、

第1図 平城京内発掘調査位置図

上層整地面でF・G期と計7期にわたる造構変遷が明らかとなった。またA期以前においても造構の存在を部分的に確認したが、全体配置の把握には到らなかった。園池との関連では、B～D期は旧池に、E～G期は新池に伴なっている。おもな検出造構には礎石建物4棟・掘立柱建物12棟・掘立柱屏5条・溝19条・石敷道路4条がある。以下時期別に述べる。

A期 東面築地大垣の造営と併行して下層の整地を行い、大垣に近接して掘立柱東西棟建物S B9065・9066を建てる。大垣西雨落溝S D9040Aは側壁に径40cm程の自然石を組み、底には小礫を敷く。第44次調査で検出した東雨落溝S D5815との心々距離は約6mとなる。大垣下を抜ける木樋暗渠S D9056Aは厚さ約10cmの厚板を底に3枚、両側壁に各1枚を組み合わせており、樋内から平城宮I・II期の土器が出土した。大垣は粘質土を乱雜に積上げたもので、最高約1mの高さで遺存する。

B期 園池の開設に伴なう時期で、北を画する掘立柱屏S A9063を設ける。東院南面大垣心から北100.5m(340尺)に位置する。堀の内外では掘立柱東西棟建物S B9067・9068がA期の配置を踏襲して建つ。調査区南端では池への導水路S D8456と、これに繋がる屈曲した石組溝S D9046～9050がある。溝に接しては小石敷造構S F9043・S X9099があり、池北岸の散策に供する施設とみられる。

C期 庭园区画を北へ10尺広げてS A9060によって北を画すとともに、斜行する掘立柱屏S A9061を取り付けて西の境界を設ける。斜行屏の設置の結果、石組溝等はやや移動する。区画外北方ではS B9068が二面廂付掘立柱南北棟建物S B9070に建て替わる。

D期 西を画していた屏S A9061と掘立柱東西棟建物S B9067を撤去した跡に、大規模な南廂付礎石建東西棟建物S B9071が中央に、掘立柱南北棟建物S B9072が東端に建ち、旧池北岸が最も整備される。区画外北方ではC期のS B9070がやや規模を大きくS B9073に建て替わる。

E期 新池の開設に伴なう時期で、調査区内全域に中層整地が施される。A期以来の東面

第2図 第110次発掘遺構図

第3図 第110次遺構変遷図

平城宮跡と平城京跡の調査

大垣にも手を加え、雨落溝を改修すると共に暗渠を木樋から凝灰岩組みにする。北を画した屏S A9060は取り払われ、同位置に石敷道路S F9057が通る。池の北岸にあった石組構等は廃棄され、礎石建南北棟建物S B9075と掘立柱東西棟建物S B9076が建つなど、前期までとは配置計画を異にする。S B9075は側柱と入側柱の掘形を一連にしており、径約1mの礎石には八角柱の当り痕跡が残る。

F・G期 上層整地を施した後に再び北を画する屏S A9064が設けられるが、その位置は東院南面大垣心から93m(310尺)となり園池北域が縮小する。このため池北岸の建物S B9077・9081は桁行3間と小規模になるが、いずれも礎石建てとなり、D期以来の方針を継ぐ。区画外北方は逆に南に拡大したため建物は2棟S B9078・9079が建つ。S B9079はG期に絶柱建物S B9080へと建て替わる。このように新池に伴なう北域はF期をもって整備を終える。

遺物 木簡は総数66点が出土したが、削片が半数を越えており、また全般に習書を示したもののが多く、年紀の記載はみられない。A期以前の土壙S K9090から出土した20点の内には里名を列記した短冊型木片があり、一字表記の里名もあることから奈良初期と推定できる。

土器類はA期以前の斜行溝S D9041およびA期の整地層と木樋暗渠から平城宮I・II期のものが出土し、E期の石敷路S F9057の上面からはV～VII期のものが出土した。特異なものとしては下層整地土から製塙土器が、中層整地から越州産青磁壺が、上層整地から水鳥形硯が出土している。

瓦塊類は500点を越える軒瓦と、綠釉塊2点・二彩釉平瓦片1点などがある。軒瓦は6282型式81点・6721型式100点など第III期のものが最も多く、上層整地土中に主としてみいだした。

まとめ 各期の年代は未確定ではあるが、A期以前は木簡の記載法から和銅年間頃に、B期は旧池の開設される養老年間以前に、E期は整地土に含まれる遺物から天平勝宝年間と推定される。今回調査により、東院地区は奈良初期にすでに大垣築造などの整備をしていることが判明した。また庭園地区の北を画する屏を検出し、後期には区画が縮小していることを確認した。

推定第1次朝堂院の調査（第111次） 調査地は第102次調査地の南に接し、発掘区のはば中央に朝堂院の推定南北2等分線が想定され、東第2堂の推定土壇が南北に延びている。検出された主な造構には、礎石建物1棟（推定東第二堂）、掘立柱建物1棟・掘立柱屏1条、築地塀1・溝12条などである。奈良時代の造構は整地層によって5期にわかれる。

第1期 整地以前の時期でSD9020がある。素掘りの東西溝で造営時の区画溝の可能性がある。

第2期 第1次整地層に造営された造構でS D3765・S A8410・S X8956・S D8944・S D8945がある。S D3765・S A8410に関しては、先の調査とまる所はない。S X8956は、S D3765の東約35mに位置する幅約11m、深さ約0.4mの溝状の造構であり、性格は不明であるが、第4次整地に際して埋められる。

第3期 第2次整地層に造営された造構でS A5550A・S D3715・S F8950・S D8947・S X8941・8942がある。第1次朝堂院の東を画すS A5550は保存状態が極めて良好で、今回の調

査でその変遷に関して新しい知見を得た。S A5550Aは基壇を持つ掘立柱構で、その後2回改修され、木構B—築地Cと変遷することが明らかになった。S F8950は発掘区の東端にあり、第2次内裏外郭の南門 S B8160に通ずる南北方向の道路である。S D8947はその西側溝であり、S X8941・8942はS F8950に敷設された暗渠である。

第4期 第3次整地層に造営された造構で東第2堂が造営され、この時点で朝堂院区画が完全に整備される。S B8550は今回の調査で桁行8間分を検出したが、先の調査分と合せて梁間4間、桁行12間以上の規模となる事が明らかになった。基壇上の残りがよく、柱間・礎石据付法に関する良好な資料を得た。根固石から桁行14.5尺等、梁間11.5尺に復原される。礎石据付の手順は、基壇築成がある程度まで進んだ段階で皿状の掘形を掘り、川原石を詰め込む。その上に礎石を据え、割石を周囲に詰め、版築で礎石の頂上近くまで積み上げる工法を取っている。S B8555は、S B8550の足場であり、S X9015・S X9016もS B8550の建設に伴う造構と考えられる。東西溝S D9024・S D9025は、S B8550の柱筋に合っており、第2堂への通路S F9026の両側溝と考えられる。S A5550は3期以降、2回の改修があり、改修の時点は不明であるが、掘立柱木構—築地と変遷をたどる。S B8980は、築地に開く、くぐり門である。

第5期 第4次整地層に造営された造構で、S B8960・S A8967・S X8954・S K8948等がある。第4次整地はS X8955を埋める程度の小規模な整地で、この上に桁行8間以上、梁間4間(10尺等間)の二面廻付南北棟建物S B8960が造営されている。S B8960の柱掘形は小さく、

平城宮跡と平城京跡の調査

長方形と円形のものがあり、残存していた柱根は、いずれも黒木の広葉樹であり、S B8960は仮設的な建物と考えられる。これらの造構は、朝堂院の廃絶に関係する造構と考えられる。朝堂院がその機能を失った後、S A5550とS B8550の間隙部は一時鍛冶工房として使用される。その後、この間隙部には瓦が詰め込まれ、全体的に整地され、奈良時代の造構は完全に埋め尽くされる。

遺物 木簡は総数24点あり、SK8948の1点を除くすべては、SD3715からの出土である。なかでも、神亀5年の紀年のある瓦の進上に関する木簡が注目される。土器類の出土量は少なく、主としてSD3715から出土した。土器は平城宮II～V期(725～780年頃)が主体をなす。軒瓦は、総数1048点あり、大半はSA5550とSB8550間に埋め立てた瓦層から出土している。瓦層出土の軒瓦のうち7割を占めるのが二期(721～745)の瓦で、6313・6685がきわめて多い。この他、銅鉢・帶金具・サンゴ玉等がある。

まとめ 調査の結果は、SA5550の変遷以外は、先に行なわれた第97・102次調査の所見とはほとんど変る所はない。畦畔からも想定されるように、第1次朝堂院の南北長が第2次朝堂院の大極殿回廊から12堂院南門までの距離と同じであるならば、第1次朝堂院の配置は、第2次のそれとは異なり、東西に各2棟の南北棟が配置されている可能性が強くなったと言えよう。

朱雀門・南面大垣の調査(第112～113次) 平城宮南面の東西水路改修に伴なう事前調査として、5ヶ所にトレチを設定し、朱雀門および南面大垣の造構を検出した。

朱雀門は第16次調査(1964年)で棟通りと北側柱列を検出しており、桁行・梁間共に17尺(5.05m)等間と判明している。今回は南側柱筋にあたり、調査の結果、棟通柱筋の南17尺の位置で、礎石の抜取り跡に残存良好の根固め石を検出した。前回の調査と合せて、朱雀門桁行5間、梁間2間の全柱位置を確認することとなった。基壇は東西31.6mにわたる掘込み地業をしているが、調査区狭小のために深さ1.3mまでを確認するに留まった。

大垣は地山を削り整地の後に版築を施しておらず、遺存度のよい所で高さ0.8mを測る。

遺物は瓦類だけで、軒瓦はすべて藤原宮式であり、前回調査と同様な状況を示した。

2. 平城京の調査

唐招提寺戒壇の調査 本調査は唐招提寺戒壇へのストゥーパ建設に伴なう事前調査である。戒壇の封土は、地山の上に版築土・文禄倒壊後の積土・元禄再興時の積土・大正修理時の積土の順に層位をなしている。地山は戒壇部分を周辺より約1.2m高く水平に削り残しており、この上に厚さ0.6mほどの版築層が残る。版築土は地山と類似の土を用いるなど当初の版築とみられる。造営時期に関しては、寺の創建に伴なうとする説と弘安7年とする説があるが、いずれとも解明できる資料は得られなかった。

版築土の上には厚さ0.1mほどの暗褐色土層がある。上面では方一間の小建物の礎石と土壙・小ピットを検出した。土壙からは炭化物や飾金具などと共に8世紀後半と推定される埴仏12個体分が出土した。また、小建物は「招提千歳傳記」の戒壇堂の条にみえる「文禄五年(慶

長元年) 大地震。此時殿堂多倒。此殿又倒。久成莓苔之地。僅有小屋覆壇耳。」の記事に符合するおもわれる。

暗黄褐色土層の上には厚さ0.6mほどの積土があり、現成壇化粧石の裏込め土はこの層から切り込まれている。積土には古代から近世にかけての瓦片や中世以降の瓦器片を含み、綠釉を施した瓦片・陶器片もみられた。上面では礎石の抜取り跡を検出し、奈良県所蔵の戒壇堂跡実測図(明治)にみえる礎石配置に一致する。元禄年間の再興に伴なうものとみられる。

以上のように、創建時期の解明はできなかったが、当初の造構の残りのよいことが判明し、また倒壊から再興への変遷を文献のみならず造構の上からも裏付けることができた。

平面図

断面図

第5図 唐招提寺成壇発掘遺構図

条坊遺構の調査(第112—3・8次) 第112—3次調査では左京三条二坊二・七坪の坪境小路を確認した。また小路の東側では七坪内の一帯を調査して4期以上の重複関係をもつ獨立柱建物9棟を検出したが、いずれも建物の一部しか確認できず全体配置は明らかでない。小路の幅は側溝心々約7mで、東側溝幅0.7~1.5m、西側溝幅1.2~2.6mを測る。小路心は朱雀門心から

東665.55m(2250尺)に位置し、条坊計画の1坊(1800尺)+1坪(450尺)に相当する。側溝からは土師器・須恵器がまとめて出土し、綠釉陶器・土馬・墨書き土器・漆付着土器などもみられる。奈良時代の初期に造営され、平安時代初期に廃絶されたことが判明した。

第112—8次調査では右京一条二坊二・七坪の坪境小路と二坪東端部に整然と配された掘立柱南北棟建物3棟を確認した。また3期にわたる古墳時代の造構が存土し、掘立柱建物3棟・掘立柱塀1条・竪穴住居1棟がある。小路の幅は側溝心々約8.3mで、東西側溝幅は共に1.2mほどである。西一坊大路心から西へ480尺を測り、推定位置より30尺西へずれていた。

その他に条坊解明を主目的としての調査には第112—1・7次などがあるが、掘立柱建物の一部を検出するに留まり、削平等のため条坊造構の確認はできなかった。

3. 平城ニュータウン予定地内遺跡の調査

1972年度、1973年度に引き続き、日本住宅公団平城ニュータウン造成工事予定地内遺跡の範囲確認調査を京都府教育委員会および奈良県教育委員会の依頼を受けて行なった。本年度の調査は前回の調査にもれた地点および再調査が必要な地点を取りあげ、当初の分布調査であがった地点のうち造成事業地外となった地点を残しておおむね本年度をもって予備調査に一応の結論を得、今後の遺跡の保存整備計画に資することとなつた。調査地は奈良県側3ヶ所、京都府側3ヶ所であるが、これらについてはすでに京都府教育委員会により報告されている(『奈良山一三 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1979・3)ため詳述をさけ、第9号地点(音如ケ谷瓦窯)について簡単に報告する。なお第7号地点(石のカラト古墳)については別項で報告する。

音如ケ谷瓦窯(第9号地点)の調査 調査地は京都府相楽郡木津町音如ケ谷にあり、奈良山丘陵の東側裾部に位置している。2100m²にわたる調査の結果、発掘区の北半部で瓦窯4基とそれに付属する小規模な掘立柱建物5棟を検出した。これらの造構は2時期に区分されるが、ロストル式と呼ばれる4基の平窯は2基で1組となる2グループに分けられ、窯壁の瓦の積み方や排水処理方法、焚口の方向などに時期による相異がみられる。掘立柱建物の柱穴はいずれも小さく、柱間寸法も5~7.5尺と小規模であり、作業場あるいは資材置場と考えられる。時期については出土遺物から天平宝字頃とそれに続く時期と想定される。遺物は大半が瓦窯跡とその前庭に掘られた土壙から出土した。軒瓦には軒丸瓦6型式29個体、軒平瓦4型式195個体がある。土器は灰原下層の土壙から多量の土師器と少量の須恵器が出土した。これらの土器は平城宮Ⅲ期のSK820と時期的に併行する時期の一括資料である。

(巽 淳一郎・清水 真一・井上 和人)

第6図 音如ケ谷第1号窯

飛鳥・藤原宮跡の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、1978年度の主要な調査として、藤原宮では東面大垣と宮西方地域等、飛鳥地域では山田寺金堂跡（5頁参照）、大官大寺塔跡と飛鳥寺東南地区等の発掘調査を実施し、それぞれ多くの成果をあげた。主な調査地域とその期間・面積などについては別表のとおりである。

藤原宮第23次調査 この調査は、概原市當日高山住宅の増設工事に伴う事前調査として実施した。日高山周辺は、藤原京右京七条一坊にあたり、昭和50年から数次にわたる調査を行ない、藤原京条坊内の坪割り、坪の利用状態が次第に明らかになりつつある。今回の調査地は、七条一坊二坪の推定地である。調査の結果、藤原京の造成に際して、日高山丘陵の東側先端部を削平し、谷筋を盛土整地した状況を把握するとともに、掘立柱建物1、井戸1、土壙9、溝3などの遺構を検出した。古墳時代の溝S D2271以外はすべて藤原宮期に属する。発掘区東端で西肩を検出した溝S D1952は朱雀大路西側溝である。第17—2次調査で東肩を確認しており、側溝幅員は5mになる。溝南半は径40cmの大玉石で護岸されている。S B2274は南北2間、東西1間以上の掘立柱建物で西へのびるが、丘陵裾が迫っており、東西も2間程度にとどまる小規模な建物と考えられる。S E2270は直径1.8m、深さ1.1mの素掘りの井戸である。埋土から曲物・横櫛・斎串・斗籠型などの木製品と、「□首首」と判読できる木簡が出土した。

二坪はその大部分を日高山丘陵によって占められており、宅地として利用された痕跡は認めがたい。一坪と二坪を区画する七条条間小路は施工されなかったよう、一・二坪が一体となって機能を果した地域と推定される。その性格については、遺構の密度が極めて薄いこと、鉄造炉跡や日高山瓦窯が存在することから、官営工房が設けられた地域と考えられる。今回の調査で出土した鎧範や銅津、斗籠型も上の推定を裏付けるものといえよう。

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6 A J H - N	藤原宮第23次	78. 8. 2~78. 9. 9	10.0 a	右京七条一坊
6 A J D - H	藤原宮第23-2次	78. 7. 10~78. 7. 24	2.0 a	
6 A W J - T	藤原宮第23-3次	78. 8. 9~78. 8. 28	2.2 a	
6 A J G - B	藤原宮第23-4次	78. 11. 8~78. 11. 15	0.7 a	
6 A J K - C	藤原宮第23-5次	79. 3. 7~79. 4. 5	1.3 a	
6 A J B - P · Q	藤原宮第24次	78. 9. 11~79. 3. 7	22.0 a	
6 A J K - 6 A J J	藤原宮第25次	78. 12. 22~79. 5. 10	24.0 a	
6 A J L - F	藤原宮第26次	78. 11. 28~78. 12. 21	5.7 a	
6 S H D	日高山瓦窯	78. 7. 13~78. 7. 28	1.0 a	宮西邊宮衙地区
5 B Y D - L · K	山田寺第2次	78. 2. 1~78. 10. 19	25.0 a	金堂・北面回廊
6 B T K - P	大官大寺第5次	78. 7. 3~79. 2. 26	19.0 a	塔・東面回廊
5 B O Q - E	夷山久米寺	78. 9. 11~78. 9. 19	0.6 a	
5 B A S - C	飛鳥寺	79. 1. 9~79. 4. 13	9.0 a	東南部

1978年度発掘調査状況

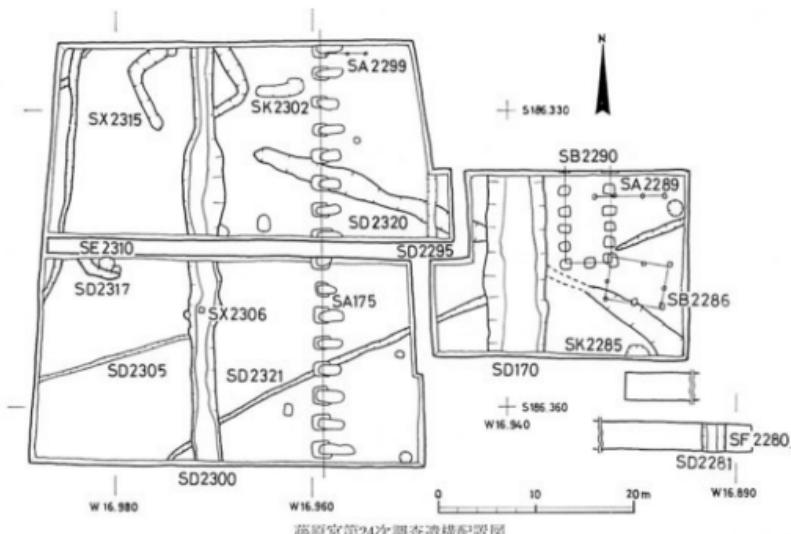
飛鳥・藤原宮跡の調査

藤原宮第24次（東面大垣）の調査 この調査は、藤原宮東面大垣とそれに伴う内濠・外濠の確認を目的として実施したものである。調査地は、藤原宮大極殿の東北約500mの水田で、宮東面北門推定地に南接する。調査の結果、東面大垣、東内濠、東外濠等を検出した他、掘立柱建物2、柵2、井戸1、溝5、方形周溝墓1、土壙多数を検出した。

東面大垣S A175は宮の東を限る掘立柱屏で、15間分を検出した。柱掘形は、一辺1.8m前後の方形平面で、いずれも東方に柱抜取穴を作っていた。そのため柱間寸法を正確に計測することはできなかったが、9尺（1尺=29.66cm）等間と考えるのが妥当であろう。これは、北面、西面両大垣の柱間寸法とも一致する。内濠S D2300は、大垣S A175の西、11.8mに位置する素掘りの南北溝で、幅2.2m、深さ0.7mの規模をもつ。溝の堆積層は3層に分けられ、上層から瓦類、中層から多量の土器類、下層からは土器類の他、木筒などの木質遺物が出土した。また、S D2300内には井戸状造構S X2306がある。4枚の板を組合せて内法方50cmの木枠としたもので、内濠と同時に存在した集水用の施設とも考えられる。外濠S D170は、大垣S A175の東方20mに位置する南北溝で、幅5.5m、深さ1.3mの規模をもつ。3層からなる溝内の堆積層のうち、上層には若干の土器類、中層には大量の瓦類を含み、下層には大量の木片とともに多数の木筒を含んでいた。外濠の東に建つS B2290は、桁行5間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物である。一辺1.2m、深さ0.6mの柱掘形をもち、柱痕跡をとどめるものもある。柱間は梁行が2.4m等間であるのに対して、桁行では、南端が2.1m、つぎの3間分が1.8m、発掘区北端が1.5mと不揃いである。S B2290は藤原宮期の造構と方位が揃い、また、東側柱列と大垣S A175との距離が100尺（29.6m）である点、さらに、東面北門の推定地に近く、外濠東岸に接して建つ細長い南北棟建物とみられる点などから、「玄倉」あるいは「廄亭」にあたる建物とも考えられる。井戸S E2310は内濠の西約10mにある素掘りの円形井戸で、径1.5m、深さ0.9mを測る。埋土の下層からは、宮の造営工事に伴って生じた廃材や手斧の削り屑に混って木筒が出土した。溝S D2305は幅0.6m、深さ0.2mの小規模な斜行溝で、内濠へ流し込む宮内の排水施設と考えられる。溝S D2295は大垣の東方11.4mにある幅0.8m、深さ0.6mの素掘りの南北溝である。北面大垣部分でも、大垣外方の同様な位置にはほぼ同規模の東西溝S D144が確認されており、S D2295もそれとともに宮の四周をめぐる可能性をもっている。南北溝S D2281は幅2.5m、深さ0.5mで、位置と規模からみて宮の東を走る東二坊大路S F2280の西側溝であろう。また、大路の路面にあたる部分には路面敷の整地とも推測される砂と粘土の互層がみられた。

藤原宮期直前、7世紀後半の造構には、建物S B2286、屏S A2289・2299などがある。建物S B2286は2間×2間の掘立柱建物で、柱間は東西方向が3.0m等間、南北方向が2.1m等間である。軸線は西で北へ約9度ほど振っている。東西3間の掘立柱屏S A2289は、中央間3m、両脇間が2.1mを測る。S A2299は東西2間の小規模な掘立柱屏である。

古墳時代の造構としては、方形周溝墓S X2315、溝S D2317・2320・2321などがある。方形



周溝墓 S X2315は東で北へ約30度振る主軸をもち、周溝心々で長辺9.5m、短辺8mを測る。周溝は最大幅1.2m、深さ0.8mで、溝の堆積土から庄内式土器が出土した。主体部は確認されなかった。溝 S D2320, 2321は外濠東岸で交叉する2条の斜行溝で、溝 S D2320からは庄内式土器が出土した。溝 S D2317は内濠の西にある幅1m、深さ0.6mの弧状なす溝で、方形周溝墓の痕跡ともみられる。

最後に、宮の地割計画について検討してみよう。まず、今回の調査成果と第10次調査（西面大垣）の成果から、藤原宮の東西両大垣間の距離925.4mが求められる。一方、宮南北両大垣間の距離は906.8mであるから、宮大垣が正方形にめぐっていたとする従来の地割復原に疑問が生じる。また、藤原京条坊は令小尺900尺（大尺750尺）四方を1坊として十二条八坊が設定され、宮はその北半4条4坊分を占めていたと考えられている。そうすると、宮の四至は令小尺3600尺を計画寸法として決定されていたことになる。従来の調査成果から、この計画寸法の実距離を復原すると約1067.5mとなり、1尺=29.65cmという値が得られる。これは、東面大垣 S A175の柱間単位尺に概ね一致する。これを基準尺にした場合宮大垣の東西幅は3120尺になるが、令大尺（1尺=35.59cm）で換算すると2600尺という、より整った完数値が得られる。しかし、今回検出した藤原宮期の造構相互間の距離では令小尺による換算値の方が整った数値を示す。また、大垣の南北長については、現在までのデータによる限り、小尺、大尺いずれを用いても完数値にならない。このように宮の地割に用いられた基準尺には多様なあり方が窺え、今後に多くの問題を残している。

第24次調査出土の木簡 今回の調査では、内濠 S D2300、外濠 S D170 及び井戸 S E2310 から総数1007点の木簡が出土した。木簡の記載内容は奴婢に関するものが多く、このことは、調査地の宮内側周辺に宮内省の被管である官奴司のような奴婢に関連した役所が存在した可能性を示すものである。

出土した木簡は文書風のもの、賛進付札、習書、削屑等の種類にわけられる。そのなかで紀年銘をもつ木簡は、外濠出土の丙申（持統10年、696年）と井戸出土の慶雲三年（706年）で、後者は削屑である。文書風のものとしては、外濠から（表）「子曰學而不□」（裏）「□不□□□」、（表）「御宮若子御前恐々謹」（裏）「末□□□命坐而自如何故」、「□雪多降而甚寒」などが出土している。このほか「七九六十三」と掛算の九九を記載したものがあり、九九記載の最も遡る例として注目される。また、奴婢関係の内容をもつ例としては、外濠出土の「官奴寮人委文□□□□」、内濠出土の「春日奴安麻」、「婢一」、「鮑浪」、井戸出土の「官奴司謹奏 謹足様 □□」、「□都支宮奴婢」、「高椅」などがあげられる。郡・評名を記載した木簡は外濠から尾張國知多郡賛代里、若狭國小丹生郡手巻里、志麻国嶋郡塔志里、内濠から三野評、海評佐々里が出土している。なお井戸からは「^{〔東〕}安麻呂」「^{〔東〕}志二」、「柳衣一匹」、「生糸二□」など、削屑ではあるが、衣服に関する内容をもつ例が多く出土している。

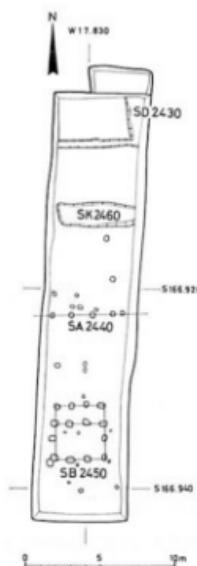
藤原宮第25次（国道165号線櫛原バイパス）の調査 この調査は、国道165号線櫛原バイパスの予定路線で工事に先立って実施したものである。調査地は西二坊大路の西側にあたり、右京三条三坊二坪から右京五条三坊一坪にかけての南北に細長い地区で、三条大路、四条条間小路、四条大路の存在が予想された。調査の結果、藤原宮期の主な造構としては、掘立柱建物5、掘立柱東西塀1、井戸3のほか、三条大路南北両側溝、四条条間小路南側溝を検出した。四条大路及びその南北両側溝は、後世そこが河川の流路になっていたため検出できなかった。また、掘立柱建物は、いずれもその一部を検出したにとどまり、規模などは不明である。今回検出した条坊関係の資料を昭和52年度に行なった165号～小山線拡幅工事に伴う事前調査（藤原宮第21～2次）の成果と照らし合わせてみると、国土方眼に対する条坊の振れが求められる。それによると、三条大路南側溝は、E $^{\circ}$ 50.5'N、四条条間小路南側溝は、E $^{\circ}$ 55.5'Nの振れになる。ところが、第21～2次調査と第16次調査（西一坊坊間小路）の成果によると四条条間小路の振れは、E $^{\circ}$ 25'Nとなり、また、西一坊坊間小路と東二坊坊間小路の間での振れはE $^{\circ}$ 39'Nというように一定していない。このように、藤原京条坊の振れは部分によって少しづつ異っている可能性が考えられるのである。京全体としてこれがどのようにおさまるかについては今後の課題である。なお、今回の調査によると、三条大路は溝心々で約9m（3丈）となり、従来考えられてきた大路幅より狭い点で、今後に問題を残している。最後に、道路側溝の位置を国土調査法第6座標系のX座標（南北方向）で示しておくと、三条大路北側溝（幅約1.7m）は-166303.3、同南側溝（幅約1.2m）は-166312.1、四条条間小路南側溝（幅約1.0m）は-166449.1となる。Y座標（東西方向）はいずれも-18000付近である。

藤原宮第26次の調査 調査地は藤原宮の西辺地区にあたり、昭和48・49年に行なった第10次調査地の東側に接する。調査の結果、藤原宮期の造構として、掘立柱建物1, 構1, 溝1, 土壙1などを検出した。掘立柱建物SB2450は、身舎3間×2間の小規模な東西棟建物で北面に廊がつく。梁行は1.8m等間、桁行は1.66m等間である。東西方向の構SA2440は、SB2450の北廊から約9m北にあり、柱間は2.1m等間である。土壙SK2460は、東西方向に長軸をもつ長方形平面の土壙で、東端は発掘区外につづく。幅2m前後、深さ0.25m前後で長さ7.5m分を検出した。発掘区の北東隅で検出した溝SD2430は、幅2.3m、深さ0.3mの素掘りの南北溝で、発掘当初、西二坊坊間小路の西側溝であろうと想定していた。しかし、溝SD2430と第5～7次調査で明らかにされている西二坊坊間小路の西側溝SD1080とを結ぶと、方眼方位に対して北で $0^{\circ}45.5'$ 東に振れることになり、從来知られている条坊の振れと逆の方向を示すだけでなく、溝幅の違いなどもあって、同一の溝とするには疑問が残る。

下層の弥生時代の造構については、後期の北西方に向流れる溝(幅約2m、深さ約0.9m)のほか、中期・後期の土壙、小ピット多数を検出している。

遺物としては絵画を描いた土製品の破片が注目される。これは、銅鐸をそれに近い大きさで模した土製の鐸の一部かと推定し得るものであり、從来の銅鐸形土製品とは形状を異なる。なお、土製品そのものの年代については、文様構成、調整手法などの点から弥生時代中期末頃と考えられるのであるが、出土した層位は、第V様式の古い段階の土器が出土した土壙より上位の遺物包含層である。

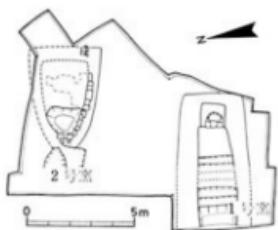
日高山瓦窯の調査 この調査は日高山公園の西斜面改修工事に伴って実施した。日高山瓦窯は、昭和35年に奈良県が発掘調査を行ない、藤原宮所用の瓦を焼成した平窯1基を検出している。昭和52年には奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターが磁気探査を行ない、西から北斜面にかけて3～4基の窯が並列することを確認した。磁気探査の成果をもとに行なった今回の調査では、構造の異なる2基の瓦窯を検出し、藤原宮の瓦生産に関する新知見を得た。1号窯は 17° の傾斜をもつ登窯で、焼成部・煙道部と燃焼部の一部を検出した。構築に際しては、丘



藤原宮第26次調査造構配置図



絵画のある土製品 (1:2)

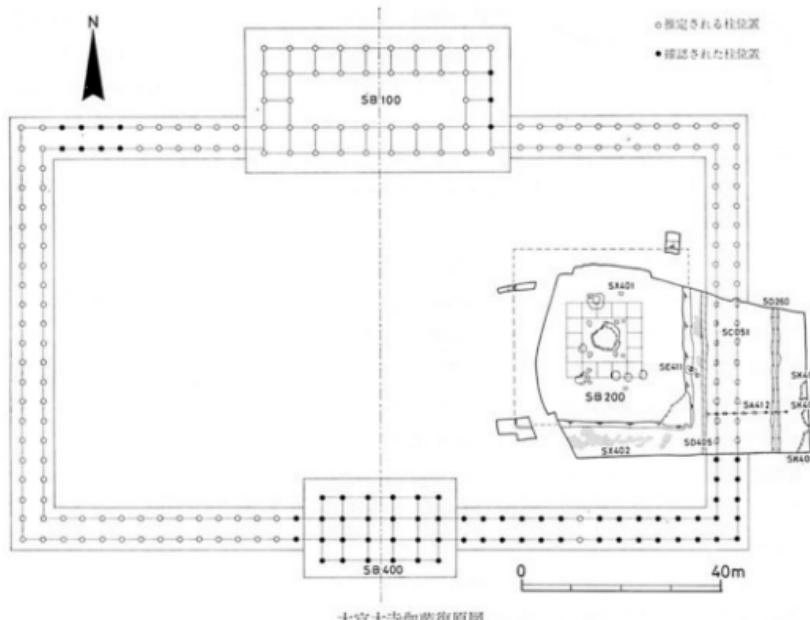


日高山瓦窯遺構配置図

陵斜面の花崗岩岩盤に大きく掘形を穿ち、その内壁に沿って粘土を版築状に積み上げて窯体の外枠を作り、内面に粘土を厚く塗って窯壁を仕上げている。焼成部は幅1.6m、長さ3.8mで、地山削り出しの階段を6段設ける。煙道部は奥壁に日乾レンガを3列8段に積み上げ、 $0.3 \times 0.2\text{m}$ の煙道1ヶ所を設置する。煙道は奥行0.6mほど水平に延びてから直角に立ち上がり、地上へ通じる。燃焼部は幅1.5mで長さは0.5mを検出したに留まる。1号窯からは瓦の出土がなかったが、焼成部から7世紀後半の土師器鍋・須恵器高杯が出土している。2号窯は平窯で、遺存状態が悪く、南壁と焚口、煙道の一部を検出したに留まる。残存部から原形を復原すると、全長4.7m、最大幅2.5mの平面拘子形となり、昭和35年発見の平窯に類似した構造が考えられる。花崗岩地山を平面拘子形に掘りこみ、その内側に暗赤褐色粘土を埋めしながら日乾レンガを平積みし、内面にスサ入り粘土を厚く塗って窯壁を構築する。焼成部奥壁の南端には日乾レンガ敷の煙道底面が残る。位置からみて煙道は3ヶ所に配置されていたものと推定される。焚口には日乾レンガが3段に残り、内法幅0.15mを測る。燃焼部から軒丸瓦6274A、軒平瓦6647C各1点、熨斗瓦6点と大量の丸・平瓦が出土した。

今回の調査の結果、日高山瓦窯には登窯と平窯という二種の構造の窯が存在することが明らかになったが、両者の焼成瓦の型式の異同や操業期間の問題等、今後の調査に期したい。

大富寺第5次(塔・東面回廊)の調査 本調査は塔跡を中心に、東面回廊の一部をも含む範囲を対象として実施した。調査地は字「塔ノ井」に残る土壇と、それに接する東・南の水田である。調査の結果、塔の規模・構造が明らかになるとともに、東面回廊・溝・井戸・掘立柱塀などの遺構を検出した。塔の礎石は、明治22年に権現神宮の造営資材として搬出されており、現存するものはない。塔基壇は四辺の上部を大きく削平されていたが、東西36.3m、南北37.3mと現状土壇を大きく上回る規模の基壇を検出した。基壇端には階段施設や基壇化粧の痕跡がなく、約25度で立上がる傾斜面を形成している。基壇の築成は、西辺部では整地土を0.3mほど掘り込んでいるものの、他の3辺では旧地表面に直接土を積み上げて、版築する。基壇内部には築成当初に幅約0.8m、深さ0.2~0.4mの溝をめぐらすが、基壇上部からの流出土によって短期間のうちに埋没している。この溝の底面内側を築成計画に基づく基壇縁として捉えると、一辺35mの正方形基壇が復原される。溝埋没後に、基壇周囲にバラスが敷かれている。バラス敷S X402は、基壇南面を中心に東面に及ぶが敷き方は粗雑である。基壇周囲には多量の焼土と焼瓦が堆積しており、塔も中門や「講堂」と同様に焼失した状況が窺われる。基壇上面は耕作による擾乱が0.8mの深さに及んでいたが、礎石抜取穴と据付け掘形7ヶ所を検出し、方5間、一辺50尺の塔を復原することができた。側柱では南列東第1~3・5と北列東第4の5ヶ所で抜取穴を確認し、このうち後3者では据付け掘形をも検出した。入側柱では西列南第2



大官大寺伽藍復原図

の1ヶ所で据付け掘形を検出したにすぎない。基壇中央から発見された心礎抜取穴は、南北5.6m、東西5.4mを測り、深さは現基壇面から約1mである。据付け掘形はみられず、基壇の築成に先行して心礎が据えられた状況を示している。心礎は、明治初年に画かれた岡本桃里の礎石見取図によると、東西10尺・南北12尺の花崗岩巨石の中央部に径4尺の円形柱座を彫り込み、さらにその中央に舍利孔を穿ったものであったことが知られる。四天柱礎石の痕跡は認められなかった。心礎の大きさを考慮すると、四天柱礎石を置く余地はなく、当初から存在しなかった可能性が高い。SX401は塔造営時の足場穴である。東・西の入側柱と心礎の間を南北に並び、東西の柱筋の中央に配されている。東面回廊SC051は、第3次調査で回廊東南隅から4間目までを確認していたが、今回の調査で新たに7間分を検出した。礎石はすべて原位置を保つ。柱間は梁行4.2m(14尺)、桁行3.9m(13尺)等間である。回廊基壇は、西に向って緩く傾斜する地山上に0.1~0.3mの厚さで数層の基壇土を積上げた簡単な地業で築成されている。礎石は積土の最終段階に掘形を穿って据えられている。塔と東面回廊の間を南北に走るSD405は、塔と回廊の近接しすぎたこの地区に特に設けられた回廊雨落溝と考えられる。この雨落溝によって、従来不明確であった回廊の基壇幅8.4m(28尺)、軒出2.4m(8尺)が明らかになった。SD260は幅1.5m、深さ0.5mの素掘りの南北溝である。溝底に堆積する青灰粘土層中には、手斧の削り屑などの木片が多量に含まれ、白土や灰斗瓦の一括投棄もみられる。埋

飛鳥・藤原宮跡の調査

土の状況は、大官大寺焼失前に人為的に埋戻されたことを示しており、大官大寺の造営に関わる溝と考えられる。SK406~408は調査区東端に集中する不整形な土壙で、焼失前に掘られたものである。大官大寺焼失後の遺構には、掘立柱東西廊SA412、素掘りの井戸SE410、乱石積と瓦積を併用して築いた井戸SE411がある。

出土遺物には、瓦塊類、金属製品、土器等がある。軒瓦は千数百点を数えるが、所謂「大官大寺式」に限られ、軒丸瓦では6231Cが、軒平瓦では6661Bが9割以上を占める。これまでの調査によって、「講堂」所用瓦が6231A~6661A、中門及び回廊所用瓦が6231B・C~6661Bの組合せをもつことが知られており、塔所用瓦が中門・回廊に近似することが明らかになった。金属製品には、金銅製隅木端飾金具・風鐸・小銅鏡・銅釘・鉄釘等がある。隅木端飾金具は方形の枠内に透彫りの唐草文を配し、周縁に沿って毛彫りを施すものである。風鐸は断面扁円形の身部を重帯の袈裟模文で区画し、上部に乳を配している。小銅鏡は径4.7cm、縁厚0.4cmの素文鏡で、鎮壇具の一つとみられる。この他、焼けた壁土が多量に出土した。葉スサ入りの荒壁に0.5~0.8cmの厚さで白土を塗って仕上げている。塔の土壁であろう。

今回の調査によって、九重塔と伝えられる大官大寺の塔が、方5間、一边50尺の巨大な平面規模をもつことが明らかになった。柱間は10尺等間で、四天柱礎石のない特殊な構造が推測される。出土遺物から塔建物は既に完成の段階に達していたことが窺えるが、基壇の外装に至る前に焼失した状況を確認した。この大官大寺の焼失時期を「扶桑略記」にみえる和銅4年と考へると、塔の造営はそれを大幅に遡るとは考え難く、「続日本紀」や「大安寺伽藍縁起井流記資材帳」に記されたように、文武朝の造営とみるのが妥当であろう。

飛鳥寺東南地区の調査 この調査は、史跡飛鳥寺跡の現状変更申請にもとづき実施したもので、調査地は飛鳥寺寺域の東南部に位置し、南門から東にのびる築地とその南に接する区域にある。調査の結果、築地、塀、掘立柱建物、木樋、石組溝など注目すべき遺構を多数検出した。それらは遺構相互の重複関係や遺物から4期に大別できる。

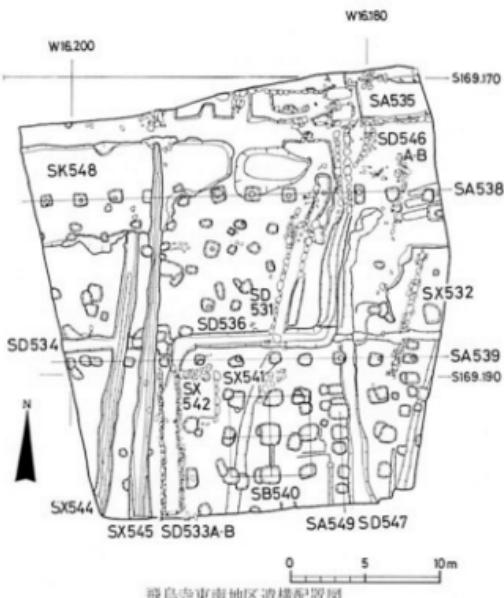
I期の遺構としては、築地のはかにいくつかの溝などがある。飛鳥寺中心伽藍の南を画する築地SA535は、南北をそれぞれ玉石列にはさまれる幅2.5mのもので、北面の玉石列は創建時のものである可能性がある。溝SD531は大型の石を両側に配した幅1.2mの南北方向の斜行溝。斜行石列SX532は、長さ9mに亘り玉石を2列にならべその西側に高さ30cm前後の石をたてている。溝SD533Aは、最下段に比較的大きな石を、2段目以上にはやや小型の石を積んだ幅1mの南北溝で、途中で西に折れ素掘りの東西溝SD534に続く。溝SD531、斜行石列SX532の方位は、飛鳥寺南門南側の石敷広場北縁の振れに類似しているほか、出土遺物などからみても、I期の遺構は7世紀前半と推定される。II期の遺構としては、掘立柱建物、塀、溝などがある。掘立柱建物SB540は2間×2間の倉庫風の縦柱建物で、柱間は9尺等間である。築地SA535の南6mにある塀SA538、そのさらに南11.5mにある塀SA539は、いずれも柱間8尺等間の東西方向の掘立柱塀である。SB540の東にある塀SA549は、柱間9尺

等間の南北方向の掘立柱跡である。溝 S D536 は幅 1 m の素掘りの東西溝で西は南に折れ溝 S D533B、東は北に折れ溝 S D546A となり築地 S A535 の下を通る。S B540 の西には長さ 3.5 m にわたって基壇縁状の玉石列 S X541 があり、その西北には集石暗渠状の施設 S X542 がある。S X544 は幅 1 m の溝で、底部は 25 cm 幅でさらに一段深くなっている。S X545 は木樋の導水路で、木樋本体は長さ 6 m 前後、外径 20 cm 前後の身と厚さ 5 ~ 10 cm の蓋板からなるものを見つけており、材はコウヤマキである。S X545 の掘形は幅約

1 m で、底部をさらに一段掘り込み、そこに木樋を据えた後、上部を粘土で固めている。これは飛鳥寺内に向って流れる上水施設であり、当初は西側にある S X544 に設置されていたらしい。Ⅲ期の造構としては、溝 S D546A の幅をせばめ、北半では両肩に玉石をならべた南北溝 S D546B がある。築地 S A535 と交わる部分では、上部に 2 枚の大石を配し、その下を暗渠として通す。溝 S D547 は幅 1 m の素掘り南北溝で、7 世紀末 ~ 8 世紀初頭の土器を含んでいる。Ⅳ期は中世の造構で発掘区の西北に広がる土塙 S K548 がある。

飛鳥寺の寺域は南北 3 町であることが判明しており、それによると寺域南限は石敷広場の南縁にあたる。これからみても、今回の調査地が寺域内に含まれることが明らかである。このことは築地 S A535 で検出した大石で蓋をした暗渠の存在などからも窺えることであり、この暗渠は幾度かの改修をうけながらも、Ⅰ期の溝 S D531、Ⅱ期の溝 S D546A、Ⅲ期の溝 S D546B という各時期の溝の流入口として機能していた。今回の調査地内では、飛鳥寺中心伽藍の南を画する築地 S A535 がまず造られ、その南は空閑地として、溝 S D531 などが存在していた。Ⅱ期になると、築地の南が溝 S A538・539・549 などで区画され、その一部に掘立柱建物 S B 540 が建てられ、溝のつけ替えなども行なわれた。この状況は、文献にみえる道昭の禪院を想起させる。『続日本紀』や『三代実録』によると、道昭の禪院は 662 年に元興寺(飛鳥寺)の東南隅に建立したと記されており、飛鳥寺寺域の東南に位置する建物 S B 540 などの造構は、年代的にみても、この禪院と関連するものといえよう。

(小林謙一、松村恵司)



飛鳥寺東南地区造構配置図

古代の誕生仏の調査

飛鳥資料館

飛鳥時代から平安時代にかけて制作された誕生仏は、各地の寺院に伝来したもの、寺院跡等からの出土品、個人蔵のものなど全国で約70体が知られている。しかし、その大部分は小像で細部の表現が省略されており、土中あるいは火中に焼けた例も多く、その制作年時、様式等の研究は従来あまり上げられる事がなかった。飛鳥資料館では、このうち東は栃木県から西は熊本県に至る20都府県から、伝来品・出土品を中心にして44体の誕生仏を展示する「古代の誕生仏」展を53年度特別展示として開催した。その成果は既に図録『古代の誕生仏』として刊行したが、ここではその調査成果を要約しておく。

古式の誕生仏の作例には様式上二つの系統が認められる。その一つは愛知県正眼寺像を代表例とするもので、古式の微笑をたたえた面長な頭部や衣の襞の表現は、法隆寺献納宝物中の止利式の如来像などと様式的に共通している。この他愛媛県石野氏像も同系統の作品として捉えられる。もう一つの系統は福岡県聖福寺像や香川県与田寺像で、同じく7世紀の作品ではあるが、三国時代の朝鮮半島の影響下に制作されたもので、長身に作り頭部が小さく肉脛も小さめにあらわすなどの特色がある。前者の系統に続くものとしては奈良県尼寺像や奈良県薬師寺像がある。これらは表情などに厳しさが薄れ、体軀の表現にも柔かみのある質感が見い出されるところなど白鳳時代に入れるべきであろうか。同じく後者の系統につらなるものとしては奈良県倉田氏像や愛媛県石丸氏像がある。

典型的な白鳳彫刻の作例としては、奈良県悟真寺像、大阪府田万氏像がある。丸い童顔や彈力の感じられる肌、質感のある裳の襞の表現などに特色がある。京都府久世庵寺から出土した像もかなり写実的になっているが、白鳳時代の終り頃の誕生仏の優品の一つに数えられるもので、この系統の作例には京都府笠置寺像、滋賀県大光寺像などがあり、これらは更に写実味の加わった表情や裳の表現などから8世紀に入っての作品と考えられる。

天平時代を代表する作品は奈良県東大寺像である。丸々と太った顔付、柔かい体軀の肉づけやいかにも幼児らしい上膊や腹部のくびれなど、天平期の写実的傾向が遺憾なく發揮されている。この形制を引き継ぐものに滋賀県善水寺像があげられる。豊かな肉づけや裳の表現に東大寺像と共に多いが、頭部の形状や嚴しさの加わった面相などむしろ平安初期の木彫像に見られる特色と共に多くの点に入るべきであろうか。

平安時代の作例はこれまで余り知られていないが、今回の調査を機にいくつかの作例が確認された事も大きな収穫であった。愛知県顯宝寺像の幅広い條帛や裳の表現は平安前期の特色をよく示し、京都府西林寺像や千葉県中島氏像、愛媛県北谷区有像の逆三角形にあらわす裳の折り返し部の表現、特に西林寺像の頭部や体軀の表現は、平安後期木彫像の特色をよく写しているといえよう。なお、この特展に因み、久世庵寺出土像の模造を製作した。(大脇潔)

武吉氏寄贈の古瓦

飛鳥資料館

飛鳥資料館は昭和54年1月25日、武吉道一氏（神奈川県三浦郡葉山町）より古瓦8点及び千葉県竜角寺仏頭模造（香取秀真製作）を御寄贈いただいた。このうち古瓦資料は、氏が関西在住の折蒐集されたもので、豊浦寺、松隈寺など奈良県出土の資料を主とし、他に大阪府、千葉県出土の資料を含む。ここにその一部を紹介し、武吉氏の御厚意に報いたいと思う。

1. 奈良県豊浦寺 いわゆる高句麗系の單弁8弁蓮華文軒丸瓦。須恵質に近い焼成で極めて堅緻。丸瓦広端四面を削って接合する。和田庵寺、平吉遺跡に同範例がある。
2. 千葉県竜角寺 突出した外縁に3重圓をめぐらす山田寺式の單弁8弁蓮華文軒丸瓦。中心の蓮子が大きく、蓮弁の輪郭線が失なわれ、子弁も細い点などに独自性が認められる。瓦当裏面を上下に2分する横一文字の篦描き沈線がある。
3. 大阪府善正寺 平坦な外縁に3重圓をめぐらす單弁8弁蓮華文軒丸瓦。善正寺にはこの他に類似の瓦当文様の軒丸瓦が2種あるが、本例は全体に平板で間弁が相互に連なるなど最も後出のものであろう。丸瓦広端四面を削って接合する。瓦当面には木目の痕跡が著しい。
4. 奈良県松隈寺 6275G型式。瓦当裏面全体に接合粘土を1層足して接合する。接合粘土の剥離面には一部布庄痕が残る。接合手法は藤原宮出土の6273Bの割型作りのそれに類似するが、側面は丁寧なナデ調整を施すため割型合せ目などの痕跡は認められない。
5. 奈良県東大寺 6301C型式。いわゆる興福寺式軒丸瓦のうち最も小振りのもの。興福寺と平城宮に同範例がある。注記によれば戒壇院から出土したというが、やや疑問がある。
6. 奈良県大安寺 単弁か複弁か表現が不明確。外区外縁は素文。瓦当は厚い。（大脇 澄）

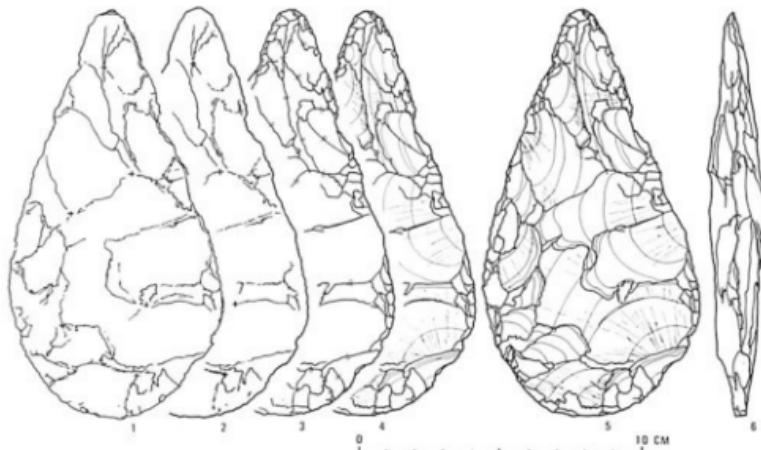
新たな石器の図化と応用について

埋蔵文化財センター

石器図化についての一応の成果は前年度の年報に書いた。その後、図化の相談にあずかる西尾元充氏より、問題点となっていた厚さに対する重みを解決できたむねの朗報を受けとった。

機構はごく簡単である。鏡、ビームスプリッターを使用し、基本的にはレンズを用いないのでゆがみの心配はない。実大を原則とし、拡大図には拡大鏡を中間に置くこともできる。資料台上の遺物はファインダーを通して描画台上に虚像を写しだす。何はともあれ、この機構の重要な関心は厚さの処理にある。両眼でのぞくファインダーから、描画台上の虚像をたどる鉛筆の先端が、写真測量で使う図化機のメスマーカーと同じ役目を果してくれる新事実がこの機構の重要な特徴となっている。したがって遺物台を上下させることによって、虚像上の任意の位置にメスマーカーを置くことができる。これは描画台を基準面と考えると高さの異なる点を正射投影している結果になる。図示した石器はこうしてとらえた輪郭線と剥離面界線だけに限っている（図中の1）。この程度の図は3～5分で描き出せる。やや時間をするが側面形の素図も同程度のものである。この素図をもとにして修正図をつくる。この機構ではどうしても描き出せない縁部の小剥離面などを注意深く修正する。この図のためには約2時間をかけている。要求に応じて短縮することもできよう。最後に面の切合関係、リング、フィッシャーをいれて10～20分で完成する。この機構は、他に金属器、木器、木筒、墨書き土器など小形遺物の実測に応用してみたが、拡大率を除いて、正確さ、迅速性ともに有効であった。

（松沢 亜生）



図化例（素描図から修正図へ）

埋蔵文化財センターの情報処理活動

埋蔵文化財センター

埋蔵文化財関係図書資料のマイクロフィルム化 埋蔵文化財関係図書資料の刊行数は年々増加し、その収集と管理・活用のシステム化は急務となっており、当センターでは、1977年度から調査報告書等のマイクロフィルム化を始めている。埋文関係図書のマイクロフィルム化は、原本の保全・忠実な複写を主目的とし、資料収納空間の節約・資料の半永久的保存と簡便な活用をねらいとしている。マイクロシステムの概要は第1図を参照。銀塩16ミリ100フィートロールフィルムを使用し、図書ごとに与えたロール番号・撮影日・縮小率等を表示したターゲットを写し、本は見開きを1駒とし全頁を撮影する(第2図)。写真掲載頁は、別途、16ミリX線写真用フィルムに写す。現像後、オリジナルネガ(N₁)から第2ネガ(N₂)を銀塩のネガーネガ方式で作製しこれを保存用とする。X線フィルムについては、閲覧用のポジ(XP)も複製する。この各オリジナルネガ(N₁・XN₁)とポジ(XP)とも図書ごとに編集してジャケットに入れ、マスターねがとする。これからジアゾ方式でフィッシュを複製し、これを活用ねがとする。活用ねがの検索については、ロール番号を検索番号とし、図書カードによる検索方法を採用している。マイクロフィルムの利用にあたっては、リーダーによる閲覧、リーダープリンターによるハードコピー化を行なっている。1978年度末現在、図書約2,500冊(フィルム140巻、ジャケット7000枚)を撮影、年間約1,700冊(フィルム約100巻)の割合で撮影している。マイクロフィルム化で問題となるのは写真頁である。現在、X線フィルムを利用しハーフトーンの再現につとめているが、ハードコピー化の段階では写真の再現度は必ずしも満足できる状態でなく、今後の技術的な課題となっている。また、フィッシュの任意の収納と迅速な検索を可能にする検索装置の導入も、将来の活発な利用に先立って、検討すべき段階に至っていると言えよう。現在、京都大学所蔵図書の一部を借用し撮影を進めているが、今後、他の諸機関の協力を得、埋文関係図書資料の収集をはかるとともに、研究所蔵書のマイクロフィルム化も進め、情報サービスの具体化を検討していく必要があろう。

(山中 敏史)



第1図



第2図

埋蔵文化財センターの情報処理活動

航空写真リスト作成 当研究所は、日本測量学会、日本写真測量学会の依頼を受け、航空測量用に撮影された航空写真原フィルムを保管している。従来各航空測量会社では、フィルム保管スペースの不足という理由で、撮影年度の古い順に廃棄処分をしていた。しかしながら、これ等昭和30年代に撮影された航空写真は開発前の国土の様相をよくとらえ、考古学・歴史地理学にとどまらず、防災・交通工学などの分野からも保存の要望があった。この原フィルムは一種の文化財であるという観点から、比較的保管場所に余裕のある当研究所が保管の要請を受けたものである。しかし、このフィルムを利用するには、どの範囲がどういうデータで撮影されているかが容易にわからなければならない。このための整理の第一段階として、各会社が作成したいいろいろな様式・縮尺の標準図を、国土地理院発行の「 $1:20$ 万 地勢図」を基準として統一した規格にプロットしなおす作業をおこなった。さらにそれを、 8×8 のメッシュに分割しコードを付した。これが今年度作成した「フィルムリストII」である。これは先年発行した「フィルムリストI」につづくものであり、リストI・IIをあわせると現在保管中のフィルムのほぼ半分がリストアップされることになる。

現在の保管数は約5,300件、3,000缶で、おおよそ40万枚になる。この膨大な資料を生かすべく第1次リスト作成につづき、マイクロフィルム・コピー作成など、検索システムを充実させる事が今後の課題である。

(伊東 太作)

遺跡に関する情報の処理・活用システムの研究 上に説明したような情報収集・整理の業務と併行して、センターでは遺跡関係の情報システムについての研究を継続的にすすめてきた。この研究は一つには、コンピュータを利用する情報の整理・活用システムを実現していく上での細部にわたる技術的な諸問題を明らかにし、できる限り解決をはかる目的としているが、同時に情報資料の蓄積・整理の仕事と、いくつかの実験的な研究作業を通じて、埋蔵文化財がおかれている社会的な現状の中で、情報利用のシステムの果しうる役割、システムがもつべき規模や構造、将来的な可能性等についての基礎的な検討も重要な課題とするものである。情報活用システムに必要となるシーラス作成のための考古学関係用語抽出と分析の作業は、処理プログラムを改良しながら資料の数を増やし、現在約3万5千の用語のカード化と分類が終った段階にある。この仕事と関連して大型電算機の漢字処理能力を利用する文献整理の研究の一つとして和名類聚抄の地名を入力して、頭字と第2字の部首画数順および音読順の4通りの配列で出力し、これに呼称の50音順のリストを加えた索引を作成する実験をおこなった。成果の一部は「古代郡郷里駅名索引稿」として既に刊行済みである。また直接に遺跡遺物にかかる資料の組織化と検索の研究作業として、平城宮出土の軒瓦約2万5千の拓本カードの記載事項の入力の実験もすすめている。これについては各種の用語の整理、特に遺物の出土層位の記述の全体としての関連づけがさらに必要であり、処理結果の出力形式についても幾つか問題があるので、整理検討の作業を行っている。

(岩本 主輔)

千歳市キウス環状土籬群の測量

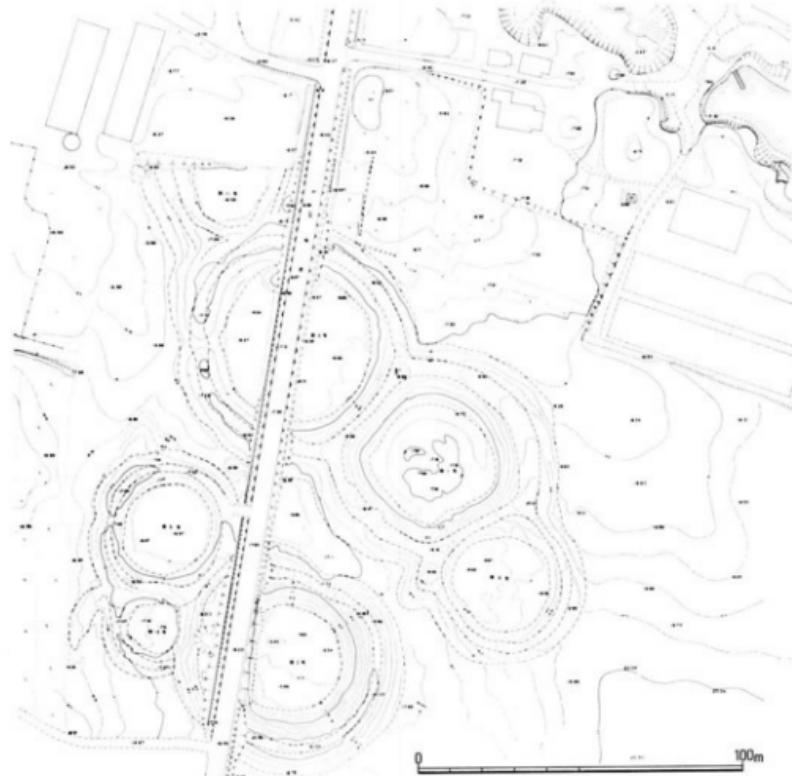
埋蔵文化財センター

環状土籬は縄文時代後期末に、北海道において出現する特殊な埋葬施設である。環状に土を盛りあげ、その土堤によって内外を区画して墓壙を設ける。本州にみられる環状列石と同様の遺構といわれている。

キウス環状土籬は、千歳市東北郊外にある大規模土籬群である。最大のものは直徑75m、周堤の高さが5mをこえるものを含んでいる。千歳市教育委員会はこの土籬群を、分布調査の一環として実測調査することになり、当センター測量研究室がこれに全面的に協力した。

実測は基準点測量と細部測量の二段階にわけて実施したが、細部測量の際には新たに二基の土籬を発見することができた。野外作業に要した日数は合計21日である。 (西村 康)

*「千歳市における埋蔵文化財(上)」(『千歳市文化財調査報告書』V 1979)



平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

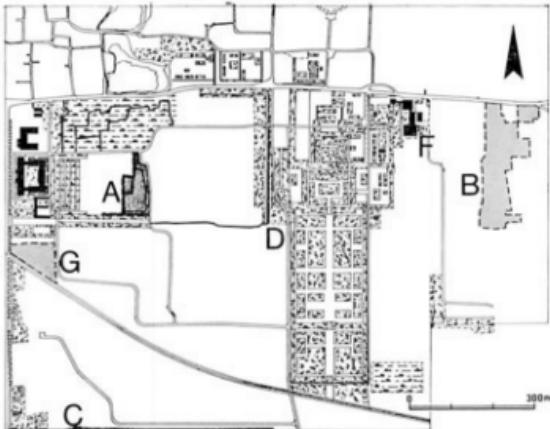
1. 平城宮跡の整備(9)

1978年度の宮跡整備は、草園整備、法華寺町民家隣接地の盛土整地、水路改修、平城宮資料館周辺灌木植栽、便所新設、資材置場造成および覆屋展示施設模様替工事を行なった。

草園整備 平城宮跡北西部の北から南に走る谷筋で、御前池・佐紀池に連なる湿地帯を利用し、北を1971年に整備した草園に、東および南を道路に、そして西を資料館に囲まれた地区の東部約6,900m²について、水面の造成を主とした整備を行なった。水源となる佐紀池の池底高との関係から水面高が制限されるため、自然流下で溜め得た水面は約4,600m²程度である。また現況地形からは15~25cm以上の水深を得ることはできず、いずれ雑草により水面を覆われる可能性も大きいことから、雑草の根株を除去することのできる範囲(10~20cm)の表土のはぎ取りを行ない、最大35cmの水深を得るようにした。池の西侧では旧畦畔を残す形で苑路とし、池側は焼丸太柵を設け、汀線は竹柵により護岸を行なった。なお竹柵は造構に影響を与えないよう池底面でコンクリートの根まきを行ない杭の打ち込みは避けた。池外周部はススキを、苑路沿いにはコバノガマズミ、ナツハゼ、ハギ等を植栽し、水面内には水中に床を造成しマコモおよびカキツバタを植栽した(第1図A)。

法華寺町民家隣接地の盛土整地 1972年の夏から秋にかけての異常乾燥のため、宮跡雑草地内でワラジ虫(甲殻綱等脚目ワラジムシ科 *Porellio scaber*)が大発生し、隣接民家に侵入するという苦情を連日受けた。調査の結果、枯草堆積層や腐植土中にワラジ虫が多数認められたため、種々の殺虫剤散布、草刈りや耕耘除草などを実施したが、市販されている薬剤ではあまり良好な結果は得られなかった。耕耘除草作業についても実施可能な面積に限界があり、労働力および経費の面からも今後継続的な実施があまり期待できないことなどから、未整備雑草地に隣接する民家の多い宮跡東辺中央部について平均30cm厚の盛土・整地を行ない、害虫の繁殖を防止できるよう処置をとった(第1図B)。

水路改修 今年度は宮跡南辺部および中央緑陰帯内水路



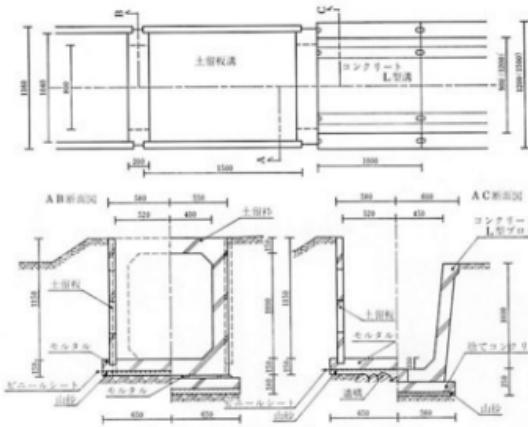
第1図 平城宮跡整備図

の2ヶ所について改修を行なった。

南辺部の水路は、宮跡内の雨水はもとより、北側の佐紀町の集落および秋篠川以東の二条町一帯の雨水排水が流入する幹線水路である。しかし水路は素掘溝で浅く狭いことから、宮跡南側の田畠の冠水や民家への浸水が多発する状態であった。そこで1mの高さのL型コンクリートブロックを内幅1.2mで両側に立て、ブロック間の溝底部分をモルタルでつないだ。なお本水路は平城宮の南を画する築地大垣と平行し、一部では築地基壇と重なり、朱雀門基壇部分およびその付近で築地基壇遺構の残存を確認したため、残りの良い東方約390m分は水路幅を0.9mに縮め施工した。また朱雀門跡では水路底面より礎石の根石を検出したため、溝底計画高を10cm上げ、根石を砂養生し、その上をビニールシートで覆い、モルタル敷きの上に土留用コンクリート板を溝の両側に立て、後日取り外しの容易な工法をとった(第1図C、第2図)。

中央緑陰帯には造構表示として、第2次内裏外郭築地の西側を流れる南北大溝(SD3715)を和泉砂岩割石で護岸し表示しているが、当初50cm程度と推定していた溝幅は、その後の調査によって1.2mであることを確認したため、割石講を1.2m幅に拡張する工事を約160mについて行なった(第1図D)。

その他 資料館建物の修景および展示、研究室と外部一般利用者との分離を目的とし、資料館外周の東側および南側にハクチヨウゲを、北側にヒサカキを316m²について植栽を行なった



第2図 朱雀門跡付近水路改修詳細図

(第1図E)。見学者の増加に伴い特に東方覆屋地区での便所の増設要請が強く、堆積覆屋の東側に鉄骨ブロック積造の便所(38m²)を1棟新設した(第1図F)。その他発掘調査や整備用の発生資材(石材、木材、玉砂利等)の置場として、佐伯門の南で近鉄線までの宮内道路と西面土壁に閉まれた地区を整備し、周囲に高木植栽を行ない外部からの景観を考慮した(第1図G)。

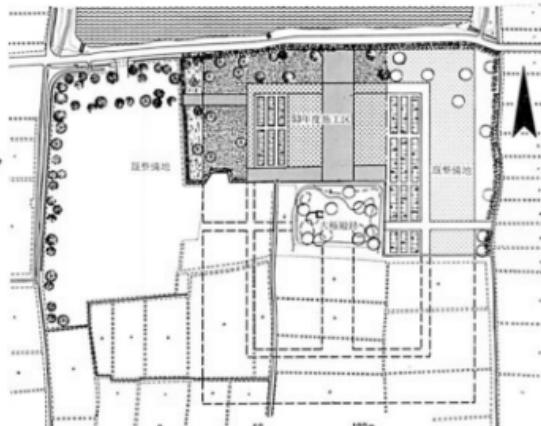
2. 藤原宮跡の整備(3)

1975年度に作成した藤原宮跡の大極殿・朝堂院地区についての暫定整備計画（1976年奈良国立文化財研究所年報）にそって、大極殿北東部・北西部の整備を2ヶ年にわたり実施して來たが、今年度は大極殿北部の旧鶴公小学校跡地（約5,360m²）について整備を行なった。工費は22,000千円であった。

造構の表示としては、1975年に始めた大極殿を囲う回廊を保存ブロックとし、まだ部分的にしか発掘調査が行なわれていないことから、回廊造構をその中に含んだ幅（22m）で凝灰岩緑石をまわし盛土し張芝を行なった。また昨年度の発掘調査の結果、朱雀大路の計画線（幅員15m）が大極殿のすぐ北側で確認されたため、この範囲をクラッシャーラン敷きとし苑路とした。その他大極殿の北側で東西方向に一条の掘立柱列が検出されたことから、これを表示する意味で大極殿との間をクラッシャーラン敷きとし、西側からの苑路とした。

回廊保存ブロックの内側は玉砂利敷きとし、その中に初年度に実施したと同様、今後の整備に使用できるような灌木類を育成する苗圃を造成し、アセビ、クチナシ、ジンチョウゲ、ツゲ、ハギ等の苗木を植栽した。高木の植栽は、1971年度に造成した西側の多目的広場および駐車場の外周を中心、アラカシ、イチイガシ、オシマザクラ、シラカシ、ツブラジイ、モクセイ等82本を用いた。また鶴公小学校運動場跡地の西および南西隅部については、多目的広場との間にレベル差があり、両者間に溝も並行していることから、転落等の危険性を考慮し回廊保存ブロック側に灌木の植栽を行なった。

（渡辺 康史）



第3図 藤原宮跡整備図



第4図 藤原宮跡の整備状況

遺跡・遺物の保存科学 (6)

平城宮跡発掘調査部

木棺の保存法に関する研究

(1)高松塚古墳出土漆塗木棺の構造とその樹脂硬化 木棺の概要やその損傷状況についてはすでに報告(1978年度奈文研年報)したとおりである。その自然科学的処理の詳細と木棺断面の顕微鏡的な観察結果を報告する。同木棺は杉材でつくられており、その上に麻布を張りさらに粗い下地層を設け漆膜が3~7回繰り返して塗られている(顕微鏡写真参照)。底板の外側では3~4回、内側では6~7回塗り重ねられており、概して内側の方が漆塗りの回数が多いという傾向が認められた。漆膜層の厚味はおよそ0.1~0.4mmである。古墳の中では、木棺はいわば水漬けに近い状態にあったために木質部はすでに腐朽し全体にもろくなってしまっている。これを自然乾燥させると下地が激しい収縮を起し、表面の漆膜は下地と分離して崩れてしまう。

保存処理の第一段階は、木棺が変形したり漆膜が下地層から剥離しないように脱水・乾燥し同時に木棺全体を強化することである。残留木棺は杉材の内外面に塗られていた漆層の部分が60×80cm大のもの8点、40×60cm大のものが5点の板状の破片になっていた。これらはステンレスのパンチングプレートに挟み、アルコール水溶液に浸し脱水した。アルコール濃度は10%ぐらいから始めて徐々に高めていき、木棺中の水分をアルコールと完全に置換する。さらにアルコールをキシレンと置き換える。はじめはキシレン・アルコール溶液に浸し、キシレンの濃度を10%ぐらいから100%にまで高めた。木棺に含まれている水分がすべてキシレンと置き変わったら、さらにアクリル系合成樹脂(商品名:Paraloid B72)の3%キシレン溶液をしみこませる。樹脂溶液の濃度は3%から8%にまで高めた。復元の際の接着剤や本体の補強強化の材料にはできる限り同材質の漆を利用する原則にしているため、この段階では合成樹脂による完全硬化をおこなわない。乾燥の過程で木棺に損傷を与えない程度に補強できれば十分なので高濃度のアクリル樹脂を使わなかった。樹脂溶液の含浸後これを真空乾燥した。乾燥時の

高松塚古墳漆塗木棺の断面図(×26)

条件は室温下で100mmHg程度である。

(2) 平吉遺跡出土木棺の取り上げと保存処理

木棺の残留状態はきわめて悪く、側板の3分の1ぐらいと底板部分が残存しているにすぎない。底板はすでに腐蝕しており当初の厚味を留めていない。うす板が土壌に張り付いているような状態である。これを室内に搬入して保存することになった。すなわち、木棺の痕跡を残す土塊を切り取って保存する要領である。取り上げには発泡性の硬質ウレタンを利用した。長さ200×幅60×高さ50cmにも及ぶ大型のしかも比重の大きい土塊を取り上げる場合には梱包材料はできるだけ軽量のものを利用するよい。木棺はその形状に沿って切り出し、全体にウレタン原液の現場発泡をおこない、ウレタンフォームで梱包した。搬出後、木棺の底部分を強化プラスチックス（ガラス繊維をエポキシ樹脂で張り付け、積層したもの）で裏打ちしたあと、表面部分は布で全体を締めつけるようにしてくるみ、高分子のポリエチレングリコールの溶液に浸してしみこませた。分子量が4,000～6,000ぐらいのそれはローソクのロウよりもやや硬い状態にあり、水分を含んだ土壌を硬化するのに有効であった。土壌の場合、合成樹脂による固化が効果的な方法として知られているが、あらかじめ有機溶剤と土壌中の水分とを完全に置き換えなければならない。大型の遺物ほど大量の溶剤を取り扱うことになり、危険がともなう。今回のように水分を含んだ大型の木材や土壌の硬化のために水に可溶な高分子物質のポリエチレングリコールを応用したのは合理的で新しい保存法として注目できる。

1. 出土時の状況、2・3. アクリル系合成樹脂による強化とウレタンフォームによる梱包、4. 取り上げ後、PEGで硬化して仕上げる。

遺構保存の材料と工法に関する研究

遺構の保存材料を決定するとき、遺構の材質を次の三つに分けて考慮するとよい。第一に土質遺構の保存処理であり、第二は岩石質遺構の場合である。第三には漆や木材などの複合材料から構成される遺構である。第三の場合については遺構構成材料の材質やその環境条件に合わ

せてその都度保存材料とその工法を検討すべきであり、本研究では第一、第二のケースについて実験をおこなったので報告する。

第一の場合の造構の保存には二つの工法が考えられる。土壤をコンクリートのように完全に硬化してしまう方法と、元来の土壤の持つ吸脱湿性などの物性を保持させたままの硬化法である。前者に関しては過去に数件の実施例があるが満足すべき結果は殆んど得られていない。本研究は後者の土壤本来の性質を維持する硬化法について追究したものである。硬化実験をおこなうための土壤試験体の作成に先立ち、実際のフィールドにおける土壤の空隙率 (air void) が平均20~30%であることを確認した。そして、実験には空隙率30%の試験体を作成し、これを適度に硬化させる保存材料としてエポキシ系、アクリル系、イソシアネート系などの各種合成樹脂をリストアップした。硬化による保存効果や施工時における取り扱い易さの程度、および硬化後の造構表面の感覚的色調などを中心にその優劣を検討した。含浸させる樹脂溶液の濃度を20%から38~50%の高濃度に変化させた場合、硬化後の強度は増大するが、その強度の増大量はイソシアネート系合成樹脂の場合に最大となり、保存材料としては最も効果的であった。

岩石質造構の保存工法の実験には古代遺跡から出土したすでに風化している凝灰岩を試料に供した。このような凝灰岩試料の保存材料には有機ケイ素化合物のエチルシリケート系のバイオングータイプが有効であるとの結果を得た。薬液の含浸方法に関しては吸水率が30%前後の風化した凝灰岩（新鮮なものでは10~25%といわれる）の場合、減圧方式による含浸をおこなわなくても常圧下で浸漬するだけで所定の薬液量を含浸できることがわかった（図右参照）。また硬化後の試料は無処理のものにくらべて4~5倍の強度が得られ、そのときの吸水量も5分の1から8分の1に減少し、耐水性が増す。水浸一凍結一融氷の繰り返しによる劣化促進テストでも無処理の場合には表面がショーキング現象（ショークの粉のように石の表面が剥落していく現象）を呈するのに対して、保存処理された岩石試料には殆んど変化がなかった。なお、この実験は昭和53年度文部省科学研究費・特定研究「古文化財」の交付を受けた。（沢田 正昭・秋山 隆保）

ひづみ

樹脂濃度のちがいによる強度

薬液含浸時間

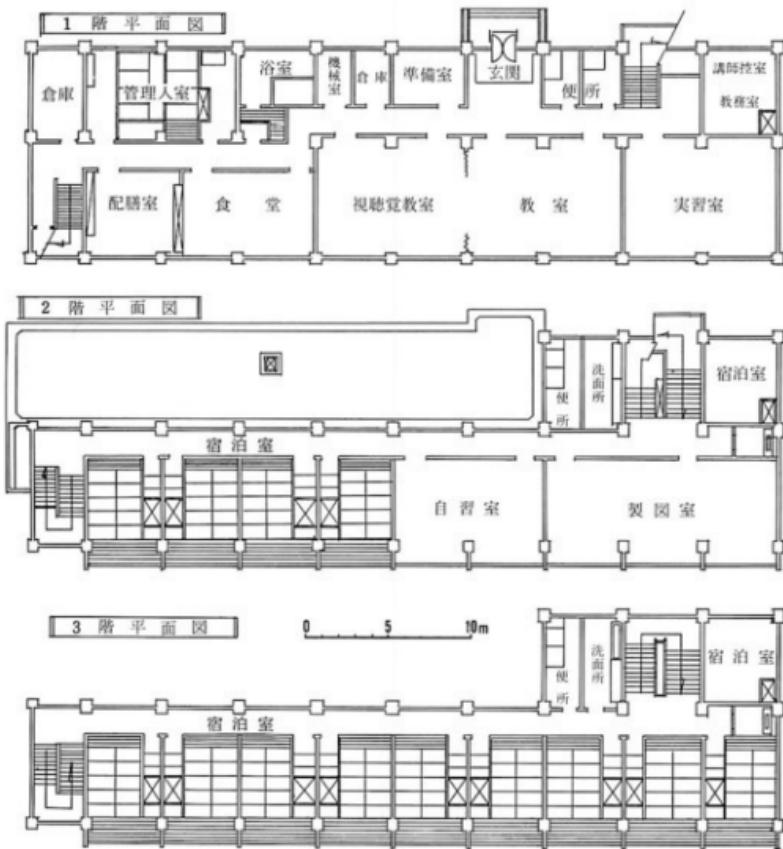
含浸時間と含浸量

埋蔵文化財センターの新研修棟

埋蔵文化財センター

当センターの主要業務である研修は、昭和49年以来研修施設（平城宮跡内）と宿泊施設（法華寺町）の分離を余儀なくされてきた。幸い宮跡西側に隣接する奈良医科大学附属病院の移転跡地と建物を活用する本研究所の統合移転が可能になったため、53・54年度で旧看護婦寮を新研修棟兼宿泊施設として改修することができた。この建物は冷暖房設備を備え、特に視聴覚教室はスクリーン・テレビ・音響の各装置が相当に機能する総合システムをもち、今後の研修に大いに活用されることが期待される。下に完成後の各階平面図を示す。

（織井 弘一）



平城遺跡博物館構想について

平城宮跡を遺跡博物館 (Site Museum) として整備活用するという方針が昭和43年度に文化庁が出してから既に10年を経た。その間文化庁と共に当研究所も構想確立と事業実施のために努力を重ね、昨年度その基本構想を固めることができた。しかも昭和55年度からの事業着手を強く要望している段階であり、またこの構想についてはなお考察を進め、研究所の将来を見極める必要があると考えるので、今までの経緯を主として、ここでまとめておきたい。

構想策定の経緯 平城宮跡全体の整備計画については、古くは昭和39年に故森一雄氏（当時奈良市都市計画課嘱託）、40年に西山卯三氏等「奈良計画グループ」、41年に奈良県、42年に当研究所、43年には奈良女子大・当研究所などから提案もしくは資料提出があった。しかし文化庁自体が正式に取り組んだのは昭和43年5月である。この時「平城宮跡保存整備準備委員会」が発足し、45年10月までに3回開催された。この委員会が結成された契機としては、①昭和38年度以来の宮跡指定地の国有化第1次計画（東院地区を除くほぼ全城）が終了したこと、②東院地区保存の方向が定まったこと、③収蔵庫・展示棟（現平城宮跡資料館と第1、第2収蔵庫）の予算が決り、これをオーソライズする必要があったことなどであった。この結果、覆屋建設、収蔵庫・資料館建設（平城宮跡発掘調査部パラック生活の解消）などが実施されたが、その間に全体構想については次のような方針がまとめた。

- (1) 平城宮跡は遺跡博物館として整備活用を図ること。
- (2) 宮跡全体をいくつかの地区に分けて、地区ごとに整備計画をたてる必要があること。
- (3) 将来、建物、築地、庭園等についてある程度の復原を行うこと。
- (4) 管理施設、展示施設、便益施設等を適切に設置すること。
- (5) 宮内を通過する道路、軌道の取扱い、宮跡と関係の深い旧朱雀大路、羅城門跡の保存についても検討すること。

この後5年程、飛鳥・藤原地域の保存問題などのために中断したが、東院地区の国有化計画（奈良県による先行取得）予算が決定したことを契機に、昭和49年3月に新たに「平城宮跡保存整備委員会」が発足した。同年10月の第3回委員会で次のような基本的方向が了承された。

- (1) 平城宮跡は、発掘調査を行いつつ遺跡博物館として整備するものとする。
- (2) 平城宮跡整備のための地区々分とその整備内容は次のとおりとすること。
 - (a) 第一次内裏・朝堂院西方地区 全体として緑地化を図るとともに管理施設、展示施設等をこの地区内に設置する。
 - (b) 第一次内裏・朝堂院地区 建物復原を含めた遺跡の復原的整備を図る。
 - (c) 第二次内裏・朝堂院地区 従来の基壇修景及び造構展示方式等により遺跡の復原的整備を推進する。
 - (d) 第二次内裏・朝堂院東方地区 庭園の復原等主として遺跡の復原的整備を行う。

(3)宮内道路の整備、宮城南面築地の復原の整備、水系整備等及び利用者のための各種管理施設、便益施設の整備を行うこと。

この間、より具体的に計画を進めるにはワーキング・グループが必要であるとされ、当研究所では従前の調査指導委員会に整備問題を加え「平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会」を昭和49年4月に発足させた。また同年9月には「平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会」を発足させ、52年3月までに略式を含め7回の会議を開いた。一方文化庁は遺跡博物館の具体案を作成するため、50年度から作業の実施を当研究所に依頼してきており、その第1弾としてまとめたのが「平城遺跡博物館基本構想資料」(52年3月。文化庁)である。

基本構想案の概要 先述の「構想資料」をもとに文化庁は昭和53年5月に「平城宮跡保存整備調査研究会」(「—保存整備委員会」と同一)を開き、「特別史跡平城宮跡基本構想案」を発表した。「構想資料」の骨子を行政的にまとめてはいるが内容は同一である。以下とり混ぜて概要を述べる。

(基本方針) 宮跡を広く一般に公開できるように整備管理することを目的とするが、あくまで遺跡の保存が第一義であり、かつ①発掘調査とその関連研究、②発掘・研究成果の公開・展示、③遺跡の保全・整備等の技術開発、の3つの機能を調和させつつ計画を進めるものとする。その上で、①発掘完了区域、②当面発掘区域(事業開始から約10年間の予定)、③将来発掘区域という区分を考え、整備パターン④管理・研究・収蔵施設地区⑤建物等復原展示地区(建物その他の工作物の復原により平城宮の規模・構成等を表示する)⑥造構展示地区(覆屋方式などで造構そのものを展示)⑦造構配置表示地区(④⑤以外の造園的手法などにより造構の配置・規模を地表に表示)⑧池沼・湿原地区(水系整備、地下造構・遺物の保護、修景のため)⑨緑地・草園地区(主に未発掘地区で、多目的利用空間とする)⑩外周緑陰帯(宮跡を周囲の都市的活動から保護するため)⑪南面地区(二条大路、朱雀大路北端を含む地区)を組み合せている。それらの基本的な配置は(口絵にその写しをあげた)図面のとおりとしている。

(段階的整備計画) 計画が長期にわたるために第1期整備を約10年とし、それを第1次、第2次の5年ずつに分けている。第2期は第1期の進行をみてから検討するとしている。以下現段階の実施計画とも合せて説明すると、第1次整備段階以前の基礎的準備段階というのは、追加指定や国有化の推進、第2次内裏・朝堂院地区の整備完了、宮跡隣接地への研究・収蔵等管理施設の建設、便益施設の整備、多目的利用園地の整備、汚水・雨水の流入・流出対策という内容である。これらは一部を除いて今年度中にはほぼ終了する予定である。55年度から始まろうとする第1次整備段階の5ヶ年には、南面地区の整備、外周緑陰帯、管理施設、池沼・湿原の整備、東院庭園の復原、覆屋周辺地区的整備充実、朱雀門復原の発足などが、当面急ぐべき事項としてあげられている。第2次以降は構想資料では項目をあげているが、実施計画との組み合せはまだである。予算的なことを別としても、建物復原の技術的問題、管理組織の確立、研究所機能との調整など解決すべき問題が山積しているといえよう。

(安原 啓示)

三手先構造の変遷

建造物研究室

三手先斗拱は8世紀において、薬師寺東塔・海童王寺五重小塔にみられるような二手目の斗拱が支輪桁を受けない構成から、唐招提寺金堂にみられるような支輪桁の出現へと変化することは、すでに知られるところであるが、この間にあっては尾垂木の側通りでの支持は、最上段の通肘木に組込んで架けられている。一方、当麻寺東塔、西塔では尾垂木は側通りでフリーになり、支持位置は前方へ一手移動する。元興寺五重小塔でもこの傾向がみられ、三手先構造は8世紀末より大きな変化を生じている。この変化は尾垂木勾配が強められる結果をもたらしており、やがて地垂木の勾配に影響するため、三手目の位置を内方に移動し丸桁の高さを高めるようになる。醍醐寺五重塔の三手目の尾垂木上の斗が一週り大きくつくられるのは、このような過程の中で理解される。三手目の移動は支輪の立上りを強めることになり、意匠的には軒蛇腹が視覚上重要な構成材になり、垂木割との調和がはかられるようになる。したがって、古くは丸桁間を縦割りとした垂木割が柱真を手挟むように変化する。

斗拱積上げの新形式として注目されるのは平等院鳳凰堂中堂の三手先斗拱である。この堂では入側柱がないため、妻中央柱上の斗拱が桁行には独立し天秤による均衡をはかっており、尾垂木の支持として内側二手目に束をたてて釣合をとっている。宋様式にみられるような上昂による処理が考慮されていないのは和様の発展形式を示すものといえようが、あるいは宋様式の間接的伝播がこのところからはじまつたのであろうか。ところで鳳凰堂では壁付の三斗組は2段に組上げられるのに対して一乗寺三重塔では三斗組は下1段だけをみせかけとし通肘木で連結している。この塔では壁付斗拱を一体化して構造強化を求めているが、一方では四天柱を側柱より高め肘木で繋ぐなどの新しい試みが行われている。いわゆる中世和様三手先の前駆的手法が認められ、変遷過程上、この塔は重要な位置を占める。丸桁と実肘木の一木化はすでに醍醐寺五重塔はじめられているが、この塔では最上層が通実肘木となり、この点でも中世的である。塔内では醍醐寺のような斗の簡略化からさらに進み、斗の省略に至っている。

三手先構造は以上のような古代を通じて変遷をうけ中世にさらに変化する。その第一歩は内部斗拱の省略化と斗・肘木の一木化であり、斗拱としての形を残しながら、内部では通肘木ないしは力肘木が、貫あるいは梁としての部材に変貌する。そしてまた、構造の強化のために、三手先目を側あるいは内部から見え隠れの盤材をいれて緊結するようになる。一方、門などにいたっては梁間が狭いことともあって、尾垂木どうしの尻を連結するなどの工法が考えられている。中世には禅宗様式がわが國にもたらされることもあって、三手先構造がより以上多様化する。これらの中にあって、石山寺東大門や御上神社楼門などの尾垂木のない三手先構造の出現、海住山寺五重塔・宝生寺灌頂堂などのような尾垂木をもつ二手先など、三手先構造の変形がみられるのは興味深い。なお、本研究は科学研修費補助金によるものである。（工藤 圭章）

平城京貴族住宅の復原模型

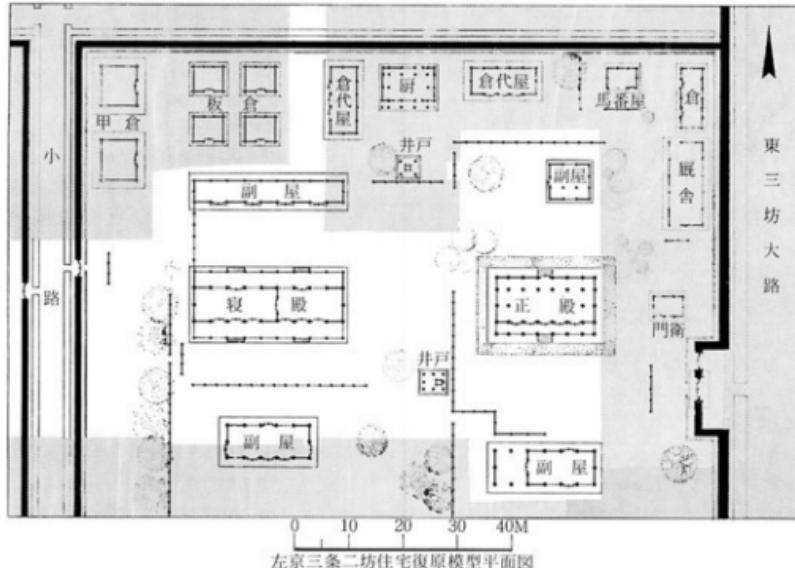
平城宮跡発掘調査部

当研究所は1973年と74年の両年度、現奈良市序合敷にあたる平城京左京三条二坊十坪と十五坪において発掘調査を行った。その結果、奈良時代十五坪に方一町を占有する大規模な邸宅が営まれていたことを明らかにした。検出した建物群や廻、井戸はその中心部をなすものと考えられ、平城京の宅地の使用状況を知るうえできわめて貴重な発見となった。本模型は、この発掘結果をもとに、十五坪の宅地北半分およそ6割を縮尺 $1/100$ で復原したものである。模型の大きさは $1.5m \times 1.0m$ で主材料は十分乾燥した桧を用い、設計と製作におよそ7カ月を要した。

以下に復原の概要を述べよう。まず調査の所見からこの邸宅の居住者を三位程度の高官に想定した。建物等の配置は奈良時代初頭のものをとり、宅地中心部は発掘調査の成果に従つたが、発掘区外となる坪の周辺部には倉庫、厨、厩舎等の雜舎を想定して配置した。植栽についてはよるべき資料がないが、模型の雰囲気を盛りあげるために、適宜樹木、灌木を配置した。建物の構造はすべて掘立柱とし、住宅であることを考慮して複雑な組物を用いない簡素なものとした。屋根葺材は出土瓦で奈良時代初頭にさかのぼる型式のものが僅少なため、すべて桧皮葺・板葺で処理したが、ただ東三坊大路に面する築地だけは坊を画する大垣なので瓦葺とした。

製作にあたって、建物の表現性を高めるため屋根の表現には特に意を用い、また見えがかり部分についても同時代の造構を参考に精密な工作を施した。

(中村 雅治)



左京三条二坊住宅復原模型平面図

在外研修報告

1978年8月19日より2ヶ月間にわたり、文部省の在外研修で西ドイツを中心にヨーロッパ7ヶ国を訪問することができた。研修題目は「北欧における青銅器文化の比較研究」という内容で多くの博物館等を訪れる機会をもった。

森と湖が続く美しい光景を機上から眺めながら最初の訪問地ストックホルムに到着した。歴史博物館では常設展示にくわえて、バイキング展が開かれており、ヘッドフォンによる日本語での解説まで用意してあるのに驚いた。常設展示ではかねて坪井所長からそのディスプレイの良さを聞き、写真も見せてもらっていたが、実見してそのすばらしさに改めて感心した。

西独では30日余滞在した。今回の最初の公式訪問地であるベルリンの考古学研究所へ行くまでの数日は、ハノーファーを基地にして北ドイツの多くの博物館を回り、沢山の青銅器はかに接した。Dr. W. チンマーマンに、2日間にわたって若い女性3人とともにエルベ河口に近いフルゴン地域の遺跡案内もしてもらった。紀元後1～5世紀の集落の発掘現場や、メガリスの見学、そしてまた夜遅くまでスライドで遺跡解説をしてもらい、皆で発掘小屋(レンガ作りの農家)で泊った経験は、その後のドイツでの遺跡見学のイントロとしても大変勉強になった。

ドイツ考古学研究所ベルリン本部では、そこから歩いて約5分、一戸建ちで美しい花の咲いた広い庭のあるゲストハウスで5泊お世話になった。カイロからの研究生も1人泊っていた。研究所は午前8時30分始まりで、その頃にはもう掃除もできていた。皆出勤していたようだ。(金曜日午後から日曜日まで休み、フランクフルトも同じ)書庫はガラス張りの明るい建物で、窓際にいくつもの机が並べてあり、学生や主婦風の数人が本を読んでいた。日本の本は10冊にも満たない。ダーレムにある国立博物館には2日通った。民族部門を案内して下さったDr.ティーレは、その春奈良博の展覧会へ仏像をもってこられた方で、「はり新」の宿をなつかしんでおられた。東ベルリンのベルガモン博物館の陳列の荘大さにはアッと驚かされた。その夕5時に博物館を出て駅へ向う途中、オペラ劇場の前を通り当夜のプログラムを見たところが、ドン・ジヨバンニが7時から始まるではないか! 期せずして本場のオペラを味うことが出来た。

フランクフルトの研究所ではDr. F. シューベルトに奈文研以来再会することができた。ここでも研究所内にあるゲストハウスを利用させてもらった。研究所では表玄関と書庫の鍵をいただき、時間外でも入れるよう配慮してくださったことは思いもよらないことだった。夜中でも本を見に行けますよ! と。ここに拠点をおき、ケルン、ボン、マインツ等の遺跡や博物館を見て回った。ライン下りは、バン・ベートーベン号の車窓よりその船を見ることが出来た。朝6時、すべての荷物をかかえ列車でミュンヘンへ向った。途中、インゴルシュタットで下車し、シューベルトさんと落ち合ってマンテンのオッピダムを案内してもらった。ミュンヘンの研究所は金石文研究を主としており人数も少ない。ビルの3・4階を占めている。またもや4階にあるゲストハウスに宿泊した。シューベルトさんにはお礼の申しようもない。(工業普通)

公開講演会要旨

大官大寺について 大官大寺の伽藍配置については、従来、塔と金堂を東西に対置する形式をとるという見解が有力であったが、発掘の結果金堂推定地には建物を造営した形跡がなく、造営年代の問題をも含めて従来の想定を再検討する必要に迫られた。そこで、『扶桑略記』に示す大官大寺焼亡の時点（和銅四年）では中門・回廊が未完成であった事実や、出土遺物の年代観などから「大官大寺」の造営年代を全体として文武朝まで下げ、これまで講堂と見做されていた造構を『大安寺伽藍縁起』にみられる文武朝造営の金堂に比定した。そして、この文武朝大官大寺は高市大寺とは別に、条坊制に則った「新益京」の官寺として新たに造営されたものと推論した。高市大寺の究明は今後の課題である。

（甲斐忠彦）

近年の民家調査 民家調査は近年各地で行われ、県単位の調査報告書も多数刊行されるにいたって、全国的な視野のもとにこれを総合する段階にきている。それには民家形式の地方性を一度消去して全国共通の指標を設定することも一つの方法で、民家の発展を規模の拡大の面でとらえ、そのパターンを分棟、桁行拡大、梁行拡大の3種にわけ、各パターンと地域との関係を概観した。

（吉田 端）

平城宮朝堂の諸問題 平城宮跡の大極殿・朝堂の比定地区として、宮中央の朱雀門中軸線上の中央区とその東の中生門中軸線上の東区が考えられているが、この二地区をめぐって、最近の発掘成果と文献史料から大極殿・朝堂の変遷を考えた。和銅創建時の大極殿・朝堂は中央区に造られた。これは、唐の宮殿建築の影響下に造られた特異な構造のものである。養老8年から天平初年まで藤原武智麻呂によって宮内改作が行なわれ（家伝下）、東区に大極殿・朝堂が整備される。これは、藤原不比等・元明太上天皇の死を契機として、聖武天皇の即位をめざして造られたものである。東区へ大極殿・朝堂が遷った後、中央区は中宮・朝堂となる。中宮・朝堂は国家的な饗宴の場としての性格をもち、平安宮殿樂院の先駆となる。

（今泉隆雄）

古代国府の構造について 国府は律令国家の地方行政府として設置された。この国府の中核をなす国府はいかなる構造をもち、また律令体制の動向といかにかかわりあっていったかを明らかにするため、多賀城内城（陸奥国府）・城輪柵内郭（出羽国府）・三大寺遺跡（近江国府）・伯耆国府の殿舎配置形態とその変遷を検討した。国府殿舎配置の基本的なパターンは中央正面に正殿をおき、前面広場をはさんで左右に脇殿を配置し、これを屏でとりかこんでいるが、この中でも正殿の両脇に長大な脇殿を配置している例と正殿の前方に小規模な脇殿を配置している例がある。この国府の殿舎は平安時代初頭を前後する時期に、改作、増築され、またより整備された。一方では新たに国府が建立された。律令体制が動搖・崩壊しあじめる時期に郡衙の衰退とは逆に、国府の殿舎が整備されたことは国府を中心としたより実質的な政治が行なわれたことのあらわれであると推定した。

（菅原正明）

調査研究彙報

共同研究

高松塚古墳出土漆塗木棺の修理 美術工芸研究室と平城宮跡発掘調査部との共同調査。昨年度から行なわれている木棺の修理は、本年度は平城宮跡発掘調査部で水抜き処理が行なわれ、引き継いで財團法人美術院に移され、復元的修理が施工された。

美術工芸研究室

日本美術院彫刻等修理記録の刊行（特別研究） 本年度は同書のVとして、奈良県下の主に郡部の彫刻等49件に加え、修理記録が完備していない分（主に明治30年代の修理）47件をとり上げて整理、研究を行ない、図解186頁、解説125頁、写真115頁にわたる記録を公刊した。なお奈良県分は本巻（全5巻）をもって完結した。

臼杵磨崖仏の復元的研究（科学研究） 昨年度に作製した同磨崖仏古圖、山王山の二群の実測図をもとにして調査を行ない、現状の損傷状況を確認し、復原可能な箇所、欠損箇所など5段階に分けて図示する作業を行なった。（星山・田中義典・木全・伊東）

岐阜県下の彫刻等の調査 県教育委員会の依頼により、県下関市、春日村その他の調査を4回にわたり行なった。ことに本調査では今まで知られていなかった平安時代から鎌倉時代の木彫像8軸が確認された。この他、奈良県および周辺地区の調査として奈良市隔夜寺、舞鶴市多称寺などの彫刻等の調査を行なった。

薬師寺西塔跡出土塑像断片の調査 昨年度に平城宮跡発掘調査部によって発掘された西塔塑像群の断片約2,000点の整理調査を行ない60%を完了、54年度も引き継いで行なう予定である。

「日本木彫展」随員として 国際文化交流基金とヨーロッパの3都市（ケルン、チューリッヒ、ブラッセル）主催の同展の随員として53年12月12日から54年3月31日まで出張した。ケルンとチューリッヒで陳列準備と展示中の説明に従事した。（田中義典）

建造物研究室

桂離宮建築調査 桂離宮古書院・中書院の解体修理に伴なう調査で、後世の修理による変更箇所および当初の建築技法等について、昨年度以来宮内庁に協力してその解明にあたった。また各種部材の材種についても検討を加えた。（工藤・光谷）

旧犬養家住宅調査 岡山県が実施した解体修理に伴なう調査で、建築当初形式への復原調査や修理による変更箇所の調査を行なうとともに、解体修復工事について工事中逐次指導を行なった。なお旧犬養家住宅の修理工事は工期終了し、昭和54年6月1日竣工をみた。（工藤）

文化財建造物修理用資材需給等実態調査 文化庁が行なっている調査で、本年度は鉱物性材料について行なわれ、当研究所は愛媛、岡山、奈良3県の粘土瓦の生産関係の調査を行なった。愛媛は一般的粘土瓦については有数の生産県であり、岡山は近年生産県より消費県に変わった。奈良は一般粘土瓦についての生産量は少ないが、質がよく文化財関係の瓦の全国シェアは一位で

ある。(吉田瑞)

第一回集落町並保存対策研究集会 1979年1月29・30の両日、平城宮跡発掘調査部会議室において開催された。この集会は、集落町並保存問題に関する行政担当者や学識経験者が、相互に情報の交換を行ない、それぞれの地区に適合する保存施策の策定について研究協議することを目的とする。今後3回にわたり開催する予定で、本年度はその第一回目にあたる。

今回は町並調査が行われた市町村の担当者と調査者を中心に約90名が参加した。第一日目は文化庁から国の施策についての経過と現状について、また重要伝統的建造物保存地区の選定を受けた鶴川村、白川村、京都市、萩市から保存事業の現状と問題点について報告がなされた。第二日目は、「町家と町並について」と題する白木氏の基調講演の後、質疑討論に入り財政・税制・組織といった行政的問題や保存の方法論やデザインの問題について活発な意見が述べられた。討論内容は多岐にわたりており、個別事項について一層研究協議することが望まれた。

歴史研究室

東大寺文書調査 文化庁の委嘱によるもので1974年度からの継続調査。未成巻文書第3部第10(請取狀)709号より、第3部第12(雜)441号までの調書作製を終えた。また写真撮影は第1部第25(雜)250号より、第3部第4(請文)までを完了した。また『東大寺文書目録』第1巻(第1部第1伊賀国黒田庄～第23大和國清澄庄)を刊行した。今後各年度1冊ずつ刊行の予定である。

興福寺典籍古文書調査 従来よりの調査の継続。5月、10月。第16・35・43・44・48～52函の調査を完了した。第35函には鎌倉時代の紙背文書があり、また第53函(調査未了)の『八省店名』は令制・店名官職の音読み法を知る上での好資料である。

西大寺典籍古文書調査 従来よりの調査の継続。2月。第39・40・41・45・46・50・63函の調査を完了した。江戸時代書写の聖教類が大部分を占めるが、一部に鎌倉～室町時代の書写にかかるものも発見された。

仁和寺典籍古文書調査 1958年度以来の継続調査。3月。塔中蔵附下書籍類第196・197・198・201・202・204・205函の調査を完了した。また御経蔵第150函収納の仁和寺文書の調書作製(未了)ならびに『古筆手鑑』を調査した。

その他の調査 東寺觀智院聖教調査(協力)、5月、9月。高山寺(協力)、7月。醍醐寺、8月。当麻寺奥院、8月。石山寺(協力)、8月、12月。陽明文庫、12月。東京大学史料編纂所(島津家文書)、1月。

中華人民共和国研修旅行 「日本『中国歴史・文物』研究者友好訪中国」の一員として10月6日から20日まで研修旅行を行なった。北京～西安～洛陽～鄭州～上海のコースで巡り、西安碑林をはじめ、各地で貴重な遺物、遺跡にふれることができた。(田中忠・狩野)

平城宮跡発掘調査部

各地遺跡出土遺物の保存処理 次の木製品・金属製品の調査研究を行なった。大阪府東奈良遺跡の丸木弓、佐賀県千塔山遺跡の青銅製鉗先、石川県寺家遺跡の金属製品一括。寺家遺跡は律

令祭祀の遺跡としては沖ノ島・大飛島・神島に次ぐ発見である。(考古第一調査室)

伯耆国分寺の調査 環境整備に伴ない南門の発掘調査を行なった。南面の築地塀と外濠の一部を検出したが南門の検出にはいたらなかった。8月～9月。倉吉市教育委員会。(佐藤・金子・中村重治・巽)

伯耆国庁の調査(第6次) 内郭政庁城では3間×2間の南門と築地塀を検出し内郭の規模明らかにした。西外郭では西方官衙と呼ぶ溝で区画した建物群を検出。国庁は8世紀後半から10世紀初頭まで存続し、全体で4時期の造替を認めた。詳細は「伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)」参照。8月～10月。倉吉市教育委員会。(佐藤・金子・中村重治・巽)

法隆寺所蔵瓦の調査 今年度は、大正14年の防災工事で発見された瓦を中心とした第2次調査と、寺所蔵瓦全型式の代表例を中心とした第3次調査を行なった。なお、法隆寺秋季特別展覧「法隆寺古瓦展」の展示および図録作成に協力した。(考古第三調査室)

美濃国分寺環境整備 大垣市の依頼により、今年度は周辺築地・僧房復原工事・池造成工事の実施計画と指導を行なった。(安原・田中哲雄) 1978年4月～1979年3月

紀伊国分寺環境整備 和歌山県の依頼により、紀伊国分寺環境整備基本計画の作成を行なった。(田中哲雄・加藤允彦) 1978年4月

三ツ塚廬寺環境整備 市島町の依頼により三ツ塚廬寺整備の基本計画・実施設計の指導を行なった。(安原・田中哲雄) 1978年10月

伯耆国分寺跡環境整備 倉吉市の依頼により、発掘調査で明らかになった講堂・金堂整備工事の指導を行なった。(田中哲雄) 1978年9月

熊野古道環境整備 今年度より始まった歴史の道整備事業の一環で、中辺路町・熊野町の依頼により基本設計・実施設計の指導を行なった。(田中哲雄・渡辺・光谷・本中) 1978年10月

江馬氏庭園遺跡調査 神岡町の依頼により江馬氏の館跡・庭園跡の発掘調査の指導を行なった。(安原・田中哲雄・加藤允彦) 1978年7月～1979年3月

文化財の保存に関する国際会議参加報告 1978年、9月から10月にかけて文化財の保存に関する二つの国際会議が開かれた。オックスフォードでの国際歴史美術資料保存研究会・第七回世界大会(The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works-IIC)と、ザグレブ(ユーゴスラビア)で開催された国際博物館会議・第五回保存委員会(The International Council of Museums for Conservation-ICOM)である。前者では絵画・工芸品における木材の、後者では出土木材、金属器、石造品などに関する保存法の研究発表および討議がおこなわれた。沢田は漆塗木製品のアルコール・エーテル法による保存法のリポートを提出し、平城宮跡出土の木簡の保存法について発表した。(沢田)

文化財の保存修復に関する国際シンポジウム(第2回大会) 東京国立文化財研究所が主催する同研究会は第1回のテーマ「木材の保存」に次いで、「文化財と分析化学」をテーマに1978年11月27日から29日の3日間おこなわれた。カナダ、西ドイツ、アメリカ、フランス、韓国からの

調査研究彙報

6人に加えて10人の日本人研究者が発表した。席上「青銅製品の非破壊分析」と題して、皇朝十二鏡と青銅鏡の螢光X線分析について報告した。(沢田)

中華人民共和国研修旅行 「関西文部省保護青年職員友好訪中団」の団長として7月5日から21日まで、北京—安陽—洛陽—西安—広州のコースで遺跡視察旅行を行なった。中国国家文物局の関係者との交流も含め、忙しいながら貴重な体験を得た。(町田)

中華人民共和国研修旅行 「京都造園関係者友好訪中団」に参加した。11月2~12日。広州—上海—南京—蘇州—広州と巡り、特に蘇州では滄浪亭他多くの庭園を見学できた。なお渡辺康史も休暇を利用してこれに参加し、共に貴重な経験を得た。(田中哲雄・光谷)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

紀寺跡の合同調査 横原考古学研究所と合同で9月18日から11月24日まで実施した。寺城南限を画する掘立柱列と藤原京八条大路北側溝を検出した。

山田寺の礎石調べ 山田寺の発掘に関連して、地元古老の話をもとに、7月4日大阪の藤田美術館敷地で礎石調べを行なった。その結果、山田寺のものと思える塔四天柱石1個、金堂礎石6個を確認した。現在山田寺金堂跡には2個があり、残り4個の確認が今後の課題である。

飛鳥資料館

模造製作 本年度は、高松塚古墳出土の大刀飾金具、同海獸葡萄鏡、同棺飾金具、城陽市久世庵寺出土の銅造誕生仏、岡寺の銅造菩薩半跏像、千葉龍角寺の仏頭の模造製作を行なった。

埋蔵文化財センター

研究集会「広域火山灰と考古学」 54年3月20日。研究所外から20名、所内から15名の参加者をえて、平城宮跡資料館会議室で開催した。都立大町田洋氏(広域火山灰研究の現状と問題点)、群馬大新井房夫氏(広域火山灰の同定とその問題点)、北海道教委森田忠氏(新千歳空港の調査から)、東京都教委小田静夫氏(武藏野・相模野・下締台地の先史文化遺跡の場合)、鹿児島県教委新東晃一氏(九州縦貫道の発掘調査から)、神戸教育研前田保夫氏(神戸市のアカホヤ火山灰層と大阪湾の姶良火山灰層について)、秋田県教委富樫泰時氏、岩手県教委浦川司男氏(歴史時代の十和田火山灰層について)、群馬県教委登健氏(群馬県下における火山灰層について)の諸氏の報告をもとに、火山灰研究の必要性が充分認識された。

環境整備担当者会議 54年3月19日・20日。51年度福井県開催以来4回目のこの会議は、今回は当研究所の主催で、埋蔵文化財センター研修棟で行なった。所外からは文化庁、福井県、宮城県、広島県、福岡県の常任担当者の他、近畿地建飛鳥国営公園出張所、奈良、京都、大阪、三重、滋賀、兵庫、岡山の各府県担当者等の参加も得て、活発な意見交換が行なわれた。主な問題点は、整備内容と周辺住民生活との調整、整備前と後の管理問題などであった。

周防国御跡の調査 国衙2町方域の環境整備工事に先立って、国衙四至の確認調査をおこなった。調査は西北隅・東北隅・東門推定地および西南隅の順に、8月から9月まで実施した。前回(昭和36~39年)のトレンチ調査では2町方域を築地土段が埋んでいたとの判断が下された。

今回は前回のトレンチを含めて面的に発掘したが、上の判断は積極的には支持し難いという結果を得た。(山本・毛利光・川越)

下野国府跡発掘調査 下野国府跡推定地の一つ大房地区の調査。7間×5間の孫廂付建物、5間以上×4間の二面廂付建物など10世紀頃の建物群を検出した。国衙の官衙建物の一部である可能性も強い。栃木県教育委員会。10月。(山中)

上原遺跡発掘調査 は場整備事業に先立って遺跡の性格の解明と範囲確認を目的とした調査。二面廂付建物など大規模な掘立柱建物群を検出。瓦も少量出土し、地方官衙または寺院造構である可能性が強い。鳥取県氣高町教育委員会。11月。(山中)

美作國分寺跡の調査 岡山県津山市。11月28日から12月12日の間、発掘調査の指導を行なった。調査の結果、金堂の造構は検出できたが塔跡は確認し得なかった。調査は昭和54年度も続けられる予定であり、全容の解明と保存の確立が待たれる。(岩本正二)

福本遺跡の磁気探査 繩文時代から奈良時代にまでわたる遺跡の範囲確認とその性格を知る調査。磁気探査は灰層のみが知られる瓦窯の窯体確認、及び周辺に窯体が存在するかどうかを調査し合計三基の平窯を確認した。兵庫県神崎町教育委員会。3月。(西村・岩本正二)

南多摩窯跡群の磁気探査 須恵器窯跡群の分布調査の一環として窯体確認及び堅穴住居または工房跡の探査を目的に実施。1基の窯体と窯体の可能性がある部分と、工房跡かとみられる正方形の4~5m大の磁気異常を発見した。東京都八王子市教育委員会。1月。(西村・山本)

具志川島遺跡崖葬人骨および炉跡取り上げ 沖縄県伊是名村。人骨はアクリル系合成樹脂、炉跡はイソシアネート系合成樹脂で強化したあと、発泡性硬質のウレタンフォームで造構全体を梱包・保護して取り上げた。(秋山)

龜井遺跡出土木棺取り上げ 大阪府八尾市南龟井町。古墳時代中期の木棺が出土し、漆塗短甲、草摺、鉄刀および軋などが共伴している。木棺全体を硬質ウレタンで梱包し取り上げた。各種遺物はその材質に合わせて保存処理方法を検討・指導した。(町田・沢田・秋山)

日韓青銅器文化シンポジウム 5月23日~27日。韓国ユネスコ委員会が、ユネスコ本部の協力を得て23・24日に開催した「韓日青銅器文化学術会議」に出席した。日本からは杉原莊介氏、金閔惣氏、西谷正氏の計4名。機会を得てソウル・慶州を巡り見聞をひろめた。(佐原)

中央アジア考古学調査 8月20日~10月30日。京都大学の同調査に参加。1ヶ月はアレキサンダー時代の皆スカンダル・テペ(カーブル近郊)の発掘調査、1ヶ月はバーミヤン石窟群の写真測量という慣れない仕事に従事。アフガニスタン一国内の70日間であった。(安原)

中華人民共和国研修旅行 54年2月15日から3月20日。「日中友好学術文化訪中团」の一員として、新疆ウイグル自治区のウルムチ、トルファン等シルクロード(北道)上の諸遺跡を訪れたほか、蘭州・西安近郊の遺跡、博物館を視察した。(山本)

奈良国立文化財研究所年報総目録（1958～1978）

1958年

緒言	1
形刻の調査と研究経過	3
興福院のふくさ及び東大寺図書館の厨子	5
奈良県下仏園調査報告	11
昭和32年度庭園遺跡調査概要	18
法隆寺東堂の問題	20
川原寺第1次・第2次調査概要	23
御室「興福寺雄摩会料当国不足米糸等定案」紙背文書	29
高山寺所蔵「東寺講堂指図」	34
奈良国立文化財研究所要項	38

1959年

序言	1
川原寺第3次発掘調査概要	2
明惠上人の高山寺庵室について	8
資料紹介	
興福寺中金堂前の灯籠台石	7
鶴林寺「聖徳太子伝」墨画	17
仁和寺探諸寺跡起四種	19
1. 金峯山本様起	19
2. 当麻寺様起	21
3. 明通寺様起	24
4. 和田橋寺跡進板	26
図版解説	
白朱子地格扇萬字つなぎ文様絹筋笛衣裳	16
昭和33年度調査研究概況	28
組織と構成	33

1960年

昭和34年平城宮跡第2次発掘調査概要	1
宮内省大膳職地区	
形刻の調査と研究経過	5
仁和寺所蔵「常楽伽院指図」について	11
飛鳥板蓋宮伝承地発掘調査概要	14
興福寺所蔵 覚空本明本抄および紙背文書	19
遺跡・庭園の調査	27
図版解説（往古篇・續）	13・26
昭和34年度調査研究概況	33
研究所の組織と構成	34

1961年

緒言	1
唐招提寺総合調査概要	2
昭和35年度平城宮跡第3・4・5次発掘調査概要	18
第2次内裏内部（3次） 大膳職（4・5次）	
頭塔の実測調査を了えて	28
形刻の調査と研究経過	35
昭和35年度調査研究概況	38
奈良国立文化財研究所要項	40

1962年

緒言	1
平城宮跡第6・7次発掘調査概要	2
第2次内裏内部 大膳職	
昭和36年度西大寺調査	9
唐招提寺総合調査概要	18
西寺跡発掘調査概要	22
東洋文庫所蔵 雄摩会井東寺遷頂記（抄）	27
形刻の調査と研究経過	32
庭園遺跡の調査と研究経過	34
昭和36年度調査研究概況	39
奈良国立文化財研究所要項	40

1963年

緒言	1
平城宮跡第9・10次発掘調査概要	2
内裏正殿地区（9次） 内裏北外部（10次）	
西大寺工芸調査概要	10
法隆寺中門金剛力士像実測調査概要	15
「理趣経曼荼羅図」拾遺	19
西寺跡第3次発掘調査概要	23
小堀遠州関係資料の探訪	29
御室「一字結縁法華經・傳法灌頂作法」について	34
昭和37年度調査研究概況	38
奈良国立文化財研究所要項	40

1964年

緒言	1
第13次平城宮発掘調査出土の木簡	2
西大寺形刻調査概要	9
舞鶴地区の美術工芸調査	15
後西院御所茶席敷の指図	21
写真測量の文化財調査への応用	24
東院発掘調査概要	26
仁和寺所蔵「本尊隨法不同事等」紙背文書	31
昭和38年度平城宮発掘調査概要	35
第2次内裏内部（12次） 内裏北外部（13次）	
宮城西南隅（14次） 西面南門・大垣（15次）	
奈良国立文化財研究所要項	40

1965年

秋葉寺調査概要	1
昭和39年度平城宮調査出土の木簡	11
笠置寺調査概要	15
春対寺所蔵 地蔵菩薩立像造像記	20
西大寺奥院脇堂調査概要	24
阿伽井又阿伽井屋について	26
昭和39年度平城宮跡発掘調査概要	30
宮城西南隅（14次） 朱雀門・内方（16・17次）	
西面榮地（18次） 内裏北外部（20次）	
内裏東外部（19次） 東都官衙（21・22次南）	
造酒司（22次北） 北面榮地（23次）	

奈良国立文化財研究所年報

奈良国立文化財研究所要項	41	仁和寺所蔵『薄草紙伝受記』紙背文書	13		
1966年					
寺地と結界の種々相	1	岡山美術館所蔵 能衣裳	16		
元興寺極楽坊・智光曼荼羅図(板松)のX線調査	8	今井町民家調査の概要I	19		
旧笠山竹林寺所蔵 地蔵菩薩立像	12	福井県民家調査概要	22		
舞鶴地区的美術工芸調査(続)	16	胡桃館埋没建物の復原	26		
寺地と経色第六百(春日若宮經)について	19	一乗谷朝倉氏跡発掘調査概要	30		
平城宮建基復原模型	23	昭和43年度平城宮発掘調査概報	34		
昭和40年度平城宮出土の木簡	27	1. 第47・50・52次発掘調査(西方官衙地区)	34		
昭和40年度平城宮発掘調査概報	31	2. 第48次発掘調査(第2次御堂院鉢集殿)	38		
内裏南面地回廊(12次補) 西面中門(25次)		奈良国立文化財研究所要項	45		
第1次内裏東外郭(27次) 宮城東南隅(32次)		1970年			
第1次内裏西外郭(28次) その他		はじめに	1		
旧一乘院関係近世文書の収集	41	久米田寺の華嚴教義関係の仏画	2		
奈良国立文化財研究所要項	45	絵画・墨刻・工芸の調査	6		
1967年					
大安寺発掘調査概要	1	古代建築についての二三の調査	7		
阿形邦三氏誠 刹織阿弥陀三尊来迎圖	6	今井町の民家調査(2)	9		
富貴寺大堂壁画調査概要	11	香川県・富山県の民家調査	11		
淨理瑠璃寺所蔵 不動三尊立像	14	一乗谷朝倉氏鉢跡の調査(2)	14		
東大寺天寶四至图について	18	臨川寺庭園の調査	16		
仁和寺所蔵 絵目録断簡ならびに貞觀格一逸文	23	建築遺跡調査・測量・史跡整備	17		
平城宮建基復原模型(昭和41年度)	27	「有法差別」井「有法自相」紙背文書(抄)	18		
昭和41年度平城宮出土の木簡	31	典籍古文書調査	22		
昭和41年度平城宮発掘調査概報	35	『七大寺巡礼私記』の研究	22		
東面大蛇入頭部(29次) 第2次内裏東外郭(33次)		出雲国守跡の調査	23		
西方官衙(37次) 第2次内裏北半(36次)		法起寺旧境内の発掘	26		
埴基柱建物(38次) 宮城東南入頭・宮門(39次)		海量王寺旧境内の発掘	27		
奈良国立文化財研究所要項	46	春日野莊建設予定地の発掘	28		
1968年					
緒言	1	1969年度の外部調査	29		
平城宮発掘調査10年の進展	2	平城宮資料館の建設	31		
1. 平城宮の発掘調査の現況と課題	2	1969年度平城宮跡・藤原宮跡発掘調査	33		
2. 発掘調査と記録の方法	6	大坂原東外郭(35次) 平塚1・2号堆(55次)	42		
3. 遺物の科学的保存処理	10	ウリナベ古墳外堤(54・60次) 東三坊大路(57・61次)	42		
4. 模型製作と遺跡復元の建設	13	左京一・樂二坊十五・十六坪(56次) 藤原宮の南闕(1次)	42		
鏡神社所蔵 楊柳觀音画像	17	1969年度発見の平城宮木簡	45		
寺地と傳薬師如意・獅子吼菩薩立像実測調査概要	21	平城宮東朝殿の復原模型	45		
「藥師寺中下構断之引付」について	25	奈良国立文化財研究所要項	48		
平安末期の建物にみられる頭貫の手法	29	1971年			
和歌山県民家調査概要	31	はじめに	1		
永保寺調査概要	35	創期東大寺大仏の比例的復原	2		
奈良国立文化財研究所要項	37	慈王堂の渡海船額	6		
奈良国立文化財研究所年報総目録(1958~1968年)	45	尼刻・絵画の調査	7		
1969年					
緒言	1	今井町の調査(3)	8		
写真測量の文化財調査への応用II	2	石川県の民家調査	12		
1. 発掘構造・遺物への応用	2	本瓦葺屋根の雨仕舞実験	14		
2. 仏像への応用	8	平城宮埴基柱建物および一部の復原模型	15		
3. 建造物への応用	10	建築遺構調査・史跡整備・測量	18		
馬寮北域(59・63次)		高山寺所蔵 穩摩詞衍論義草紙背文書	19		
馬寮南域(71次)		『七大寺巡礼私記』の研究	22		
小治田宮推定地		典籍古文書調査	22		
豊涌寺跡		平城宮跡・藤原宮跡発掘調査	23		

奈良国立文化財研究所年報録目録

左京二条二坊六坪（68次）	藤原宮大極殿東方〔2次〕	藤原宮西方官街地区〔第5～9次〕 奥山久米寺跡	
推定第1次内裏（69次）	その他	坂田寺跡 無鳥淨御原宮推定地	
第2次大極殿・内裏東外郭（70次）		上ノ井手遺跡	
奈良山第53号窯の調査	37	法輪寺塔基壇の発掘調査	48
海福王寺の発掘（2）	43	興福寺講堂跡の発掘調査	50
その他の調査	45	生駒市須恵器窯出土の土器	51
遺跡・遺物の保存	50	曲物製作技術の調査	52
平城宮跡の整備（1）	52	その他の調査	53
植物根系の調査	53	遺跡・遺物の保存（3）	54
外国出張概要	55	公開講演会要旨	57
公開講演会要旨	57	奈良国立文化財研究所要項	58
奈良国立文化財研究所要項	60		
1972年			
はじめに	1	はじめに	1
薬師寺金堂本尊背光の復原	2	奈良國文化「十六羅漢記」所収「仏乃寸法」について	2
唐招提寺金堂本尊台座の鎌倉期の修理	6	根津美術館所蔵 諸宗稚抄紙背文書〔抄〕	7
彫刻・絵画の調査	7	徳島県民家の調査	12
今井町の調査（4）	8	高山町並調査	14
宮崎県の民家調査	10	川原寺跡の環境整備	16
飛鳥寺造跡模型・川原寺伽藍復原模型	12	宮内省南殿の復原〔平城宮跡の整備4〕	18
平城宮跡の整備（2）	14	平城宮跡とその周辺の発掘調査	21
建築遺構調査・史跡整備・測量	16	第2次内裏後宮地〔78次前〕 左京三条二坊〔83次〕	
唐招提寺所蔵 吉本令私記並びに音義断簡について	18	大持職地〔81次〕 朱雀大路	
典籍古文書調査	25	法華寺金堂跡〔82～6次〕 左京五条一坊四坪	
南都諸寺様式の総合的研究	25	飛鳥藤原宮跡の発掘調査	34
平城宮跡・藤原宮跡の発掘調査	26	藤原宮西南官街〔10次〕 川原寺〔福庫・東大門〕	
推定第1次内裏（72次） 藤原宮内裏東外郭〔3次〕	27	藤原宮内裏西外郭〔11次〕 坂田寺跡〔2次〕	
第2次内裏東外郭〔73次〕 藤原宮内裏東外郭〔4次〕	28	小堀田宮推定地〔2次〕 その他	
薬師寺金堂基壇の発掘調査	42	飛鳥資料館の建設	44
西隆寺跡の発掘調査	45	桓ノ森遺跡出土建築部材の調査	46
明日香村豊浦隧道文様石の調査	48	青如谷瓦窯の調査	47
伯耆国分寺・国分尼寺跡の発掘調査	50	古照道跡の調査	48
その他の調査（1. 遺跡 2. 遺物）	51	伯耆国分尼寺跡の調査	49
遺跡・遺物の保存（2）	54	遺跡・遺物の保存〔4〕	50
公開講演会要旨	56	その他の調査	53
奈良国立文化財研究所要項	58	公開講演会要旨	57
奈良国立文化財研究所要項	58	奈良国立文化財研究所要項	58
1973年			
はじめに	1	はじめに	1
飛鳥寺本尊・山田寺仏頭の実測調査と推定復原	2	海住山寺総合調査報告〔1〕	2
彫刻・絵画の調査	7	日本美術院彫刻等修理記録の刊行	7
肥兒島県の民家調査	8	木曾・奈良井宿の町並調査	8
平城宮跡の整備（3）	10	平城宮跡と平城京跡の発掘調査	10
建築遺構調査・史跡整備・測量	12	1. 平城宮跡およびその周辺の発掘調査	11
唐招提寺所蔵 吉本令私記断簡補遺	14	第2次内裏後宮〔78次前〕 西方官街地区〔93次〕	
典籍古文書の調査	17	第2次内裏西外郭〔91次〕 その他	
南都諸寺様式の総合的研究	17	2. 平城京跡の発掘調査	19
平城宮跡とその周辺の発掘調査	18	「左京三条二坊〔86次〕 左京八条三坊〔93次〕」	
第1次内裏・大極殿地区〔75～77次〕 中山瓦窯〔79～5次〕	18	「左京二条二坊〔89次〕 薬師寺西僧房」	
法華寺境内〔79～2・10次〕 平城ニュータウン予定地	18	「左京五条一坊〔90次〕 大安寺鐘楼・僧房」	
阿部淨土院跡〔80次〕			
1972年度発見の平城宮本簡	36	1973・74年度発見の平城木簡	34
飛鳥藤原宮跡の発掘調査	38	平城宮跡の整備〔5〕	36
		遺跡・遺物の保存〔5〕	39

奈良国立文化財研究所年報

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査	44	東院庭園 (99次)			
藤原宮東南隅地区 (15次)		2. 平城京の調査	30		
大官寺講堂・北回廊 (1次)		右京五条四坊三坪 (100次)	薬師寺西塔跡		
飛鳥資料館の開館展示	54	東大寺西面大廈	その他		
小形遺物の写真測量図化と石器製作に関する研究	56	1976年度発見の平城宮木簡	38		
伯耆国分尼寺・官衙跡の調査 (2)	59	平城宮跡の整備 (7)	41		
その他の調査研究	60	藤原宮跡の整備 (2)	43		
大和条里の計測	64	平城京東三坊大路側溝出土の大型人形	44		
公開講演会要旨	65	奈良山出土の藏骨器と墨	45		
奈良国立文化財研究所要項	66	植物質織維加工品の保存	46		
飛鳥・藤原宮跡の発掘調査					
1976年					
はじめに	1	藤原京朱雀大門 (17-2・3次)	山田寺塔・中門 (1次)		
新薬師寺総合調査	2	藤原京右京七条一坊 (19次)	飛鳥寺北方		
1975年度木簡研究集会	11	大官寺南・東西面回廊 (3次)	稻荷川遺跡		
伝統的建造物群の調査	12	飛鳥・白鳳在銘金剛佛の調査	59		
旧米谷家住宅の修理	16	遣跡探査法の開発	62		
平城宮跡と平城京跡の発掘調査	18	埋蔵文化財関係用語の収集と整理	64		
1. 平城宮跡の発掘	19	在外研修成果報告	65		
第1次内東平廊 (87次)	北・西面大廈 (95-10-11次)	公開講演会要旨	66		
2. 平城京跡の発掘調査	26	調査研究彙報	67		
左京八条三坊 (90次)	火安寺僧房	奈良国立文化財研究所要項	73		
左京三条二坊六坪 (96次)	法華寺旧境内				
菟葵寺食堂北方	その他の				
平城宮跡発見の殿堂礎形材	36	1978年			
平城宮跡の整備 (6)	38	序	1		
平城宮跡第3収蔵庫の建設	40	桜井市仏教美術調査	2		
飛鳥・藤原宮跡の発掘調査	42	明日香村内仏像影刻の調査	5		
藤原宮正面中門 (18次)	大官寺大門・南回廊 (2次)	高松塚古墳出土木棺の修理	6		
藤原京右京七条一坊 (17次)	和田庵寺塔跡 (2次)	福智寺所蔵「大東院御中集会引付」	8		
本薬師寺西南隅	田中遺跡	岡山県近世社寺建築の調査	12		
1975年度発見の藤原宮木簡	51	富山県民家調査	14		
藤原宮跡の整備 (1)	53	三手先斗横の変遷	16		
和田庵寺出土鏡尾の復原修理	54	今井町の町並調査	17		
吉備媛王墓築石の模型製作	56	平城宮跡と平城京跡の調査	18		
遺跡判読のための空中写真の撮影条件について	58	1. 平城宮跡の調査	19		
埋蔵文化財発掘技術者研修の現状	60	第1次朝堂院地区 (102次)	佐紀池東 (103-9, 107次)		
大和条里的計測 (続)	61	佐伯門東方 (106次)	東院地区 (104次)		
在外研修成果報告ードイツと北欧をめぐる	62	2. 平城京の調査	26		
公開講演会要旨	63	北坊 (103-16次)	薬師寺小字房・十字塗		
調査研究彙報	64	左京三条二坊六坪 (109次)	その他		
奈良国立文化財研究所要項	69	平城宮および京跡出土の木簡	32		
飛鳥・藤原宮跡の発掘調査					
1977年					
はじめに	1	平城宮跡の整備 (8)	35		
海住山寺総合調査報告 (2)	2	遺跡・遺物の保存科学	37		
法輪寺・法起寺影刻調査	7	飛鳥・藤原宮跡の発掘調査	39		
東大寺善財童子松巣について	10	藤原宮大廈南北 (20次)	大官寺企念推定地 (4次)		
奈良県民家調査	12	藤原宮西殿 (21次)	平吉遺跡		
当麻寺東西両塔の調査	16	藤原宮内裏地区 (22次)	その他		
談山神社社殿の調査	18	日本古代の墓誌の調査	52		
識名園庭園の実測調査	19	威奈大村竹筒器・山田寺傳仏の模造製作	53		
写真測量による建造物の経年変形	20	軒先承下実験	54		
平城宮跡と平城京跡の調査	21	石器簡易固化器の開発	56		
1. 平城宮跡の調査	22	北海道津別町堅穴住居群の調査	58		
第1次朝堂院東北地区 (97次)		公開講演会要旨	60		
佐紀池 (101次)		調査研究彙報	61		
		奈良国立文化財研究所要項	65		

奈良国立文化財研究所要項

I 事業概要

1 研究普及事業

公開講演会

- (1) 1978年5月20日 第43回公開講演会
 「大官大寺について」 甲斐 忠彦
 「近年の民家調査とその成果について」 吉田 靖
- (2) 1978年11月11日 第44回公開講演会
 「平城宮朝堂の諸問題」 今泉 隆雄
 「古代国庁の構造について」 菅原 正明
- 現地説明会
- (1) 1978年5月13日 山田寺発掘調査現地説明会 上野 邦一
- (2) 1978年6月24日 平城宮第2次朝堂院東第2堂発掘調査現地説明会 畠 浩一郎
- (3) 1978年9月30日 平城宮東院園池北方発掘調査現地説明会 中村 友博
- (4) 1978年10月28日 大官大寺塔跡発掘調査現地説明会 松村 恵司

藤原宮第24次発掘調査現地

2 1978年度文部省科学研究費補助金による研究

種 別	研 究 課 題	研 究 代 表 者	支 付 額
特 定 研 究 (1)	造構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究 等真測量による建造物の経年変化の研究	佐原 真	3,500千円
〃	地下造構の探査法の開発	工藤圭章	4,500
〃	遺跡に関する情報の活用システムの基礎的研究	田中 琢	1,000
〃	石器製作に関する科学的分析法の研究	田中 琢	2,000
一 般 研 究 (A)	白杵磨崖仏の復元的研究	松沢 勝生	2,600
一 般 研 究 (B)	三手先構造の変遷に関する調査研究	星山晋也	500
一 般 研 究 (C)	わが国古代における建築物造営供養の考古学的研究	森 郁夫	200
〃	弥生時代の地域性に関する研究	工業善通	200
〃	魏晋南北朝時代埴輪の構造的研究	町田 章	1,800
〃	飛鳥時代石造物の研究	猪熊 勝勝	1,700
一 般 研 究 (D)	東大寺文書の基礎的研究とくに起請文を中心として— 供獻形態土器の研究(弥生・古墳時代を中心として) 中国、朝鮮の博と日本の博の比較研究	鍬村 宏 甲斐忠彦 田辺征夫	420 380 440
獎 励 研 究 (A)	金銅冠の系譜的研究 金銅技術の研究 —古墳時代における技術の系譜関係を中心に— 製瓶土器からみた瓶の消費と流通に関する研究 番付の発展過程の研究 黒吉土器の記載内容にみる出土遺物の性格の分析	毛利光俊彦 小林謙一 岩本正二 清水真一 井上和人	350 350 350 390 350

- 説明会 西口 寿生
 (5) 1978年12月16日 平城宮第2次大極殿発掘調査現地説明会 井上 和人
 (6) 1979年1月30日～31日 「石のカラト」古墳発掘調査現地説明会 金子 裕之・立木 修
 (7) 1979年3月16日 飛鳥寺発掘調査現地説明会 山崎 信二
 (8) 1979年3月17日 「石のカラト」古墳発掘調査現地説明会 金子 裕之
- 平城宮跡資料館・覆屋公開

- (1) 春季特別公開 1978年4月29日～5月7日
 見学者 8,119名
 秋季特別公開 1978年10月21日～11月5日
 見学者 12,898名

(2) 見学者数

区 分	資料館	覆 屋	計
1978年	49,729	52,328	102,057
累 計	286,181	581,298	867,479

* 資料館は1970年度・覆屋は1968年度以降

3 飛鳥資料館の運営

展示

第一展示室 常設展示

第二展示室 特別陳列「明日香の仏像」

(1978.4.18~1978.5.26)

特別展示「古代の誕生仏」

(1978.9.28~1978.11.19)

普及

前年同様インフォメーションルームで観覧者の質問に応じている。また特別展示のカタログとして「明日香の仏像」および「古代の誕生仏」を行。

入館者数 (1978.4.1~1979.3.31 開館日数303日)

	普通観覧	団体観覧	有料計	無料	合計
一般	44,122	22,420			
高・大	13,428	29,456	155,471	6,566	162,037
小・中	8,538	37,507			
計	66,088	89,383			

模作製作 銅造菩薩如来像(頭部)(竜角寺),如意輪观音半跏像(圓寺),銅造誕生釈迦佛立像(城陽市),重要文化財 高松塙古墳出土品一括のうち海獸葡萄鏡1面 他九点,高松塙古墳出土品漆塗木棺断修理,重要文化財 高松塙古墳木棺破片修理,平城京左京三条二坊建物復原模型製作,平城宮朱雀門模型修理,坂田寺軒丸瓦軒平瓦複製

4 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修 埋蔵文化財の保護に資することを目的として,おもに地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

(1) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺跡調査課程)

1978年5月8日~5月27日(参加者18名)

(2) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺物整理課程)

1978年6月15日~6月30日(参加者10名)

(3) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修(第1回特殊調査技術課程)

1978年7月17日~7月19日(参加者17名)

(4) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修

1978年7月24日~8月26日(参加者18名)

(5) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修

(遺跡測量課程)

1978年9月18日~10月28日(参加者8名)

(6) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺物保存科学課程)

1978年11月8日~11月22日(参加者8名)

(7) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(自然遺物課程)

1978年12月6日~12月16日(参加者12名)

(8) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺跡保存整備課程)

1979年1月22日~1月31日(参加者16名)

(9) 昭和53年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(調査計画課程)

1979年3月1日~3月10日(参加者19名)

(10) 研修員受入

ア. 松鹿昭二(名張高等学校教諭)

田村輝之(上野市立丸山中学校教諭)

1978年7月3日~9月28日

イ. Gina Lee Barnes(米国ミシガン大学民族学部考古学科博士課程学生)

1978年9月1日~12月31日

ウ. 植由典(韓国文化財研究所学芸研究官)

1978年12月26日~1979年4月25日

調査整備等指導

(本文及び研究筆報掲載の分を除く)
 (北海道)開陽丸埋没遺跡,キウス環状土籠群,
 (岩手)蘿内遺跡,(福島)慧日寺跡石塔,(栃木)
 下野國府跡,(東京)八王子市瓦窯跡,(新潟)
 越後国分寺跡,県内弥生時代遺跡,(福井)
 岡津塙汲場製塩遺跡,(長野)松本城二の丸跡,
 弘法山古墳,座光寺バイパス関係遺跡,(岐阜)
 江馬館跡,美濃須衛窓跡,老洞窓跡,美濃国分寺
 跡,(愛知)大山廟寺,瓜郷遺跡,篠池古窓跡群,
 尾張国衙跡,(三重)北堀池遺跡,(京都)森本
 遺跡,(和歌山)根来寺庭園群,紀伊国分寺跡,
 (兵庫)千本屋廢寺跡,大路焼窯,福本遺跡瓦窯,
 (鳥取)上原遺跡,(鳥根)富田川河床遺跡,(岡山)
 寒風古窓跡群,美作国分寺跡,鬼城,(山口)
 長門国府周辺遺跡,周防国府跡,(香川)県
 道高松・長尾・大内線建設関係遺跡,(愛媛)長
 降寺跡,永納山古代山城跡,来住寺跡,(福岡)
 太宰府町水城跡,(佐賀)大和中納言陣跡,丸山
 古墳群,(沖縄)ナガラ原貝塚,具志川島遺跡,

奈良国立文化財研究所要項

座喜味城跡、仲泊遺跡

埋蔵文化財ニュース刊行

第14号 市町村教育委員会による埋蔵文化財関係
調査報告書等の刊行 1978年7月20日刊

第15号 昭和52年度緊急調査事業種別費用
1978年10月1日刊

第16号 遺物・遺構の取りあげ工法
1978年11月10日刊

第17号 発掘調査と安全対策 1979年1月15日刊

第18号 古代地方官衙遺跡関係文献目録I 総論・
東日本篇 1979年2月28日刊

第19号 古代地方官衙遺跡関係文献目録II 西日本
篇 1979年3月31日刊

5 その他

委員会等

第5回飛鳥資料館運営協議会

1978年5月16日 於飛鳥資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1978年5月22日・23日 於平城宮跡資料館

集落町並保存対策に関する研究集会

1979年1月29日・30日 於平城宮跡資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1979年2月7日 於平城宮跡資料館

国外出張

佐原 真 韓国ユネスコ国内委員会主催の韓国
青銅器文化の研究討議に出席及び視察のため大韓
民国に派遣。

1978年5月22日～同年5月28日

工楽善通 文部省在外研究員として北欧における
青銅器文化の比較研究のためスウェーデン・ド
イツ連邦共和国・連合王国・フランスに派遣。

1978年8月19日～同年10月19日

安原啓示 中央アジアの考古学的調査のためア
フガニスタン・パキスタン・インドに派遣。

1978年8月20日～同年10月30日

沢田正昭 文化財保存修復国際研究会議第7回
世界大会出席一西ドイツ国立プロイセン博物館群
ラトゲン研究所及びローマン・ゲルマン中央博物
館訪問一国際博物館保存会議第5回大会出席のた
め連合王国・ドイツ連邦共和国・ユーゴスラビア
に派遣。

1978年9月15日～同年10月10日

上野邦一 ローマ文化財修復国際センターにお
ける歴史的記念物の保存に関する研修コース参加の

ためイタリアに派遣。

1978年11月25日～1979年7月2日

田中義恭 「日本本影展」出品物展示のためド
イツ連邦共和国・スイスに派遣。

1978年12月12日～1979年3月31日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の國
有化を進めており、1972年度から当研究所が文化
庁から支出委託を受けて買収業務を担当している
が、1978年度の状況は下記の通り

区分	面積	購入額
1978年	31,665.52m ²	543,949,966円
国有地合計	179,706.05	2,857,271,206

II 図書及び資料

図書 46,250冊

区分	種別	購入	寄贈	計
1978年	和漢書	936	2,622	3,558
	洋書	936	27	963
累計	和漢書	25,561	16,891	42,452
	洋書	3,409	389	3,798

写真 179,076点(1978年度末現在)

III 研究成果刊行物

1978年度刊行物

名 称
学報第35冊 研究論集Ⅳ
学報第36冊 平城宮整備調査報告Ⅰ
史料第14冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅷ
史料第15冊 東大寺文書目録第1巻
図録第4冊 日本古代の墓誌 著文編
図録第5冊 古代の誕生仏
基準 資料 第6冊 瓦編6
概 稿 他 昭和52年度平城宮発掘調査板報
平城宮発掘調査出土木簡板報12
第3回木簡研究集会記録
飛鳥・藤原宮発掘調査板報8
藤原宮出土木簡板報13
飛鳥編年史料集稿跡
グリーン
ファイルリストII

奈良国立文化財研究所年報

前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師連慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢II
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡・伝戒馬板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊 院家建築の研究
1962	第12冊 功臣阿弥陀仏快慶
	第13冊 寂姫造系庭園の立地的考察
	第14冊 レースと金丸寺利塔に関する研究
	第15冊 平城宮発掘調査報告II 宮衙地域の調査
1963	第16冊 平城宮発掘調査報告III 内裏地域の調査
1965	第17冊 平城宮発掘調査報告IV 宮衙地域の調査
	第18冊 小麿遠州の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊 名物製の成立
1971	第21冊 研究論集I
1973	第22冊 研究論集II
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査
	第24冊 高山一町並調査報告一
1975	第25冊 平城京左京三条二坊
	第26冊 平城宮発掘調査報告VII
	第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告I
	第28冊 研究論集III
	第29冊 木曾奈良井一町並調査報告一
	第30冊 五条一町並調査の記録一
1976	第31冊 飞鳥・藤原宮発掘調査報告II
1977	第32冊 研究論集IV
	第33冊 イタリア中部の一山居集落における 民家調査報告
	第34冊 平城宮発掘調査報告VIII

奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)
1955	第2冊 西大寺觀音伝記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 寺誌編I
1964	第4冊 俊乗坊重源史料集成
1966	第5冊 平城宮木簡I 図版
1967	第6冊 仁和寺史料 寺誌編II
1969	第5冊 平城宮木簡I 解説(別冊)
1970	第7冊 唐招提寺史料I
1974	第8冊 平城宮木簡2 図版・解説

1975	第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I
1976	第10冊 日本美術院彫刻等修理記録II
1976	第11冊 日本美術院彫刻等修理記録III
1977	第12冊 藤原宮木簡I 図版・解説
	第13冊 日本美術院彫刻等修理記録IV

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編I 解説
1974	第2冊 瓦編II 解説
1975	第3冊 瓦編III
1976	第4冊 瓦編IV
	第5冊 瓦編V

飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976	第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇
1977	第3冊 日本古代の墓誌

IV 機構・定員

機構の改正

1978年4月5日省令改正に伴い埋蔵文化財センターに情報資料室新設

定員

	指定職	行政一	行政二	研究職	計
1977年度	1	23	7	68	99
1978年度	1	23	6	69	99

(増員内訳) 埋蔵文化財センター 1

(減員内訳) 庶務部 1

V 予算(1978年度)

歳 出	1,624,527,000円
人 件 費	358,357,000
運 常 費	522,264,000
事 業 管 理	9,869,000
一 般 研 究	48,993,000
特 別 研 究	2,144,000
発 掘 調 査	326,115,000
宮 隅 整 備 管 理	42,420,000
飛 鳥 資 料 館 運 営	45,110,000
埋 藏 文 化 財 センター 運 営	47,613,000
施 設 費	743,906,000
施 設 整 備 費	93,469,000
平 城 宮 隅 地 等 整 備 費	108,660,000
各 所 修 築	3,548,000
不 動 産 購 入 費	538,229,000

奈良国立文化財研究所要項

VI 施設

土地 32,311m² (当所所管)

春日野	5,126m ²	旧病院跡購入	8,860m ²
飛鳥資料館	16,902m ²	飛鳥資料館宿舍	1,343m ²
郡山宿舎	80m ²		

1,153,365.53m² (文化庁所管)

平城宮跡地区	972,788.95m ²
(他に奈良県先行取得地32,662.56m ² がある)	
藤原宮跡地区	179,706.55m ²
飛鳥積善宮殿跡地	870.53m ²

建物

建物	春日野	統合 移転地	平城	藤原	飛鳥	資料館	計
事務所	797	6,620	1,820	503	152	9,892	
倉庫・収蔵庫	191	—	5,882	1,273	—	7,346	
車庫	20	—	363	217	94	694	
会議室	40	—	192	—	42	274	
講堂	109	—	—	—	89	198	
写真室	86	—	192	61	49	388	
展示室	—	—	360	—	648	1,008	
覆屋・展示棟	—	—	1,518	—	—	1,518	
その他	200	—	511	152	1,608	2,471	
計	1,443	6,620	10,838	2,206	2,682	23,789	
重要文化財 旧米谷家住宅						198	
合計						23,987	

主要工事

(1) 施設整備費

飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺物収蔵室	内
外新設工事	4,200,000
飛鳥藤原宮跡発掘調査部構内道路	
舗装工事	800,000
春日野庁舎作場配管工事	63,000
春日野庁舎所長室照明器具とりかえ工事	55,000

(2) 平城宮跡地等整備費

平城宮跡環境整備昭和53年度	
第Ⅰ期工事	40,500,000
平城宮跡 覆屋便所新設工事	5,164,000
〃 〃 機械設備工事	1,310,000
〃 〃 電気工事	222,000
昭和53年度藤原宮跡環境整備工事	22,000,000
平城宮跡環境整備昭和53年度	
第Ⅱ期工事	39,000,000
藤原宮跡制札屋形移設工事	464,000

(3) 建設省近畿地方建設局委任工事

奈良国立文化財研究所建築改修工事

65,810,000	m ²	
機械	〃	12,350,000
電気	〃	9,030,000

序 費

埋蔵文化財センター研修棟	2,780,000
視聴覚教室外建築改修工事	
〃 電気改修工事	500,000
〃 研修棟建具取設外工事	
〃 研修棟空調設備工事	2,000,000

10,250,000

VII 人事異動

(1978年4月1日～1979年3月31日)

4月1日 庶務部長に転任	小島 廣治
辞職	服部 栄次
庶務部会計課長に昇任	金塚 勇
京都国立近代美術館庶務課長に転任	杉本 光司
庶務部庶務課庶務係長に転任	荻原 陽雄
京都大学(原子エネルギー研究所庶務係長)に出向	山崎 一博
東北大文学部助教授)に出向	須藤 隆
事務補佐員採用	村田 恵子・高田久美子
研究補佐員採用	立木 修・内田 誠
4月5日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室長に昇任	木下 正史
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室長に昇任	細見 啓三
5月1日 庶務部会計課經理係長に配置換	西田 健三
6月1日 文部技官採用	立木 修
9月30日 辞職	東野 治之
10月1日 埋蔵文化財センター情報資料室長に昇任	岩本 次郎
平城宮跡発掘調査部計測景調査室長に昇任	田中 哲雄
庶務部庶務課長補佐に昇任	

奈良国立文化財研究所年報

(内部組織)

10月1日 文化庁に出向(文化財保護部記念物課)

萩原 陽雄

西 弘海

12月28日 辞職

東田 道代

福原まり花

藤本 節子

1月1日 文部技官採用

佐藤 信

1月4日 事務補佐員採用

牧田 道子

2月1日 文部技官に転任

清田 善樹

3月30日 辞職

石田 信子

立花 憲

辻 秀人

3月31日 辞職

星山 晋也

VII 組織規定

文部省設置法抜萃

昭和24年法律第146号

昭和43年6月15日一部改正

第36条 第43条に規定するもののほか、文化庁に次の機関を置く。

国立文化財研究所(前後略)

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都
奈良国立文化財研究所	奈良市

3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則 抜萃

昭和28年1月13日文部省令第2号。追加昭和43年6月15日

文部省令第20号

昭和45年4月17日文部省令第11号。昭和48年4月12日

文部省令第6号。

昭和49年4月11日文部省令第10号。

昭和50年4月2日文部省令第12号。

昭和51年5月10日文部省令第16号。

昭和52年4月18日文部省令第10号。

昭和53年4月5日文部省令第20号。

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第2款 奈良国立文化財研究所

(所長)

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は所務を掌理する。

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、美術工芸研究室、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥跡原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

(庶務部の分課及び事務)

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

一 庶務課

二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関する事務。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関する事務。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。

一 予算に関する事務を処理すること。

二 預費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 庁舎の取締りに関する事務。

(美術工芸研究室等の事務)

第127条 美術工芸研究室においては、絵画、彫刻、工芸品、書跡その他の有形文化財(次項及び第3項に規定するものを除く)、及び工芸技術に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

2 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

3 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に關し、次項から第六項までに定める事務を処理するほかその発掘を行う。

奈良国立文化財研究所要項

- 3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- （飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）
- 第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。
- 2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に關し、次項から第五項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。
- 3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- 5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。
- （飛鳥資料館）
- 第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に關し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。
- （飛鳥資料館の館長）
- 第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。
- 2 館長は、館務を掌理する。
- （飛鳥資料館の二室及び事務）
- 第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。
- 2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。
- 3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。
- 一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真的作成、調査研究及び解説を行うこと。
- 二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。

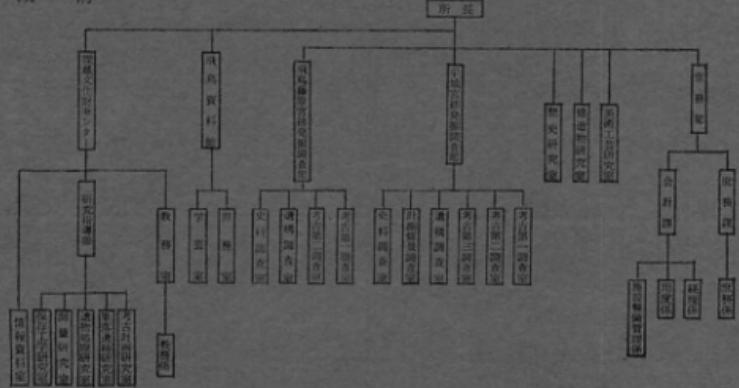
- 三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。
- （埋蔵文化財センター）
- 第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。
- 一 埋蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。
- 二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行うこと。
- 三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。
- 四 埋蔵文化財に關する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。
- （埋蔵文化財センターの長）
- 第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。
- 2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。
- （埋蔵文化財センターの内部組織）
- 第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。
- （教務室の事務）
- 第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に關する事務をつかさどる。
- （研究指導部の五室及び事務）
- 第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。
- 2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。
- 3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。
- 4 遺物処理研究室においては、遺物の処理に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 5 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 6 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

職員 (1979年6月1日現在)

所屬	氏名	官職	担当	所屬	氏名	官職	担当
	坪井 清足	文部技官所長			狩野 久	文部技官部長	
庶務課	小島 廣治	文部事務官部長		考古第一調査室	工業原子金井上原八輔	官室	古古古古真真
	三森 武雄	文部事務官課長	人平城賢備		通明之人質扶桑	官室	古古古古真真
	萩原 陽雄	文部事務官課長補佐	平城賢備		正裕和人質扶桑	官室	古古古古真真
	西田 順三	文部事務官課長補佐	平城賢備		忠雄光治	官室	古古古古真真
	西田 徹	文部事務官課長補佐	平城賢備		森田金太郎	官室	古古古古真真
	木寅 忠雄	文部事務官警務長	官室		森田吉田龍淳	官室	古古古古真真
	森田 光治	文部事務官警務長	官室		吉田龍淳	官室	古古古古真真
	岡田 博児	文部事務官警務長	官室		安田利洋	官室	古古古古真真
	稻本 安臣	文部事務官専門員	官室		安田利洋	官室	古古古古真真
	八幡 桂子	文部事務官専門員	官室		吉田利洋	官室	古古古古真真
	澤宮 宜代	文部事務官専門員	官室		吉田利洋	官室	古古古古真真
	中川かよ子	文部事務官専門員	官室		吉田利洋	官室	古古古古真真
	中垣 瞳美	文部事務官専門員	官室		吉田利洋	官室	古古古古真真
	村田 恵子	文部事務官専門員	官室		吉田利洋	官室	古古古古真真
務課	金琢 男	文部事務官課長	理	考古第二調査室	森田辺吉田安賀翼	官室	史古古古古古
	吉田 博次	文部事務官課長	理		夫征二郎	官室	史古古古古古
	日高 冬野	文部事務官課長	理		忠二郎	官室	史古古古古古
	前川 和二	文部事務官課長	理		吉田龍淳	官室	史古古古古古
	吉田 重子	文部事務官課長	理		立木久尚	官室	史古古古古古
	牧田 道子	文部事務官課長	用度	考古第三調査室	山本毛利中村立木	官室	史古古古古古
	乾 新井	文部事務官課長	用度		東三郎	官室	史古古古古古
	刀谷 中西	文部事務官課長	用度		友博修	官室	史古古古古古
	藤本 きよえ	文部事務官課長	用度		黒川久三郎	官室	史古古古古古
	博子 日高	文部事務官課長	用度		田中毛利	官室	史古古古古古
	渡辺 康史	文部事務官課長	用度		立木毛利	官室	史古古古古古
	奥村 末儀	文部事務官課長	用度		立木毛利	官室	史古古古古古
	高木 大場	文部事務官課長	用度		立木毛利	官室	史古古古古古
	加藤 建夫	文部事務官課長	用度		立木毛利	官室	史古古古古古
研究室	田中 百橋	文部技官室長	形	遺構調査室	宮本長二郎	官室	築築築築築築
	義恭 明穂	文部技官室長	檢		佐藤伸真	官室	築築築築築築
	高田 久美子	文部技官室長	資料整理		佐藤伸真	官室	築築築築築築
建造物研究室	吉田 中村	文部技官室長(併任)	刻	遺構調査室	佐藤伸真	官室	築築築築築築
	清水 雅治	文部技官室長(併任)	画		佐藤伸真	官室	築築築築築築
	光谷 真一	文部技官室長(併任)	資料整理		佐藤伸真	官室	築築築築築築
	松本 拓実	文部技官室長(併任)	整理		佐藤伸真	官室	築築築築築築
	福田 敏男	文部技官室長(併任)	整理		佐藤伸真	官室	築築築築築築
	幸子 幸子	文部技官室長(併任)	整理		佐藤伸真	官室	築築築築築築
歴史研究室	田中 稔	文部技官室長(取扱)	考	史料調査室	鬼頭清田	官室	史古史古史古
	毛利 宏彦	文部技官室長(取扱)	考		藤原清田	官室	史古史古史古
	種村 俊一	文部技官室長(取扱)	考		佐藤清田	官室	史古史古史古
	川越 雄二	文部技官室長(取扱)	考		佐藤清田	官室	史古史古史古
	今泉 正春	文部技官室長(取扱)	考		佐藤清田	官室	史古史古史古
	岩本 聰峰	文部技官室長(取扱)	考		佐藤清田	官室	史古史古史古

所屬	氏名	官職	担当	組	氏名		官職	担当	組	所屬
					官	職				
飛鳥	工藤	主草文部技官	長	吉古	猪野	兼勝	軍	長	古	考古普考
宮	伊藤	室官	長	吉古	大駿	御志	文部官	長	古	舊將務
史科調査室	佐藤	室官	長	吉古	津村	庄一	文部事務官	長	古	古及古
遺構調査室	西口	室官	長	吉古	藤井	田中	文部技官	長	古	事事事
遺構調査室	井上	室官	長	吉古	牛	總	文部技官	長	古	事事事
水下	水下	室官	長	吉古	小林	望一	文部事務官	長	古	事事事
上野	上野	室官	長	吉古	竹島	雅美	文部事務官	長	古	事事事
今千	今千	室官	長	吉古	田中	琢	文部技官	長	古	事事事
見	細見	室官	長	吉古	松川	誕生	文部技官	長	古	事事事
甲斐	甲斐	室官	長	吉古	曾本	主祐	文部技官	長	古	事事事
土肥	土肥	室官	長	吉古	佐藤	真二	文部官	長	古	事事事
村	村	室官	長	吉古	山崎	信二	文部官	長	古	事事事
三	三	室官	長	吉古	町田	喜保	官官官	長	古	事事事
忠彦	忠彦	室官	長	吉古	秋山	隆昭	官官官	長	古	事事事
孝司	孝司	室官	長	吉古	呉田	正昭	官官官	長	古	事事事
加羅	加羅	室官	長	吉古	木曾	敬嚴	官官官	長	古	事事事
高邑	高邑	室官	長	吉古	伊東	正作	官官官	長	古	事事事
本	本	室官	長	吉古	西村	康	官官官	長	古	事事事
小林	小林	室官	長	吉古	安原	盛宣	官官官	長	古	事事事
修謙	修謙	室官	長	吉古	伊東	太作	官官官	長	古	事事事
建夫	建夫	室官	長	吉古	沢田	重輔	官官官	長	古	事事事
大西	大西	室官	長	吉古	岩本	次郎	官官官	長	古	事事事
石谷	石谷	室官	長	吉古	中	敏夫	官官官	長	古	事事事
福班	福班	室官	長	吉古	伊東	太作	官官官	長	古	事事事
正	正	室官	長	吉古	沢田	重輔	官官官	長	古	事事事
月宮	月宮	室官	長	吉古	岩本	次郎	官官官	長	古	事事事
川宮	川宮	室官	長	吉古	中	敏夫	官官官	長	古	事事事
佐信	佐信	室官	長	吉古	伊東	太作	官官官	長	古	事事事
内田	内田	室官	長	吉古	沢田	重輔	官官官	長	古	事事事
處	處	室官	長	吉古	岩本	次郎	官官官	長	古	事事事
研究官										
研究官										
研究官										

機構



ANNUAL BULLETIN OF NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

1979

CONTENTS

	Page
Excavation of the <i>Daigokuden</i> (Main Ceremonial Hall), Nara Palace Site.....	1
Excavation of the Main Hall and Northern Part of the Gallery, Yamadadera Temple	5
Excavation of Ishino-karato <i>Kofun</i> (Tumulus Grave)	8
Exploitation of Photography System by Ropewhy Method.....	9
Excavation of <i>Zutō</i> (Square Mound with Stone Buddhist Images)	10
Investigation of the Documents Relating to <i>Shō-shibō</i> in Kōfukuji Temple.....	13
Survey of Townscape in Imaichi.....	16
Architectural Surveys of Edo Period Shrines and Temples in Yamaguchi Pref....	18
Excavation of the Nara Palace Site and Ancient Metropolis of Nara.....	20
Excavation of the Asuka and Fujiwara Palace Sites.....	28
Investigation of the Ancient <i>Tanjō-butsu</i> (Statues of Infant Buddha)	37
On Ancient Roof-tiles Presented by Mr. Takeyoshi	38
New Drawing Method for Stone Implements and It's Application	39
Information Management Activities of the Center for Archaeological Operations.....	40
Survey of the Group of <i>Kanji-dōri</i> (Earth-circle for Burial) at Kiusu, Chitose City	42
Physical Layout of the Nara and Fujiwara Palace Sites	43
Conservation Science for Site and Relics (6)	46
Buikling for In-service Training of the Center for Archaeological Operations.....	49
Plan of the Nara Palace Site Museum	50
Chronological Study on <i>Mitesaki</i> Structure	52
Reconstructed Model of the Aristocratic Residence in Ancient Metropolis of Nara.....	53
Reserch Abroad by the Affiliate of the Institute	54
Summaries of Open Lectures Held by the Institute during 1978	55
Other Specific Reserches and Surveys	56
General Catalogue of the Annual Bulletin Published during 1958~1978	61
Organization and Activeties of the Institute	65

Published by

Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1979

ANNUAL BULLETIN
OF
NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE

1979

CONTENTS

	Page
Excavation of the <i>Daigokuden</i> (Main Ceremonial Hall), Nara Palace Site	1
Excavation of the Main Hall and Northern Part of the Gallery,	
Yamadadera Temple	5
Excavation of Ishino-karato <i>Kofun</i> (Tumulus Grave)	8
Exploitation of Photography SyStem by Ropeway Method	9
Excavation of <i>Zuto</i> (Square Mound with Stone Buddhist Images)	10
Investigation of the Documents Relating to <i>Shoshibo</i> in Kofukuji Temple	13
Survey of Townscape in Imaicho	16
Architectural Survey of Edo Period Shrines and Temples in Yamaguchi Pref.	18
Excavation of the Nara Palace Site and Ancient Metropolis of Nara	20
Excavation of the Asuka and Fujiwara Palace Sites	28
Invetigation of the Ancient <i>Tanjo-butsu</i> (Statues of Infant Buddha)	37
On Ancient Roof-tiles Presented by Mr. Takeyoshi	38
New Drawing Method for Stone Implements and It's Application	39
Information Management Activities of the Center for Archaeological Operations	40
Survey of the Group of <i>Kanjō-dōrō</i> (Earth cicle for Burial) at Kiusu, Chitose City	42
Physical Layout of the Nara and Fujiwara Palace Sites	43
Conservation Science for Site and Relics(6)	46
Building for In-service Training of the Center for Archaeological Operations	49
Plan of the Nara Palace Site Museum	50
Chronological Study on <i>Mitesaki</i> Structure	52
Reconstructed Model of the Aristocratic Residence in Ancient Metropolis of Nara	53
Research Abroad by the Affiliate of the Institute	54
Summaries of Open Lectures Held by the Institute during 1978	55
Other Specific Reserches and Survey	56
General Catalogue of the Annual Bulletin Published during 1958~1978	61
Organization and Activeties of the Institute	65

Published by

Nara National Cultural Properties Research institute

Nara, 1979